性慾論・禁制論

フロイド
精神分析
学全集 L

T·I·P·A·

精神分析学研究所

フロイド精神分析學全集

性慾論・禁制論

矢部八重吉譯

精神分析學研究所

春陽堂

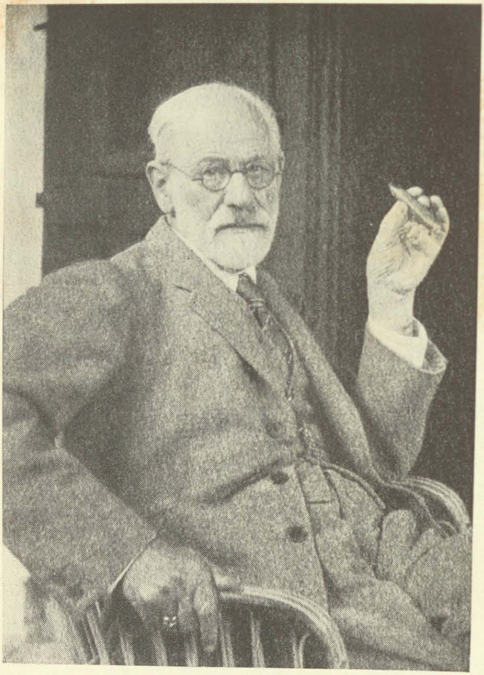
フロイド精神分析學全集

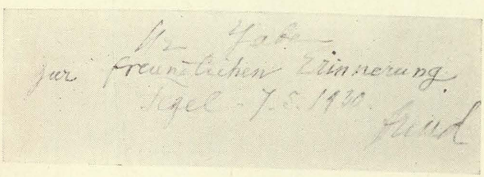
性慾論・禁制論

矢部八重吉譯

精神分析學研究所

春陽堂版





原著者と筆蹟

譯者序文

本書は『フロイド精神分析學全集』の第五卷に相當する。內に收められたものは『性說に關する三論文』„Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie" (1925) と『禁制と徵候と杞憂』„Hemmung, Symptom und Angst," (7 Aufl, 1926) とである。

『性說に關する三論文』は精神分析から見た、卽ち專ら無意識心理現象として見た性慾の硏究であつて、精神分析が一口に汎性論と呼ばれて誤解されてゐることに對する辯明であり解說であり論駁であつて、フロイド著書中最も熱あり興味あり、且つ有名なものゝ一つであることは、精神分析學者間に於いても、またその論敵の間に於いてさへも認められてゐるので、精神分析の豫備知識のないものにも、理解し易からうと思はれる。具體的の論述が大部分を占めてゐるので、本論文を讀了することに依つて人生に對する深き新たなる開眼を經驗するものはあながち譯者のみではあるまい。

『禁制と徵候と杞憂と』は自我とエスと超自我との葛籐關係からさまぐな無意識願望の禁制とその禁制のために現れる徵候と不安との比較、等差、由來を論じたもので、本全集の第四卷『快不快原則

を超えて』（對馬完治氏譯）竝びに本全集の第七卷中の『自我とエス』などから發展し來つた論旨であつて、從つてそれ等と比較精讀すべき文獻である。フロイドの思想の窮極の發展を示す新しい論究として重要なるものである。猶、興味あるは、ランクの出産外傷說に對する批評の試みあることで、ランク及びその出産外傷說に就いては『附錄』の相當個所及び本文一五〇頁を參照せられ度い。

自分は何れも英譯に基いたが英譯には不完全な個所があるので、『性說に關する三論文』の方は大槻憲二氏に、『禁制と徵候と杞憂』の方は對馬完治、淺羽武一兩氏に乞うて獨原書との嚴重なる校合を經た。この點特に記して感謝の辭に代へる。

右は昭和六年に於ける初版時の序文であるが、こゝに第三版を出すにあたり、『性慾論』の方のみは大槻氏に乞うて相當の程度に改訂を加へた。『禁制論』の方にはその改訂の筆は及び兼ねたが、次回重版の節には十分にその望みを達したいと考へてゐる。（昭和十三年十月）

譯者識

目次

目次

禁制と徵候と杞憂

目次終

性說に關する三論文

第三版序文（原著者）

本書初刊以來十年間の世間の受容と效果とを觀察して、私はこゝに第三版を公にするに當り、多少の序言を附して世間の誤解と實現すべからざる要求とに對して應ふるところあらんとするものである。それ故に、こゝに述べたることは全然日常の醫師の經驗から發したものであり、精神分析的研究の結果に依つて深められ、學的に有意義なものとなされねばならないと云ふことを、殊に強調すべきである。三つの『性說に關する論文』は、精神分析が承認する必要のあること、または確言し得ることをのみ取扱ふことが出來るのである。從つてこれ等三論文を一つの『性說』にまで擴充することは避けてあるし、また性生活一般の多くの重要なる諸問題に觸れないことは當然である。併しながら、その故にとて人々は、著者がこの大きな題目の諸章を看過して氣付かず、或は枝葉の事として不問に附するものであるとは信じないであらう。

本書編著の動機が精神分析の經驗に負ふものであることは、併しながら、單にその材料の選擇に現れてゐるのみならず、またその配列の上にも見られるのである。普く一定の審級的順序が守られてあつて、まづ偶然的契機が先行し、本質的契機が背後に廻してある。さうして個體的發展は種族的發展

よりも力をいれて考査することにした。偶然的なものは、つまり主役を分析に於いて演じてゐる。でそれは分析に依つて存分に剔抉されるが、素質的なものは偶然的なもの丶後に、經驗に依つて喚覺まされる或るものとなつて始めて露はれる。その或るもの丶評價は、併し、精神分析の仕事の範圍を遙かに越えてゐる。

同樣な關係は個體發生と種族發生との間に支配してゐる。個體發生は、それが最近の體驗に依つて變化されざる限りは、種族發生の繰返しとして認めることが出來る。種族發生の機構は個體發生の過程の背後に認められる。併し根柢に於いては、素質は種の早期體驗の殘物に外ならない、その殘物に對して個々人の新たなる體驗は偶然的契機の總量となつて附加はるのである。

精神分析的研究に全然依憑するものであると共に、生物學的研究からは故意に獨立させてあるのが本書の特色であることを、私は斷つておかなければならない。一般的の生物學的性觀からの、又は特殊の動物種からの學的期待をこの研究中に導入することは、私は務めて避けるやうにした。その事は人間の性機能を精神分析法を以て研究する事に依つて爲され得るのである。何れにもせよ、私の目的は、精神分析的研究法を以てして人間の性生活の生物學に何程の貢獻をなし得るものであるかを知らしむるにあつたのである。この試みをなすに當つて如何に多くの增加と一致とがあつたかを示すこと

は出來たが、而も私は、精神分析的方法が多くの重要な點に於いて、單なる生物學的基礎に立つ見解や歸結を止揚することがあつても、敢へて遲疑するを須ひなかつたのである。

私はこの第三版に於いて多くの增補を企てたが、併し從前の諸版に於ける如くこの版を特種の徵象を以て目立たしめることを敢へてしなかつたのである。——我々の分野の學術書は現在のところその進步を緩慢にしてゐるが、併し今後に出づべき精神分析的文獻との聯絡をとつておくためには、本書の增版は必ずしも不必要ではなからう。

一九一四年十月、ヰインにて

第四版序文（原著者）

大戰時代の大濤が退いた後に、精神分析的研究に對する興味が世界中になほ障害を受けずに殘つてゐることを知つて、吾人は甚だ滿足に思ふものである。併し斯學のあらゆる部分が同樣の運命を享受したのではない。無意識、抑壓、病氣に罹る葛藤、病氣の結果、徵候構成の機制などに對する精神分析の純粹に心理學的の說明乃至發見は愈々一般の承認を得、またその主立つた反對者の間にさへ注意を呼醒すことになつた。斯學が生物學と接觸交涉する部分に就いては、本書中にその根本を述べておいたが、なほ熄むことなき反對を招き、斯學を久しく熱心に研究してゐた人々でさへも斯學を離れて別の見解に就いた者がある。そのやうな別の見解では、常態竝びに病的の精神生活に對する性的契機の役割は再び限定せられねばならなかつたのである。

とは云へ私は、精神分析學のこの部分が他の部分よりも、現實に照して見て非常にかけ離れてゐるとの假定に變說することは出來ない。いろんな記憶やその後新たに試驗して見たところに依ると、この部分とても同樣細心な、こぢつけたりしない觀察から生れたものであることを私は知るのである。而も公然たる承認に於いてこの部分だけが切離されてゐると云ふことは、これを說明するに困難はな

いのである。第一に、分析を患者の極幼年期にまで辿るだけの忍耐と技術上の熟練とを有する研究者のみが、こゝに述べてある如き人間の性生活の始まりを確認する事が出來るのである。ところが醫者の治療と云ふものは病氣をどうやら手取早く癒さうとするものであるからして、右に云ふやうな確認に達することが屢々困難になるのである。而も、精神分析を行る醫者も他にあるにはあるが、彼等とても到底この境地にまでは達せず、從つて自分自身の反感や先入見に依る影響を被らないやうな判斷を下すことが不可能になるのである。小兒を直接的に觀察することを人間が知つてゐるならば、抑々これ等の三論文などは書かずともよかつたのである。

さて併し人々の忘れてならないことは、本書の內容の或るものが、例へば人間のあらゆる行爲に對して性生活の意義を强調してあること、本書中に於いては性の概念を擴大してあることなどが、旣に以前から精神分析に對する反抗の最も力强き動機となつてゐると云ふことである。全豹を云ひ表はすやうな標語を求めて人々は極端にも精神分析を『汎性慾說(パンセクシュアリスムス)』と云ひ、精神分析は『何でもかでも』を性から說明するものであるとの、あらぬ非難を加へるやうになつたのである。人間は感情の效果に眼が眩むと自分をすら忘れるものであることを呆れることであらう、もし呆れる力があるならば……。何となれば、哲人アルトゥール・ショウペンハウエルは旣に大分以前に、人間の行爲や目的が性的努

カ――この語の通常の意味に於ける――に依つて如何なる程度まで決定せられてゐるかを示したが讀者界はそのやうな素晴らしい警告の意味を十分に解することは出來なかつた。性の意義の『擴張』は小兒や所謂變態者の分析に依つて必要に迫られたのであるが、この事に關しては、自分等のより高い立場から精神分析を眼下に見下す總ての人々が、精神分析の所謂廣義の性が神の如きプラトーンのエロスと一致するものであることを考へて貰ひたいものである。(ナハマンゾーン Nachmansohn『フロイドのリビドー說とプラトーンのエロス說との比較』精神分析學雜誌、第三卷、一九一五年)。

一九二〇年、五月、ヰインにて

第一論文

性の錯誤（一）

註（一）此の第一論文中にある諸問題はクラフト・エービングKrafft-Ebing; モール Moll, メビウス Moebius, ハヴロック・エリス Havelock Ellis, シュレンク・ノーチング Schrenck-Notzing, レーヴェンフェルト Lövenfeld, オイレンベルク Eulenberg, ブロッホ J-Bloch, ヒルシュフェルト Hirschfeld 等の著名な刊行物と、ヒルシュフェルトの編纂になる『性中間級年報』の報告から得たものである。またこの題目に關する爾餘の文獻がこれ等の刊行物中に擧げてあるから、參考書に就いては細々した事は略しておいてもよからう。同性愛を精神分析的に觀察して得た結果では總て、サドガー Sadger の報告及び私自身の實驗に基く。

人間と動物とに存する性的慾望の事實を云ひ表はすために、生物學では『性本能』なるものを假定する。これは食物攝取の本能、即ち食慾（フンガー） Hunger との類似に倣つての假定である。『食慾』に相當する性的本能關係の言葉が一般語に缺けてゐるから、精神分析學に於いては『リビドー』Libido なる言葉を用ゐることになつてゐる。（一）

註（一）獨逸語の Lust（快樂）は唯一の適合語であるが、これは遺憾なことには意味が多く慾望の感覺と同樣に滿足の感覺をも表すことになる。

一般の人々はこの本能の性質と特質とに就いては考へを全然定めてしまつてゐる。性本能は子供にはないものであり、思春期になり成熟し來るにつれて起り來るものであり、異性に對する抗し難き牽引力と云ふ形で現れるものであり、またその目的は性的合致、又は少くともその合致に至るべき途上にある性的の行動であると考へられてゐるのだ。

併し、かう云ふ見方は甚だ事實に合はないものであることを認めるあらゆる根據が、我々にはあるのである。かう云ふ見方をもつと鋭く調べて見るならば、そこに誤謬と不正確と輕斷との甚だ多いことを知るのである。

二つの術語をまづ定めておかう。性的魅力を感ぜしめる人物を性的對象と呼び、この本能に驅られて行ふ行爲を性的目的と云ふ。さて、經驗を科學的に精査して見ると、性的對象と性的目的とに關して無數の變態のある事が分り、さうしてその變態が所謂常態に對する關係は立入つた探究を必要とするのである。

第一章

性的對象に關する變態

性本能に關する一般人の考へ方は、人間が男女の二つに別れて、それが愛に於いて再び結合しようと努めるものだとの寓話に於いて最も美はしく云ひ表はされてゐる。であるから、男にして女でなく男を、女にして男でなく女を、性的對象に擇ぶやうなものがあるといふことは、甚だ不思議に聞えるのである。そのやうな人物を逆性者又は同性愛者と呼び、そのやうな事實を同性愛と呼ぶのである。かゝる人物の數は非常に多く、それを一層確實に算定することは甚だ困難である。(一)

註(一)　この事が如何に困難であるかと云ふこと、並びに同性愛者の比例數を算定することに就いては「性中間級年報」の一九〇四年の仕事を參照せられよ。

(A)　同性愛(Die Inversion)

同性愛者の態度

同性愛者はさま〴〵な方向に對して、非常にさま〴〵な態度をとるものである。

（a）完全同性愛者　これは同性のみが性的對象となり得、異性は決して性的憧憬とはならずして彼等を冷然たらしめ、或は嫌厭さへ起すものである。男であれば、この嫌厭のため常態の性行爲を果すことが不能になるか、或は性行爲に際して何等快樂を得ないものである。

（b）精神的兩性具有者　これは同性異性の二つが性的對象となり得る。それ故、いづれか一方の性のみを目的とする特性はこの同性愛には缺けてゐる。

（c）偶然的同性愛者　これは或る一定の外的條件より起るもので、殊に常態の性對象の不自由から、或はその模倣から屢々起るものである。彼等は同性を性的對象として性行爲の滿足を得るものである。

同性愛者たちが自分の性本能の特質をどんな風に考へてゐるかと云ふに、それはまち〳〵である。或る者は同性愛を常態者が自分のリビドーの方向を自明と考へるやうに自明と認め、常態者と同樣自分の性本能の正當なることを鋭く主張する。併し他の或るものは自分の同性愛の事實に反抗して、それを病的强迫と感ずる。（一）

註（一）同性愛への强迫に對する左樣な反抗は、暗示療法又は精神分析の影響力に依つて、これを喚起すること

か出來る。

なほ多くの變化が時間に關係して生ずるものである。記憶が達し得る限りの遙か前から、同性愛の特質がある人もあり、或は思春期の前後の或る一定の時期に於いて、始めて同性愛を氣付いた人もある。(一)この同性愛の特徴は一生涯保存せられることもあり、或は一時消失することもあり、或は常態發達の途上の挿話として現れることもある。實に同性愛は長い期間常態的性活動を續けてゐて遲くなつて始めて現れることのあるものである。また常態的性對象と同性愛的性對象との間の週期的轉換を見ることがある。特に興味ある例としては、常態的性對象に苦痛な經驗を味つた後には、リビドーは同性愛の方に興味を持つやうに變化して行くことである。

註(一) 同性愛的傾向の一時的出現に關する同性愛者の自叙傳的陳述の信賴し難いことが、多くの方面から語られてゐるのは當然である。何となれば、同性愛的傾向は異性愛的感覺の證據を忘れさせてゐることがあり得るからである。精神分析で取扱ひ得る限りでの同性愛の例に就いて見ると、果してこの通りであつて、小兒時代の健忘を復活させる事に依つて、誤てる想起を決定的に正した。

かう云ふ變化のいろ〳〵の種類は通常お互に獨立してゐるものである。最も極端な同性愛の例に就いては、我々は殆ど必ず常に同性愛がずつと早期から存在してゐるものであり、また彼等が自分の異

常を異常と思つてゐないことを確認出來る。

多くの學者は、こゝに擧げた諸々の場合を或る單一なものに總括することに反對して、寧ろこの種種な例の共通點よりは相異點を主張し、つまり自分等の理論に都合のよいやうに同性愛を判斷するであらう。併し區別が正當に出來るとしても、總て中間階級にあるものが多いから、同時にその種類構成が云はゞ自然に出來上つて來ることはどうしても否認出來ないのである。

同性愛の解釋

最初は、同性愛は神經質的頽廢の生れつきの徵候であらうと解釋されてゐた。さうしてこの解釋は醫學的觀察者が、神經病患者か或は左樣な樣子のある人物に就いて同性愛を見たと云ふ事實と符合してゐた。此の特質に於いてはお互に別々に判斷さるべき二つの問題が含まれてゐる、卽ち生れつきといふことゝ頽廢といふことゝである。

頽廢(Degeneration)

この頽廢と云ふ言葉を不用意に使用した爲めに議論が起つてゐる。全く外傷性原因或は傳染性原因のない、あらゆる種類の病氣を頽廢と云ふ慣はしになつてしまつてゐる。マグナン氏の頽廢の分類に依ると、神經作用が一般に完全なる場合にも頽廢なる概念を用ゐることすら出來るやうになつた。然

らば『頽廢』てふ考へ方は結局如何なる價値と如何なる新しい内容を有つであらうか。次のやうな場合には、頽廢として論じないのが至當のやうに思はれる。

(一) 常態者と比べて幾多の重大な相違が共存しない場合。

(二) 能力と生活力とが概して強く障碍されてゐない場合。(一)

註 (一) 頽廢に對する診斷はどれほど割引してかゝるべきか、また臨床的にも如何に意味がないかは、メビウスの詳論(「頽廢的に就いて」。「神經と精神生活の範圍の問題」。一九〇〇年、第三卷。)から抽出することが出來る。即ち、『こゝで多少明かにした變質 Entartung の廣い範圍を一見するならば、變質一般を診斷するのは全く價値の少いものであることが直ちに判る。』――

同性愛は右の正しい意味での頽廢でないことは、次の多くの事實から證明し得る。

(一) 常態と比べて特別重要な相違を示さない人物に同性愛を見る。

(二) 能力が障害されてゐないばかりか、確に知識が特別に發達し、道德的敎養に卓越した人物にも、同様に同性愛を見る。(一)

註 (一) 我々がよく知つてゐる二三の卓越した人物が同性愛者であつたことを、絕對的の同性愛者であつたことを、『ウルアニスムス』の主唱者に同じ、承認しなければならない。

(三) 臨床家として取扱つた患者から眼を轉じて、もつと廣い見解をとるやうに努めるならば、我

我は二つの傾向を事實上に認めるやうになる。さうしてその二つの傾向のために我々は同性愛を頽廢の徵象と認め得なくなるのである。即ち――

a　同性愛は度々起る現象であり、古代民族が文化の最高頂に於いて重要なる機能を持つた一制度であつたことを重大視しなければならない。

b　頹廢の概念は高尙な文明人に對してのみに限られる慣はしになつてゐる（ブロッホ）が、同性愛は多くの野蠻人と原始人との間に非常に擴まつてゐる。歐洲の文明人の間でさへ、氣候と人種との如何に依つて、同性愛の蔓延の仕方、竝びにそれへの讃否が重要な影響を被つてゐる。（一）

註（一）　同性愛の見方に於いて病理學的見地は人類學的見地に囚はれてゐない。これはブロッホI. Blochの功績である。（性的精神病の原因に關する論文、第二卷、一九〇二――三年。）なほ氏は古代文化人に就いての同性愛の事實を證明してゐる。

先天性

先天性は當然、第一の、即ち完全同性愛の種類に對してのみ主張される。確に、かゝる人物を調べて見ると、彼等は一生涯中まだ一度も異性愛的性本能を示したことがないと云ふ證據に依つて主張出來る。他の二種類、殊に第三種は、先天性の特質と一致させて考へることは困難である。故に、かゝ

る考へを主張する人々は、完全同性愛をすべて他の同性愛から分けようとする傾向になるが、これでは一般の價値ある同性愛の說明を放棄する結果になる。これに從へば、同性愛は或る場合では先天的特質であることになり、他の場合では別途から起つて來ることになるであらう。

この考へ方とは反對に、同性愛は性本能の後天的特質であると云ふ考へ方がある。これは次の事實に依る。

(一) 多くの同性愛者(並びに完全同性愛者)に於いては、幼時生活中に一つの强い性的印象を受けてゐることが證明され、この性的印象の連續の結果としてこの同性愛の傾向が現れてゐるのである。

(二) 他の多くの同性愛者に於いては、促進的性質の外部的影響と禁制的性質の外部的影響が證明せられる。これ等の影響が其の人の早期に於いて、或は後期に於いて、同性愛の定着に導いたのである。(その內には、同性と專ら關係を持つてゐたこと、戰爭中に同性同志でゐたこと、獄舍中に禁錮せられてゐること、異性交際の危險、獨身、性的無力などがある。)

(三) 催眠術の暗示が同性愛を取除くことが出來る。この事は先天的性質の同性愛に就いては不思議とせられるであらう。

これ等總てを考へ合せて見ると、先天的同性愛の存在は慥に疑はしい。これに對してはかう云つて

反對することが出來よう。即ち、先天的同性愛者とされてゐる人間をもつと正確に調べて見ると、リビドーの方向が早期幼兒時代の經驗に依つて決定されてゐるらしく、その經驗は意識には保留されてゐないが、適當な影響を加へれば記憶に齎すことが出來るのだと。(ハヴロック・エリス。)エリスに依れば、同性愛は、性本能がいろ〳〵な外的の生活事情に決定せられて屢々變化を生ずるに過ぎないのだと云ふことが出來ると。

これは一見確實なるが如くであるが、併し、少年時代に誘惑、相互自慰などの性的影響を受けてをりながら同性愛者とはならず、或は同性愛に終始しなかつた人々が明かに澤山あると云ふ事實の反證に依つて、これは覆される。そこで、先天的か後天的か何れかに定めようとするのは不十分であるか、或は同性愛に現れてゐる事情を總て掩ふには足りないか、何れかであることを、假定せざるを得ない。

同性愛の説明

同性愛の本性は、それが先天的であるとの假定に依つても　後天的であるとの假定に依つても、説明されない。第一の場合に於いては、人は或る特定の性對象と結びつくべき或る先天的な性本能を齎すと云つたやうな粗雜な説明に滿足しない以上は、我々は先天的同性愛の本性中に何があるかを云つて貰はねばならない。第二の場合に於いては、いろ〳〵な偶然的影響に途中で應ずるだけの何物かゞ

個人の內になかつたとすれば、果して之れ等の偶然的影響だけでさう云ふ變態性の獲得を說明し得るに足るものかどうかと云ふことが問題になる。この個人の內の何物かを否定することは、我々の前に述べた諸々の結論に照して容されない。

同性愛は如何にして起るか

フランク・リズトン Frank Lydston, キールナン Kiernan, シュヴァリエ Chevalier 等の時以來、一聯の新觀念が起り、それが同性愛を說明するための導きとなつた。これ等の觀念には、從來一般の信念であつたところの、人間は男であるかさもなければ女だとの考へに對する新たな撞着を含んでゐる。科學の示すところに依ると、或る場合には性的特質はぼかされ、かくして性的區別は、殊に解剖的基礎の上に於いては困難となつてゐる。さう云ふ人物の性器は男性的特質と女性的特質とを結合してゐる（兩性具有 Hermaphroditismus）。稀には、性的器關の兩方の部分が十分に發達し（眞の兩性具有）、而も大抵は兩方が鈍つてゐる場合がある。（一）

註（一） 肉體的兩性具有の最近の詳論參照。タルフィ Taruffi の兩性具有と性殖不能。トイシェルのドイツ版一九〇三年。なほ性的中間級年報の多くに發表されたノイゲバウエル Neugebauer の報告。

これ等の異常が何故に重要かと云ふに、それは常態的形成を理解する上に意外に助けとなるからで

ある。解剖的兩性具有は實際或る程度に於いて常態者に屬してゐるのだ。常態的形態を具へた如何なる男女に於いても、異性の器官の痕跡を殘してゐないものはない。これ等の痕跡は不熟の器官として機能なく存續してゐるか、或は他の機能を引受ける目的のために形が變つてゐるのだ。

この解剖的事實は旣に永く知られてゐるが、この事實から我々の纒める考へは、兩性具有が本來先天的であると云ふことである。ところがその先天的な兩性具有が發達の間に單性具有に變化して、そのあとに鈍つた性のかすかな殘骸を遺すことになつたのである。

この考へ方を心的方面に移して變態としての同性愛を心的兩性具有の表現と考へるやうになつたのは自然である。この問題に決着をつけるためには、他の事情が一つだけ必要であつた。即ち精神的竝びに肉體的の兩性具有が存するところ、常に必ず同性愛が存すると云ふことである。

併しこの第二の期待は外れた。假定せられたる精神的雙形（ふたなり）と證明せられ得べき解剖的雙形との間の關係は、決してさう緊密なりと考へらるべきではない。同性愛者には屢々性的衝動（本能）の低下（ハヴロック・エリス）、竝びに器官の多少の鈍化が認められる。併し、この事は屢々認められるが、決していつもきまつて、或は主に、認められると云ふのではない。このやうに我々は、同性愛と肉體的兩性具有とは相互に全然獨立したものであることを認めざるを得ない。

また所謂第二次的第三次的の性的特質が重要であり、さうしてそれ等の特質が一緒になつて同性愛者に起ることが强調されてゐる。（ハヴロック・エリス。）これには多くの眞理が含まれてゐるが、併し忘れてならない事は、第二次及び第三次の性的特質は他の性に於いて現れることが甚だ屢々であり、かくて變形を示してゐると云ふことであるが、併しこの變形には同性愛の意味での變化が、性對象に就いて起つてゐるのではないのだ。

もし性對象上の同性愛化に平行して、それ以外の精神的特性が異性の特徴に變化するならば、精神的兩性具有は實質的となつて來るであらう。併しさう云ふ特質の同性愛化が多少規則的に期待出來るのは、たゞ同性愛的婦人に於いてのみである。男子に於いては最も完全な精神上の男らしさが同性愛者に存し得る。もし人々が精神上の兩性具有にあくまでも固執するならば、その人は或る方面に於いてはそれの顯現には正反對の要素はほんの僅かしか認められないと云ふ事を云ひ添へておかなければならない。肉體的兩性具有に就いても同じことは眞理として通用する。ハルバン Halban（一）に依れば、個々の性器官が鈍化することゝ第二次的の性的特質とは相互に全く獨立してゐる。

註（一）ハルバン『性的特質の發生。』婦人科記錄、一九〇三年、七〇卷。またその內なるこの問題に關する文獻參照。）

男性的同性愛者の或る辯護者は兩性具有說を最も生硬な形で次のやうな言葉を以て述べてゐる。『男の肉體に女の頭腦の宿つたものである』と。クラフト・エービングの推測的說明はウルリッヒの說明よりも正確な形を得てゐるやうに見えるが、併し本質的には違つてはゐない。兩性具有は先天的素質で、それに依つて個々の男女は腦中樞と肉體的性器官とを同樣に與へられたとクラフト・エービングは考へてゐる。これ等の中樞は主に獨立した生殖腺の影響の下に思春狀態へと發達する。併しながら我々は同じことを、男女性の『中樞』に就いても、男女性の頭腦に就いても云ふことが出來る。併しその他面に、吾人は言語中樞に對しても、性機能の腦中樞に對すると同樣に假定してよいかどうかを知らない。(一)

註(一)『性的中間級年報』の第六卷に依れば、兩性具有を以て同性愛を說明せんとした最初の人はグレーE. Gley であつたと考へられてゐる。彼は既に早く一八八四年一月に『哲學評論』中に一文(『性本能の異常』Les Abérration de l'instinct Sexuel) を公にしてゐる。更にまた注意すべきことは、同性愛の起源を兩性具有に歸してゐる大部分の學者たちは、同性愛に對してのみならず、また常態に發達した者等に對してもこの素因を假定してをり、さうしていみじくも同性愛を發達障害の結果として解釋してゐると云ふことである。これ等の學者の內にはシュヴァリエ(同性愛 Inversion Sexuelle, 1803) 並びにクラフト・エービング(„Zur Erklärung der konträren Sexualempfindung," Jahrbücher f.

Psychiatrie u. Nervenheilkunde, XIII)がある。後者は、そこから(下積みにたつてゐる性の)少くともこの第二の中樞が實際に、連續して存在する如き、さう云ふ若干の觀察を述べてゐる。またアルデュイン博士 Dr. Arduin(『婦人問題と性的中間階級。』『性的中間階級年報』第二卷、一九〇〇年)は『萬人は男女の兩要素を有してゐる』と述べてゐる。また同じ年報の一八九九年の第一卷(『同性愛の客觀的診斷』ヒルシュフェルド、八——九頁)を參照せよ。異性愛的人物に關する限りでは、性の決定には、或るものが他のものよりは不釣合に强く發達してゐる。——ヘルマン G. Herman は『一切の女には男性の種と性質とがあり、一切の男には女性の種と性質とがある』ことを確信してゐる。(『發生——生殖の法則』九卷、リビドーとマニイ、一九〇三年。)近くは一九〇六年にフリイス W. Fliess(„Der Ablauf des Lebens")は二重性 Zweigeschlechtigkeit の意味に於ける兩性具有の觀念は自分に出づるものであることを主張した。——非專門的の仲間に於いては人間の兩性具有を問題にし始めたのは若くて死んだ哲學者ワイニンゲル O. Weininger であると云ふ向きもあるが、ワイニンゲルはこの見方を彼のいささか輕卒な考へ方の著書(『性と性格』一九〇三年)中の骨子としてゐる。右に述べ來つた證明に依つて、この考へ方のワイニンゲルに出づるものに非ざることが分るであらう。

右の論議からして、とにかく二つの考へが殘る。第一は素質的兩性具有はまた同性愛に對しても假定せられると云ふことだ。たゞ我々はそれが解剖的構成以上に何に依つて成立つてゐるかを知らないだけだ。又第二に殘る考へは、性本能がその發達中に如何なる障碍に遭遇するかが問題であると云ふ

事だ。

同性愛者の性對象

精神的兩性具有の說は、同性愛者の性對象が常態者のと正反對だと云ふことを豫想してゐる。同性愛の男は、婦人と同じく、肉體や心の男らしい性質から發する魅力に虜となる。彼は自分を婦人のやうに感じて、男を求める。

併し、この事はよしんば非常に多數の同性愛者に對して眞理であるにもせよ、その事が同性愛の一般的特質を示すものでは決してない。大部分の男子同性愛者が男らしさの精神的特質を保持してゐること、彼等が他(女)性の第二次特質を割合に少しゝか示さないと云ふこと、また彼等が實際はその性對象の內に本當の女性的特徵を探ねてゐることなどは疑ひの餘地がない。もしさうでなかつたならば、何故に男性の賣淫者が己れを同性愛者に供するに當り、その一切の外見に於いて、昔も今も、女の衣裳や態度を模するかと云ふことが理解出來なくなつて來るであらう。でなければかゝる模倣は同性愛者の理想に對する侮辱であらう。ギリシアでは最も男らしい人間は同性愛者の間に發見せられたが、彼等に就いて見ても、男の愛情を燃えさせたのは少年の男らしい特質ではなくて、その體格が婦人に似てゐること、竝びにまた羞恥心、愼ましさ、か弱さなどの精神的特性であることは、全く明か

である。その少年が大人となるや否や、も早成年男子の性對象となる事はやめて、今度は自分が少年を愛するやうになる。この場合に於ける性對象は、それ故に、他の多くの場合に於けると同じく、同性ではなくて兩方の性の特質を結合するもので、つまり男を求める本能と女を求める本能との妥協であるが、併し肉體(性器)の男性に依つて確然と條件づけられてゐる。つまり自分自身の兩性具有の鏡である。(一)

註(一) なるほど精神分析は今まで同性愛の起源の說明を十分に與へてゐないが、その發生の精神的機制を闡明し、この方面の問題を本質的に豐富にした。我々が今まで調べて來たあらゆる場合に就いて云へば、後年に同性愛者になるものはその幼年時代に婦人(大抵は母)に對して非常に激しい、併し短時期の定着を起し、さうしてその定着を克服した後に彼等は自分自身を婦人に同一化し、さうして彼等自身を性對象とするのである。つまり、彼等はナルシサス的根據から進んで、彼等自身に似た者者を求め、それを彼等は彼等の母が自分等を愛したやうに愛さうと欲するのである　更にまた我々は、札付の同性愛者も決して女の魅惑に不感なのではなく、婦人の惹起す亢奮を常に男性對象に轉嫁するのだと云ふことを屢々發見したのである。かくて彼等は生涯の間、自分の同性愛の起源となつた機制を反覆するのである。彼等が強迫的に男子を求めるのは、彼等が不斷に婦人から逃れようとしてゐるためであることが分るのである。

精神分析は同性愛者を特別な性質を有する一群として他の人物から引離す試みに猛烈に反對する。明

かに外に見えてゐるもの以外の性的亢奮をも研究して見て、萬人は同性的對象を擇び得るものであり、また實際これを無意識の內に行つてゐることを精神分析は發見してゐる。實際、リビドー的感情を同性的人物に纏綿させることは、常態的精神生活に於ける素因として小さからぬ役割を果してゐるし、また病因としては異性に屬するものよりは大きな役割を果してゐるのである。精神分析に依れば、此の方向或は彼の方向に、制限のあるまゝに、或は常態となつたり同性愛となつたりする起源をなすものは、幼兒期、原始狀態又は有史以前の時代に見られるのと同じく、男性對象又は女性對象の選擇が全く自由であつた事にあるやうに思はれる。精神分析的の意味に於いては、男が女に對してのみ專らなる性的興味を持つと云ふはまた、說明を要する一つの問題であり、自明でなく、また化學的牽引力では說明し切れない問題である。性的行動が何れかに確定されると云ふは思春期以後の事で、それが如何なる素因の結果であるかはまだ明かでないが、その素因のあるものは素質であつて、他の素因は偶然的なものである。併し偶にこれ等の素因の或るものは非常に大となり、その特質に依つて結果に影響を及ぼす程である。併し概して、決定的素因の多種多樣であると云ふことは、常人の外部に表れた性的態度の多種多樣に反映してゐる。同性愛型に於いては太古的な體質と原始的な心的機制に依つて全然支配されてゐるのだと確言することが出來る。ナルシサス的對象選擇を重視することゝ、性的帶域として肛門に執着することゝは、その最も本質的な特色であるらしい。併しそのやうな體質上の特異を基礎として、最も極端な同性愛型を他の型から區別して見たところが、何も獲るところはない。後者に於いてどうやら適當な決定要素として發見せられるものはまた、過渡的型（タイプ）の素質中に、また明かに常態人の中に、その力こそ弱けれ

存在することが證明されるのである。結果に於ける相違は質的なものであるかも知れないが、分析して見ると、諸條件に於ける相違はたゞ量的のものたるに過ぎないことが分る。對象選擇の偶然的感化の內で一つの著しい素因としては、性の自拒又は早期の性的脅威を我々は發見した。また我々は兩親の存在が小兒の生活に於いて一つの重大な役割を果す事實に注意を牽かれたのである。幼年時代に强い父の亡くなることは同性愛の誘因となることは一再でない。最後に云つておきたいことは、性對象を同性に擇ぶと云ふことは、主觀に於いて性的特質の混合されてゐることゝ、概念上嚴格に區別されねばならないことだ。或る程度までの沒交渉はこの關係に於いても見遁せない。

同性愛の問題への數々の意味深き見地をフェレンチが或る論文――Zur Nosologie der männlichen Homosexualität (Homoerotik), Intern-Zeitschr. f. PsA., II, (1914)――中で論じてゐる。フェレンチは人々が同性愛(彼は Homoerotik と云ふ語を用ゐんと云ふ)てふ名稱の下に非常にさまぐな、有機的にも精神的にも比較にならぬ狀態を(それ等が同性愛を共通的に持つてゐるからとて)總括することを難じてゐるのは至當である。彼は、少くとも主觀的同性色情者 Subjekthomoerotiker と客觀的同性色情者 Objekthomoerotiker との二つの型を甄別しなければならぬと云ふ。前者は自分を女と感じ且つ振舞ふものであり、後者は全然男であつてたゞ女性的對象を以て同性者に代へてゐるだけである。前者を彼はマグヌス・ヒルシュフェルドの云ふ意味での本當の『性的中間級』であると認め、後者の方を彼は――あまり感服出來かねるが――强迫神經症者と呼ぶのである。同性愛的傾向への反抗並びに精神的感化の可能はたゞ客觀的同性色情者の場合に於いてのみ考へられる。またこ

れ等二つの型を認めたる後に、我々は附加へて云ふことが出來る。多くの人々に於いて或る程度の主觀的同性色情と客觀的同性色情とが混合してゐることが發見せられると。

近年に於いて生物學者の業績が、殊にスタイナッハ Eugen Steinach のそれが、同性愛並びに性的特質一般を明かにした。

種々な哺乳動物に就いて實驗的に去勢し、後に胚胎腺を植付けて見ると、雄を雌にすることも出來るし、雌を雄にすることも出來た。かくの如く變へて見ると、肉體上の性特質も心理的性的の態度（從つて主觀的色情も客觀的色情も）も多少とも十分にこれに應じて來る。このやうに性を決定する力のあるのは、性細胞を構成する胚胎腺ではなく、所謂有機體內の中間組織（『思春腺』）である。

嘗て結核病に依つて睾丸を害つた男に性的變調の來たゝめしもある。彼は性生活に於いては受働的の同性愛者として女子のやうに振舞ひ、第二次的種類の非常に明白な婦人的特徵（毛髮發生、鬚髯發生、乳房と腰部に脂肪の殖えたこと）を示した。人間の睾丸を移植した後にこの男は男らしく振舞ひ始め、彼のリビドーは常態に、女に向つて注がれるやうになつた。同時に、肉體上の女らしい特質は消失した。（『思春腺とその效力』A-Lipschütz, Bern, 1919.）

この美事な實例に依つて同性愛の學說が新しい基礎の上に立ち、また同性愛の一般的『治療』への途を期待することが出來ると云ふは、不當であらう。フリイス W-Fliess は正しくも强調してゐる、この實驗は高等動物が一般に兩性具有的であるとの學說を覆すものではないと。私は、そのやうな研究をなほ進めて見ると、一般に認められてゐる兩性具有の直接的な證明が與へられるやうに思ふのである。

婦人の場合の條件はもつと確定的である。婦人の能動的同性愛者は、特に屢々、身心兩方面に於いて男の特質を示し、その性對象中に女らしさを要求する。尤も、更に仔細に檢べて見るならば、なほ樣々な變化は發見せられるではあらうが――。

同性愛者の性目的

心すべき重大なる事實は、同性愛には性目的に就いて何等の統一がないと云ふ事である。男が肛門に依つて性交することは決して同性愛と云ふ事にならぬ。自慰も丁度同樣に屢々專らなる目的となる。さうして性目的を單なる感情の發露に限定することは、この場合に於いて異性愛の場合よりも、もつと屢々起る。婦人に於いてもやはり、同性愛者が口唇を以て性目的を果すことが好まれるやうである。

結論

今まで得てゐる材料からしては、我々は決して滿足の行くやうに同性愛の起源を說明することは出來ないが、我々はこれだけの研究に依つて、以上の問題を解決したよりももつと大きな意義ある洞察を獲得したと云ふことが出來るのである。我々は性本能と性對象との間にあまりに密接な關係を假定したことを氣付くのである。所謂變態の場合から獲た經驗に依つて我々は性本能と性對象との間に聯

結のあることを知るのであるが、その聯結をば我々は、常態の場合には一定の衝動（本能）に一定の對象を伴うてゐるらしい統一あるために見失ふ危險があるのである。かくて我々は衝動と對象との間のこの聯結を引離すことを敎へられるのである。性衝動は多分その對象から全然獨立したものであり、對象から來る刺戟に依つて發源するものではないのである。

B　性對象としての性的未熟者竝びに動物

常態的に適合せざる性の者を性對象として選ぶところの同性愛者は、その他の點では多分常態的の人で、さう云ふ個人は澤山あるやうに觀察せられてゐるが、性的未熟者（小兒）を性對象として選ぶものは初めから稀少な異常であると思はれる。小兒のみが專ら性對象となるのはたゞ例外的の場合だけである。小兒たちをかう云ふ役割に引入れるのは、萎微した不能の個人がこのやうな代償を必要とするためであつて、或はまた衝動的な、差し迫つた慾望がさし當り正當の對象を持ち得ざる場合である。併し性本能がそのやうな變化に堪へ、またそのやうにその對象を低下せしめるに堪へると云ふことが、性本能の本性に何等かの光を投ずることである。食慾の方はその對象にもつと固執してゐるものであるからかうは行かない。同じことはまた動物との性的關係――この事は農民の間に必ずしも稀でない

――に就いても云はれる。この場合には性的魅力は種の限界を超えるものである。

美的理由のために人々は、このやうな、竝びにその他の極端な性本能の異常を狂氣のせゐにしたがるが、併しそんなわけには行かない。經驗の敎ふるところに依ると、發狂者の間に於いても、正氣の人、又は全人種、全階級の間に於いて見られる性的障碍以外の障碍は少しも見當らないのである。かくて我々は恐ろしい程、屢々敎師や僕婢が小兒を性的に蹂躙する場合を見聞するのである。それは單に彼等がその最良の機會を持つてゐるために過ぎないのだ。發狂者は上述の異常をたゞいさゝか激しい形で示すのだ。つまり、特に重要なのは異常の方が專らとなつて常態の性的滿足の代りになると云ふ事實である。

常態から狂的にまで亙る性の段階的變化のこの甚だ著しい關係は、考察の材料を供する。事實を明かにして見ると、性生活の諸々の本能は、常態者と雖も、より高き精神活動に依つて殆ど支配し兼ねてゐるものに屬するやうに私には思はれるのである。何れの方面(社會的又は倫理條件の)にもせよ、精神的に變態な者は、私の經驗に依ると、その性生活に於いても必ず變態である。併し性生活以外の點では常人に相當するが、その方面だけで變態な者も少くない。彼等は人としての敎養は十分に發達してゐるのだが、併し性の方面はその弱點として殘つてゐるのだ。

これ等の論議の一般的歸結として、我々は、多くの條件の下に於いて、また驚くほど多數の個人の間に於いて、性對象の本性竝びに價値は背後に沒却されてしまふと云ふ事を知るやうになるのである。性本能に於いてはそこに異る何物かゞある。性本能は本質的にして不變なるものである。(一)

註（一）古代と現代との戀愛生活の間に存する最も著しい相違は、古代人が衝動それ自身に力點を置き、現代人は對象に置くと云ふ事實である。古代人は本能を喜び、それに依つて劣等なる對象をも高めんとしたに對し、現代人は本能の活動を活動として蔑視し、たゞ對象の取柄に依つて本能を默許するに過ぎない。

第二章

性目的に關する變態

常態の性目的としては、所謂交接なる行爲に於いて生殖器を結合させるにあるとされてゐる。これは性的緊張を解放し、性本能の一時的消失に導く。(空腹時に於ける飽食の滿足に比較される。)が、最も常態の性的過程にでも旣に一つの傾向があるのが認められる。この傾向の發達が異常に導いて行き、この異常は『變態』であるとされる。つまり、性的對象を撫でたり眺めたりすると同樣に、これを途中で(性行爲の途上で)いろ〳〵に扱ふ、それを準備的性目的と呼んでゐる。この行爲は一方では快感と結合し、他方では最後の性目的に達する樣に連續して行く興奮を亢める。この接觸の或る定つたものゝ一つは兩者口唇の接觸で、多くの民族に於いて(殊に文化の高い民族に於いて)接吻として强い性的價値を有つてゐる。たとへ、これが問題となる生殖器ではなく、消化器管の入口であつても、これと共に變態が常態性生活に結付けられ、性生活の分類に利用せられる契機となる。變態は(a)性的結合のためにとて定つてゐる肉體部分が解剖學的に違反すること、或は(b)常態に於いては最後の性

目的の途上で急ぎ通過してしまふ筈の、性對象に對する途中の關係に滯留してゐることである。

A　解剖的違反

性對象の買被り

性對象が性本能の願望目的として享受する精神的評價は、それの性器に限られることは殆ど稀で、寧ろ性對象の身體全部に擴がり、また性對象から起るあらゆる感覺をも含めようとする傾向がある。同樣な買被りは精神方面にも及んで來て、性對象の精神的行爲と美點に面して論理の混淆（判斷力の低下）を示し、また性對象から起つた判斷に對して信じ易く服し易くなる。戀愛するものが相手を信じ易い事は、よしんば權威の根本の源泉とはならないにしても、非常に重要な源泉となるのである。

註（一）　著者はこゝに催眠術者への被催眠術者の盲從を想起して、一言せざるを得ない。私はこの盲從と云ふことに依つて、催眠の本質が催眠術者の身に（性本能の被虐性的(マゾヒスティック)構成要素に依つて）無意識的にリビドーを定着させるにあることを察知した。フェレンチは暗示性と『兩親(エルテルン)コムプレクス』とを結び付けてゐる。（精神分析竝びに精神病理學年報、第一卷、一九〇九年。）

ところがこの性的買被りのために性目的が本來の性器を結合させることに限ることから脫線して、

性目的に他の肉體の部分を用ゐるやうに企圖せしめるやうになるのである。(一)

註(一) 併し對象選擇の機制が全部性的買被りで出來上つてゐるわけではないこと〻、身體の他の部分の性的役目に就いては後にもつと直接に説明するであらうと云ふこと〻を注意しておく。ホッヘとイー・ブロッホとは、性的興味が性器よりも他の關係部分に擴がつて行くことを説明するに『性亢奮慾』の事實を以てしてゐるが、著者にはこの意見は役に立たない。リビドーが移行する色々の道は交通する管のやうに互に最初から交渉してゐるので、我々は副的障碍を考慮に入れなければならない。

性的買被りの契機の意味は、男に就いて最も夙く研究され、男の戀愛生活のみは研究されるやうになつたが、女の戀愛生活は、一部は文化に依る萎縮のため、また一部は女の因襲的寡言沈默と不正直とのため、なほ測るべからざる暗黑にとり殘されてゐる。(二)

註(二) 女は典型的な場合に於いては男を性的に買被りしないが、自分の產んだ子供に對して殆ど買被りしないことはない。

口唇と口腔粘膜との性的使用

口腔を性官として使用する事は、相手の性器に自分の口唇を接觸せしめるならば變態と見做されるが、兩者の口唇を互に接せしめる時には變態とは見做されない。この最後の(接吻の變態からの)例外は、即ち常態に隣接する。恐らく人類の原始的時代から行はれてゐた斯かる風習を變態として拒ける

人は、拒けることに依つて明かに嫌惡の感を示すものであつて、その感情のためにかゝる性目的を認め得ないのだ。併しこの嫌惡の限界は、屢々全然因襲的である。例へば、美しい乙女と熱中して接吻する人も、多分この乙女の齒刷子を使用することはあまり感服しないに相違ない。よしんば自分の口喉に嫌惡がないからとて、これが乙女の口喉より清潔であると云ふべき根據が全くない場合にでも。こゝに於いてか、嫌惡の契機が問題となつて來る。この動機は、リビドーが性對象を買被る時に、それを妨害して起る。が、併し、自らの方でもリビドーに依つて征服されることがある。この嫌惡の内に我々は性目的を制限する力の一つを認めることが出來よう。通常これ等の力は生殖器の前ではひるむが、勿論異性の生殖器はそれ自身嫌惡の對象となり得るものであり、この事はすべてヒステリー（殊に女の場合）の特徴である。性本能の力はこの嫌惡を征服することに好んで努力する。（後段參照）

肛門の性的使用

右の場合よりももつと明白に嫌惡の認められるのは、肛門を性目的にしようとする時であつて、この嫌惡のためにかゝる性目的は變態として拒けられる。併しこの嫌惡の理由は、この肉體の部分（肛門）が排泄の用を果し、それ自身に於いて嫌惡すべきものたる排泄物に接觸するからであると云ふ人もあるが、それは丁度排尿の用を果すものであるからとて男性器を嫌惡するヒステリーの少女の云ふ

ことゝ同じやうで、著者には呑込めない。

肛門粘膜の性的役目は決して男同志の性行爲に限られた事ではなく、これを愛好するのは決して同性愛者特有の感覺ではない。それどころか、男のペディカティオは女との性行爲の類似に由るのであるらしい、同性愛者の性交に於いて最も夙く起る性目的が、お互に手淫し合ふことであるに拘らず……。

肉體の他の部分の性的意味

身體の他の部分に性が擴がることは、それが如何に變化してゐようとも、何も根本的に新しいことを提示しないし、また性本能を知解する上に就いて何等加ふるところもない。性本能はかく變化する事に依つて、たゞ性對象をあらゆる方面に於いて我物にせんとする意圖を示すのみである。併し解剖的違反では、性的買被りの外には一般にはよく判つてゐない第二の契機が現れてゐる。常に性的に用ゐられてゐる口腔粘膜や肛門粘膜と同じやうに、身體の或る部分は自らを性器として取扱はれることを要求してゐる。この要求が性本能の發達に依つて如何に當然の事となり、また或る病氣の徴候となつて如何に實現されてゐるかを我々は語るであらう。

性對象の不適當なる代償——崇物症

特に興味を感ぜしめるものは、常態的性對象が、それと關係はあるが常態的性目的を果すには全く不適當な他の性對象に依つて代償される如き場合である。分類の見地上、我々は既に性對象に關する變態の場合に於いて、性本能の最も興味あるこれ等異常の群に言及した方が、確によかつたと思ふ。併し、性目的の廢棄と結付いてゐるこれ等の現象に關係してゐる性的買被りの動機を知るまでは、これを延しておいたのだ。

性對象の代償は、一般に性目的に對しては甚だしく不適當な身體の一部分(足、髮)、或は愛してゐる人物の性と明かに關係のある無生物(衣服の一部、肌衣)である。この代償は、野蠻人が自分の神の具現と見た崇物(フェティシュ)(Fetisch)と比較しても敢へて不當ではない。

常態或は變態の性目的の放棄を伴ふ崇物症(フェティシズム)(愛玩症)へと移行するのは、性目的がどうしても達せられなければならないときに、性對象に向つて性的愛玩症の條件が必要とされる場合である。(一定の髮の色、衣服、肉體の不具でさへ)。病的の壘を摩する程の性本能の他の變化でも、性的崇物症の條件に依つて起つた現象のこの珍奇さほどには、我々の興味を呼ばない。常態的性目的に對する努力が或る程度まで低下することは、凡ての場合に豫想されることであるらしい。(生殖器作用の實行力減退。)(一)常態への結合は性對象を心理必然的に買被る事に依つてなされる。この買被りは當該性對象と聯想的

に結び付いてゐる一切のものに擴充されて行く。そのやうな崇物症の或る段階は、それ故に常態的戀愛には固有なものであつて、殊に、常態的性目的が阻まれてゐるか、或はその實行が止揚されてゐる如き戀愛の段階に於いて、さうである。

『あの娘の胸に觸れたことのある巾でも、沓の紐でもいゝから戀の形見に手に入れてくれ。』
„Schaff' mir ein Halstuch von ihrer Brust, Ein Strumpfband meiner Liebeslust!" Faust. I Teil.

註（一）この減退は豫め體質がさうなつてゐるためであらう。精神分析は偶然的條件として早期の性的脅威の存することを證明した。その性的脅威のために常態の性目的から引離され、それの代償へと追ひやられるのである。

病的現象は、そのやうな條件のなくなつてからも心が崇物へと定着し、崇物が常態的目的の代りになる場合に、更にまた崇物が一定の人物から離れて單獨の性對象となる場合に、始めて起るのである。これは性本能の單なる變化が病的錯誤となり行く場合の一般的條件である。

ビネー Binet が最初に主張し、その後多くの人々に依つて證明せられた如く、崇物の選擇には幼

兒期に受けた性的感化の影響が認められる。このことは我々をして、常態者の初戀の、諺にも云ふ通りの固執性(『人は常に初戀に歸る』„on revient toujours à ses premiers amours") を考へ合はさせる。そのやうな歸結の特に明白に見えるのは、性對象か單なる崇物病的制限を伴うてゐる場合である。早期の性的印象の意義に就いては、なほ他の個所に於いて論ずるであらう。(一)

註(一) 精神分析で、より深く研究したところに依つて、ビネーのこの主張を正しく批判する事が出來るやうになつた。これに關する總ての觀察に於いて、崇物と最初に出會したのだと云ふ事が論じてある。この崇物に於いて既に性的興味を持つてゐることを示してゐるのであるが、併し我々は隨伴事情からしては如何にしてこの興味を持つやうになつたかゞ分らないのである。またこれ等『早期』の性的印象は五六歲以後の時期に起る。尤も、精神分析では病的定着かそのやうに遲く新たに形成されるかどうかは疑はしいとなつてゐるが——。實際の事情では、崇物の起つたと云ふ最初の記憶の背後に、性的發展の忘却遺失された一つの様相が潜んでゐるのだ。さうしてその様相が崇物又は『隱蔽記憶』に依つて代表せられ、かくしてその様相の殘物竝びに沈澱物は崇物がこれを表現するのだ。小兒のこの一二歲の頃に起つた様相が崇物に轉向することは、崇物の選擇と同様に、素質に依つて決定されるのだ。

他の場合に於いては、崇物を以つて對象を代償せしめるものは、當人には多くの場合意識されざる思想の象徴的結合である。如何にしてこの結合がなされるかは、まだ曾て確實に證明されてゐない(足

は既に神話に於いて(一) 非常に昔からの性的象徴である。『毛皮』が崇物の役目を果すのは恐らく陰部の毛と聯想されるためであらう。)が、併しまたそのやうな象徴は幼児時代の性的體驗から決して獨立してゐないやうである。(二)

註（一） 從つてまた靴やスリッパは女性器の象徴となる。

（二） 精神分析は崇物の選擇が、抑壓に依つて忘れられてゐる糞塊の臭感快樂の願望に依存することを明かにすることに依つて、崇物の理解を大いに助けた。脚と髮とは强い匂ひのあるものであるから、今や不快な糞塊などを捨てた後には、これが崇物にまで擧げられるのだ。そこで、足の崇物を喜ぶ變態に於いては、汚い惡臭を放つ足のみが性的對象であるのだ。足を崇物症的に偏愛することを説明する今一つの論文は、幼兒の性に關する說の內に見られる。(後節參照。) 婦人に於いて男性器のないことを遺憾とするので、足をそれの代りにするのである。足の崇物症の多くの場合に於いては、元來性器があるかないかを見たいと云ふ本能であつたのが、下の方からその目的に近づかうとして、禁止と抑壓とのためにその途中で遮られ、そのために足又は靴を崇物とするやうになつたのである。その場合に於ける幼兒の考へとしては、婦人の性器は男の性器のやうなものとして考へられたのである。

（B） 豫備的性目的の定着

新しい意圖の出現

常態の性目的の遂行を困難、或は不可能ならしめる一切の外的內的の條件（不能、性的對象の高價、性行爲の危險）のために人々は準備的行爲に停滯し、新しい性目的を形成するやうになるものである。さうしてそのやうな新しい性目的が常態の性目的の代りとなるのだ。一見奇異に思へるこの新意圖も、なほ仔細に調べて見ると、常態の性的過程に於いて旣に行はれてゐることが分るのである。

接觸と熟視

或る程度までの接觸は、少くとも人間に對しては常態の性的目的を達するために缺くべからざるものである。また性的對象の皮膚に觸れる感覺に依つて一方如何なる快感が得られ、他方新亢奮の如何なる供給が得られるかは、周知の事である。それ故に、接觸の際に停滯してゐる事は、もし性行爲一般が延引されると云ふだけならば、變態とは云はれないことになるのだ。

次に、接觸から出て來た熟視に就いても同樣である。視覺の印象は、リビドーの亢奮が最も屢々覺醒される道である。で、淘汰の法則が這般の事情を考慮して――もしそのやうな目的觀的な見方を容認するならば――性對象を美しいものに仕立てるのである。肉體を被ひ隱すことは文化と共に進歩して、愈々性的好奇心を誘發し、隱れたる部分を引剝がすことに依つて性的對象を全的に見ようと努めるやうになつた。併しその好奇心は、人間がその興味を性器から離して肉體全體に移すことが出來る

やうになれば、美術的なものに誘導（『昇華』）せられるのだ。（二） このやうに性的に强調せられた熟視を以て中間的性目的に停滯してゐることは、或る程度まで大抵の常態者に起ることである。實際、彼等にはそのリビドーの一定量を、より高尙な藝術的目的にさし向ける可能力が與へられてゐるのだ。これに反し、熟視の快樂が變態となるのは、（a）專ら性器をのみ眺めんとする場合、（b）嫌惡の感を克服しつゝ快樂を得てゐる場合、（例へば偸視症者（ヴアイユール）、排泄機能を果してゐるところを眺めるもの）、並びに（c）常態の性的目的のために準備する代りにこれを抑壓する場合、などである。第二のは、露出症者の場合に明白に眞である。もし私が多くの分析からして結論することを許されるならば、彼等露出症者は相手にもその性器を同様にして示させようために自分の性器を露出するのである。（三）

註（一）「美」の概念が性的亢奮の土壤に根ざすものであり、元來性的魅惑（„die Reize“）を意味したことは私には疑ふ餘地がないやうに思へる。それを眺めることが最も强く性的亢奮を呼醒すところの性器それ自身は、元來決して「美しい」と認められないと云ふことは、右に述べたことゝ關係がある。

（二）精神分析に依つてこの變態なるものは、他の多くのものと同様に、その動機と意義とに於いて、非常に複雜多様なものであることが明かになつた。例へば、露出强迫症はまた非常に强く去勢コムプレクスに依憑するものである。露出强迫症は常に自分の（男の）性器の保全を强調し、女が男の性器を持たぬことに就いての幼兒的滿足を反覆してゐるのである。

見よう見られようと努める變態者に於いては、非常に著しい特質が認められる。その特質に就いては、次なる異常に於いてなほ我々の問題となるであらう。性的目的はこの場合、つまり二重の形で現れてゐるのだ。能動的と受動的と――。

偸視の快樂を阻み、さうして遂にこれを止揚してしまふところの力は、羞恥である。(以前の嫌惡の如く――。)

加虐性と被虐性

性的對象に苦痛を與へんとの願望、竝びにその反對は、あらゆる變態中最も屢々あるものであり、且つ最も意味あるものであるが、これはクラフト・エービングに依つて能動と受動との兩方の形態に、即ち加虐性(サディスムス)と被虐性(マゾヒスムス)とに命名せられてゐる。他の學者達はアルゴラニア(苦痛快樂)と云ふ狹義の語を好んで用ゐてゐるが、これは苦痛及び殘虐に於ける喜びを意味するものである。然るにクラフト・エービングの選んだ言葉はあらゆる種類の屈辱及び服從に於ける喜びを主にするものである。

能動的アルゴラニィ、即ち加虐性(サディスムス)の根が常態者に存してゐることは、容易に證明することが出來る。大抵の人間の性は一脈の攻擊的樣相を帶びてゐる。それは征服せんとする傾向である。何故にこのやうな樣相を帶びてゐるか、それの生物學的意義は、性對象の抵抗を求愛以外の行動で征服せんと

するにある。そこで加虐性は、獨立し誇張せられ、轉位作用に依つて前景に持出された性的衝動の攻撃的要素に相當するであらう。

加虐性の概念は用語の習慣に於いては、性對象に對する單なる能動的の、從つて權柄づくの態度から、この對象を征服し虐待することに專ら伴ふ滿足感に至るまでゝあつて、甚だ廣い。嚴密に云へば、たゞ最後の極端な場合だけが、變態の名に價する。

同樣に、被虐性と云ふ語は、性生活及び性對象に對する總ての受動的態度を包括する。それの最も極端なものとしては、性對象から肉體的又は精神的の苦痛を受けることに就いての滿足がそこに伴ふものがある。變態としての被虐性は、それの反對たる加虐性よりは常態的性目的からもつと立離れてゐるやうに思はれる。次に、被虐性は何時でも根原的に生ずるものか、或は恐らく何時でもきまつて加虐性の變形から生ずるのかどうかと云ふことが疑問になる。(二) 被虐性は加虐性の續きが我が身（その場合我身がまづ性對象の代りになつてゐるのだ）に向つて働くに外ならぬと云ふことが屢々認められるのである。被虐的變態の極端な場合を臨床的に分析して見ると、根本的に受動的な性的態度を誇張し定着する幾多の契機（去勢コムプレクス、罪の意識）が共同作用してゐるのを知るのである。

註（一）この後考究し直して見たところ、精神作用の機構並びにその內に働く種々の本能に就いての定說を認め

るやうになつた、被虐性に關する私の考へは從々變つて來た。私は或る本源的の――性慾的の――被虐性を認めるやうになつて行つた。この被虐性からしてその後二つの形式が、女性的被虐性と道德的被虐性とが發展し來るのである。人生には加虐性は竭きることはないが、これを我が身に轉向させることに依つて、第二次の被虐性が生じて第一次の被虐性に參加するのである。（『被虐性の經濟問題』國際精神分析學雜誌、第十卷、一九二四年、全集第五卷）。

この際に苦痛は克服されるのであるが、その苦痛は、嫌惡や羞恥と共にリビドーに對する抵抗として働く。加虐性と被虐性とは變態の內では特別の位置をとる。何となれば、それ等の根柢に横はる能動と受動との對比は、性生活の共通特徵に屬するからである。

殘忍性と性的衝動とが非常に密接に關係してゐるものであることは、人類の文明史がこれを敎へて疑ひの餘地を殘さないが、併しこれの說明に於いては何人もリビドーの攻擊的要素の强調以上には出でゝゐない。攻擊は性的衝動と混合してゐるもので、これは二三の學者に依ると、本來食人的快樂の名殘りであり、つまり取込みの裝置がそこに參與してゐるのである。この取込裝置は他の（胎生學的にはより古い）衝動の大きな必要を滿すに役立つのである。（また總て苦痛にはそれ自身、愉快なる感覺の可能が包含されてゐると主張する人がある。吾々としては、この變態に就いての說明として滿足出來るものはまだ決して與へられてゐないと云ふこと、また多くの心的努力は結合して一つの效果

に向ふことがありさうな氣がするだけで滿足しておかう。(二)

註(一) 後章に性慾發達の性器前期の樣相に就いての報告を參照せられよ。そのところに於いてこの見解が確められてゐる。『アムビヷレンツ』の條參照。

(二) 最後に引用した硏究からして加虐被虐の相反一對のための、本能に根差した一つの特殊の態度が導き出されて來る。その態度に依つて相反一對が一聯の他の『變態』中から選出されるのだ。

併し、この變態の最も著しい特徵は、能動受動の兩形式がきまつて同一人物に於いて共存してゐると云ふ事實に存する。性的關係に於いて他人に苦痛を與へることに喜びを感ずる人は、また性的關係から生ずる苦痛を快樂として經驗することが出來る。加虐性者は同時に被虐性者である。よしんば變態の能動的方面又は受動的方面の何れかゞもつと强く發展せしめ得られ、かくて彼の主要なる性的活動を代表せしめ得られるにもせよ——。(一)

註(一) その說のために多くの證明を與へる代りに、私はハヷロック・エリスの『性的衝動』(一九〇三年)中からその一節を引用するに止めておかう。——『加虐性及び被虐性の、知つてゐる限りの總ての場合は、クラフト・エービングの引用してゐるものでさへも、常に(旣にコリン、スコット、フェレ等の證明した如く)同一人物に於いて二群の顯現の名殘を示してゐるのである。』と。

このやうに我々は變態的傾向の或るものは何時もきまつて相反一對として現れることを知るのであ

る。この事は後に擧げる材料に鑑みて非常に高い理論的價値を要求し得るのである。(一) 更にまた、加虐被虐の相反一對の存在は、攻勢の混和のせゐにするわけにも行かない。他方、我々は、そのやうな同時に存在する對比を、兩性に於ける男性女性の並存對比に關係づけようとする誘惑を感ずるかも知れない。この對比の代りは、精神分析に於いては屢々、能動受動の對比を用ふるのである。

註（一）後節のアムビヷレンツの條下參照。

第三章　あらゆる變態に就いての一般論

變化と病氣

變態を最も明白な實例に就いて、且つ特殊の事情の下にあつて始めて研究した醫者たちは、同性愛と同樣、病氣または頽廢の徴と認めるやうになつたと云ふことは無理からぬことである。併し同性愛の場合は變態の場合よりも右の考へを打破するに容易である。これ等の異常の多くのものは、少くともその內で極端ならぬものは、健康者の性生活に殆ど缺けてゐない要素を成し、彼等はまたそれを見ること他の親熟したものを見ると同樣であることは、日常の經驗の示す通りである。事情がさうなれば、常態的人物と雖もそのやうな變態を以て常態の性目的に久しく代へ、またこれを併用することがあるであらう。如何なる健康者に於いても、何等かの變態と名付くべき要素がその常態的性目的中に缺けてゐる事はない。で、この一般性のあるだけでも、變態と云ふ批難的名稱を用ふることの不適當を證明するに足るのである。性生活の分野に於いては、もし我々が生理的範圍內の單なる變化と病的

徵候との間に銳い限界を劃せんと欲するならば、現在では到底解釋のつかない特別な困難に遭遇することは確である。

併しこれ等の變態の或るものに於いては、新しい性目的の性質は、特別の注意を要求する如き事である。變態の或るものはその內容に於いて常態のものから非常に離れ、我々はそれを『病的』と呼ばざるを得ない程である。殊に、性的衝動が(羞恥、嫌惡、恐怖並びに苦痛などの)障碍を克服するために、驚くべき結果(糞を舐めたり屍を姦したり)を生む場合である。併しこれ等の場合に於いてさへも、彼等が必ずきまつて異常な變態又は精神病者であると斷定してしまつてはならないのである。我々の見逭し得ざることは、彼等が他の方面に於いては常態的に振舞つてゐるのに性生活の方面に於いてのみはあらゆる本能の內最も控制し難きものゝために支配を受け、そのために病者の折紙をつけられてしまつたのだと云ふことだ。これに反し、他方面の生活關係に於いて明かに變態であるものは、必ずその背後に性生活の變態を示すのが常である。

多くの場合に於いて我々は、變態者の病的特質を新しい性目的の內容中に發見せず、寧ろ新しい性目的の常態的性目的に對する關係に於いて發見することが出來る。事情が變態を助長し常態を阻むに拘らず、前者が後者に伴つて現れないならば、或は變態があらゆる事情の下に於いても常態を抑壓し

その代りの位置を占めてゐるやうならば、それは病的である。變態のみが專ら現れ、且つ定着してゐるならば、我々はそれを病的徵候と呼んで支障へがない。

變態に於ける心理の參與

精神が最も有效に參與して性的衝動を變形せしめるのを我々が認めざるを得ないのは、多分正に、最も厭はしき變態に於いてゞあらう。これ等の場合に於いては、一片の精神的作業が果されてゐるのだ。その作業の成功は恐ろしいものではあるが、衝動理想化の價値は否定すべくもない。戀愛の全能は恐らく他の如何なるところに於けるよりも強く、それの異常の一つたるこの場合に現れてゐる。性に於いては、何處へ行つても、最高なるものと最低なるものとが最も內奧に於いて相互に依屬してゐる。(『天國から人界を通じて地獄へ』)

二つの結果

變態を研究してゐる內に、我々は一つの事實を洞觀するやうになつた。卽ち、性的衝動は或る心的の諸勢力(抵抗)に拮抗せねばならないと云ふ事であつて、その諸勢力の內では、羞恥と嫌厭とがその尤なるものである。そこで我々はかく推定することが出來る、卽ちこれ等の諸勢力は本能を常態の範圍內に限定するに力を致し、さうしてもしそれ等の諸勢力が個人に於いて早期に、性本能がその全力

に到達する以前に發達したならば、性本能にその發達の方向を示したものはそれ等の諸勢力であつたらう。（一）

註（一）他方また、性の發展を控制するこれ等の諸勢力——嫌惡、羞恥、道德——は、人類の精神發生に於いて性本能が經驗したところの外的禁制の歷史的殘渣であると認めなければならない。個人の發達に於いてそれ等の諸勢力は教育や感化の呼掛けるまゝに、殆ど自發的に恰好の時期に擡頭し來ることを、我々は觀察するのである。

我々は更にまた、研究して見た變態の二三のものが、多くの動機の結合を假定することに依つてのみ理解することが出來ると云ふことを認めたのである。それ等の變態を分析——分解——して見るならば、複合的な性質のものに相違ない。して見れば性本能なるものは單純なものではなく、反對に多くの合成要素から成り、それが變態を構成する場合に相互に分離するのだと云ふことが分るのである。臨床的觀察に依つて、我々はそこに混合したもの〻あることを氣付いたのである。その混合したものは形の揃つた常態的行動に於いてはそれ自身を表現することが出來なくなつてゐるのである。（二）

註（一）變態の發生に就いて私は豫め云つておくが、變態定着の以前に（祟物の場合と同じで）常態的性發達の添へものが豫め存在してゐるのだと假定するのは根據のあることである。精神分析が今まで調べて來た個個の場合に就いて云へば、變態はまたエディポス・コムプレクスへと發展すべき殘留物である。この殘留物を抑壓した後に、性本能の（素質に依つては）最も强い要素が再び立現れて來るのである。

第四章

神經症患者の性本能

精神分析

少くとも常態と離れることあまり遠からぬ人間の性本能を知るに大きな貢獻をなすには、一つの源泉をさぐらねばならぬ。その源泉へ辿るべき道はたゞ一つ定まつたのがあるだけである。所謂精神神經症（ヒステリー、强迫症、神經衰弱と誤つて名付けられてゐるもの、それから慥にまた早發性痴呆症、妄想症）患者の性生活に於ける諸問題を十分に正確に解釋するには只一つの方法がある。さうしてその方法とは、一八九三年にブロイヤー J. Breuer と私とが聲明して『洗滌(カタルチフシユ)』的取扱と名付けたところの精神分析法に彼等患者を掛けることとである。

私が既刊の書中で云つたことをこゝで繰返すが、これ等の精神神經症は、私の實驗した限りでは、性本能の力に依憑するものである。私は必ずしも性本能のエネルギーが病的顯現（徵候）を支持する諸勢力にのみ寄與すると云ふのではない。寧ろ私は、この寄與が神經症に於けるエネルギーの唯一不斷の

且つ最も重要なる源泉であり、かくてそれ等の人物の性生活は專ら、主として、或は偏重的に、これ等の徵候となつて顯現するのだと明言したいのである。徵候は、私が旣に他のところで云つておいた通り、患者の性的活動である。この斷定への證據は、ヒステリーその他の神經症患者を二十五年間精神分析して來たところに依つて私は得たのである。その精神分析の結果は旣にそれ〴〵詳細に述べたが、なほもつと述べたいと思つてゐる。(一)

註（一）右に述べたことを次のやうに云ひ更へたとしても、それは私の誤りではなくして、たゞ完全にしたものに過ぎない。――神經症の徵候は一方リビドー的衝動の要求に基くと共に、他方この衝動への反動としての、自我の反抗に基いてゐると。

ヒステリーの徵候は、感情的に强調せられてゐるところの、而も他面、意識化し得る心的活動に依つて息拔きされる道が特殊の心的過程(抑壓)に依つて塞がれてゐるところの、一聯の心的過程、願望竝びに欲望などの代償――云はゞ被轉嫁物――であるとの假定の下に、精神分析はこれ等徵候を取除くのである。このやうに無意識狀態に拘束されてゐる思想形態は、それ〴〵の感情價値に應じた表現を、はけ口を求めてゐる。さうしてそのやうなはけ口を、ヒステリーの場合に於いては肉體現象への轉換の過程――つまりヒステリー徵候――となつて見出すのである。で、もし適當の技術の力を借り

て、方法よろしきを得たる還元を徴候に加へ、これを意識的な、感動の纒綿せる思想となすならば、我々はこれ等の、以前には無意識的な心的形態であつたものゝ本性と由來とを最も精細に知ることが出來るのである。

精神分析の結果

かくの如くにして、徴候は、性的本能の源泉から力を仰いでゐる努力の代償であることが分つたのである。我々が總ての神經症者のモデルとして採つた發病前のヒステリーの特質に關して、また病氣の源因に關して知つてゐる事は、以上の說に丁度一致する。ヒステリーの特質には一片の性的抑壓の存することが判ぜられる。その一片の抑壓は常態の限度を超えてをり、我々が羞恥、嫌厭、道德などとして知つてゐるところの、性本能に對する抵抗を誇張したものである。この誇張は性問題を知的に取扱ふことに對する本能的逃避であつて、この事が美事に成功すると全然性的の事を知らないでしまひ、それが性の成熟期の年齡まで保たれてゐるのである。(一)

註(一)『ヒステリー研究』(一八九五年)中にブロイヤーは、彼が始めて『洗滌法』を施した患者に就いてから云つてゐる。『性的契機が驚く程發達してゐない』と。

ヒステリーに附きものゝこの特徵は、ヒステリーの第二の素質的要因の存在のために、つまり性本

能の過大なる發育のために、うつかり觀察してゐたのでは見落すことが稀でない。併し心理分析は常にこれを發見し、さうして無限な性的願望と非常に誇張された性的拒否との對比の存在を證明することに依つて、ヒステリーの矛盾の謎を解くことを知つてゐるのである。

元來ヒステリー性の人にこの病氣の起るのは、自分の成熟するに連れ、或はまた外的の生活關係からして、實際の性的要求が熱烈にその人に起る場合である。性的熱望の壓迫と性的拒否の反抗との間から押出されるのがこの病氣であるが、併しこれはその矛盾を除くものではなく、たゞリビドーの苦闘を徴候に變形することに依つてこれをまぎらさうとするに過ぎない。もしヒステリーの人が（男でもよい）或るつまらない感情の動搖に、一つの矛盾に惱み、その中心點に性的興味がないとするならば、それはたゞ表面的の例外に過ぎない。心的過程を常態の適用から控へることに依つて病氣を可能ならしめるものは、この矛盾の性的合成要素であることは、これを精神分析して見るといつでも分るのである。

神經症と變態

私の斷定に對する反對の大部分は、大抵の人が性――私は精神神經症の徴候をそこから抽出して來るのであるが――を常態的性本能と符合するものと考へてゐる事實から說明がつく。併し精神分析は

これ以上の事を致へる。即ち、徵候は決して所謂常態的性本能をのみ(少くとも專ら或は主として)犧牲として發生するものではなく、さまざまな本能の轉換的表現であることが分る。これ等の本能は、もし意識から逸せずに、直接空想や行爲となつて現れることが出來るならば、(最も廣い意味に於いて)變態と呼ぶことが出來よう。徵候はそれ故に、部分的には變態的の性をも資として生ずるものである。神經症は、云はゞ、變態の消極である。(一)

註(一) 變態者が適當の事情の下では空想をさまざまな工夫に變更することは誰しも知つてゐる。また妄想症者は敵對關係に於いては自分の妄想を他人に投出する。またヒステリー患者の無意識的空想は徵候となつて現れることは精神分析に依つて發見されてゐる。これ等の工夫と妄想と徵候とはその內容に關しては微細の點まで一致するものである。

精神神經症患者の性的本能には、我々が常態的性生活の變化として、また病的性生活の顯現として研究したところの、一切のものが認められる。

(a) 一切の(例外なく)神經症患者の無意識的精神生活に於いて、同性愛的感情が、同性者に對するリビドーの定着が、發見せられる。このやうな病的影像の構成要素の意義を十分に知るには深い論究なくしては不可能である。私はたゞ、同性愛への無意識的傾向が必ず缺如してゐる事はなく、さう

して殊に男のヒステリーを說明するには最も大きな役割を果すと云ふことを確言し得るのみである。

（b）　精神神經症患者に於いては、一切の解剖的違反への傾向は無意識中にあり、且つ徵候を構成するものである事を證明する事が出來る。彼等の內にあつて特に屢々且つ激しく現れるのは、口腔粘膜や肛門粘膜に性器としての役割を要求するものである。

（c）　精神神經症者の徵候構成に於いて非常に顯著な役割を果すものは、大抵は相對比する一對となつて現れる部分本能であつて、それ等の本能を我々は新しい性目的――例へば偸視慾、露出慾、竝びに殘忍への能動的、受動的本能――を齎すものとして知つたのである。徵候の受難的性質を理解するためには、この最後のものゝ寄與を無視することが出來ない。さうしてまたこれはその患者の社會的行動の或る部分を殆どいつもきまつて支配してゐるのである。愛が憎みに變り、好意が敵意に轉ずることとは神經症者の多くの場合の特徵であり、また妄想症者の總ての場合の特徵であるらしいが、この變轉は殘忍性がリビドーと結合することに依つて生ずるのである。

これ等の論の興味は二三の事實の診斷に或る特殊さを認めることに依つて、なほも高められるであらう。

（甲）　正反對のものと一對になる事の出來るやうな本能が無意識中にある場合には、その反對のも

のもまた必ず效力を發揮して來るものである。で、一切の『能動的』變態にはこの場合、その受動的相反者が隨伴してゐる。無意識に於いて露出症者であるものは、同時にまた偸視症者である。抑壓の結果、加虐的亢奮（サデースチッシュ）を感ずるものは、他方被虐的（マゾヒスチッシェ）傾向の源泉から來る徵候を多少とも示すものである。相對する『積極的』變態の行動に完全に合致することは、慥に非常に注意に價する。併し、病氣の實狀に於いては相反する傾向の何れかゞ主要なる役割を演じてゐる。

（乙）　精神神經症のもつと明白な或る場合に於いては、これ等變態的本能の何れか一つだけを發見する事は殆ど稀である。大抵の場合、これ等の本能の非常に多數を、さうして概してこれ等總ての痕跡を發見するのである。併し個々の本能はそれ〴〵の激しさを持つてゐるので、他の本能の發達からは獨立である。併し積極的變態を研究して見ると、丁度それの反對のものが分つて來る。

第五章

部分本能と性的帶域

積極的並びに消極的變態の研究からして、我々の知つたところを考へ合せて見ると、これ等の變態は一聯の「部分本能」に關係してゐる事が分るのである。併しこれ等の部分本能は原素的なものではなく、なほ細かく分割することの出來るものである。「本能」（Trieb）とはまづ、不斷に流れてゐる身體內部にある或る一つの亢奮源泉の心理として表れ出たものに外ならず、外部から來る個々獨立した刺戟に依つて生ずる「亢奮」（Reiz）と區別せらるべきである。で、本能とは、肉體的概念から區別せられたものとしての心理的概念の一つである。本能の性質に關する最も單純な最も明白な假定は、本能はそれ自身に於いては何の性質（Qualität）をも有せず、たゞ精神生活の作業を促進する基準として認められるに過ぎない。さま〴〵の本能を相互に區別し特殊の屬性をこれに供するものは、それ等の本能の身的源泉並びに目的への關係である。本能の源泉は一つの機關に於ける亢奮過程であり、本能の直接的目的はこの機關的亢奮を滿足させることに依り鎭撫廢絕するにある。(一)

註（一）本能觀は精神分析學の最も重要なる部分であるが、また未だ整はざる部分である。私はこの後の著書たる『快不快原則を超えて』（一九二一年）、『自我とエス』（一九二五年）等に於いて本能に就いてのその後の見解を述べておいた。

本能觀に於いて我々の無視することの出來ない今一つの豫備的假定は、肉體器官に依つて二種の亢奮が供給されると云ふ事だ。その二種と云ふは化學的性質の相違に基いてゐる。その內一種の方の亢奮は、我々これを特殊性的と名付け、當該器官を性的帶域と呼ぶ。さうしてその帶域から出て來る性的要素が部分本能である。（一）

註（一）神經病の一定部類の研究から得たこの假定を、こゝで確めることは容易でない。併し、他方に於いて、これ等の豫想を述べておかなければ、本能に就いて何等かの確實なことを述べることは不可能である。

口腔及び肛門に性的意義を要求するところの變態的傾向に於いては、性的帶域の演ずる役割は非常に明白である。それはあらゆる點に於いて性的器官のやうな振舞をする。ヒステリーに於いては肉體のこれ等の部分は、そこから出て來る粘膜區域と共に、新しい感覺と神經作用の變化との座となること――然り、勃起にも比すべき現象の座となること――宛も、常態的性過程の亢奮下にある眞正の性器と全く同樣である。

性器の副的器官竝びに分身（代理）としての性的帶域の意義は、精神神經症の內にあつてはヒステリーに於いて最も判然と現れて居る。併しさりとて、他の病的形態に於いてはよく現れないと云ふのでは決してない。この意義が他の病的形態に於いて、たゞ知覺し難いと云ふだけである。何となれば、これ等の病的形態（强迫神經症、妄想症）に於いては、徵候形成の起る心的器官の領域が肉體統制の中心地點から非常に遠くにあるからである。强迫神經症に於いては、新しい性目的を生み、性的帶域から獨立して見える本能の意義は、最も驚くべきものである。併し、偸視症、露出症に於いては、眼が性的帶域に相當する。が、性本能の苦痛的竝びに殘忍的成分に於いては、皮膚が同じ役割をとる。身體の特別の部分に於いて感覺器官として變化せられ、且つ粘膜化されてゐる皮膚は、性的帶域（κατ' ἐξοχήν）である。（一）

註（一）こゝに於いて我々はモールの說を考へなければならない。彼は性本能を Kontrektation の本能と Detumeszenz の本能に區別してゐるが、前者は接觸願望の本能との意である。

第六章

神經症患者に於いて性的變態が外見的には目立つ所以の説明

精神神經症患者の性感は多分、以上の論議に依つて間違つた解釋を人に與へたであらう。神經症患者の性的行動はその本性に於いて非常に變態に近くなり、從つてそれだけ常態から遠ざかつてゐるものゝ如く見えてゐる。ところが、これ等の患者は素質に於いて、非常に大きな性的抑壓と過大な性的本能力との他に、最も廣い意味に於ける變態への異常なる傾向を有してゐるらしいのである。併しもつと輕症の患者を調べて見ると、最後の假定は絶對的の要件ではなく、或は少くとも、病的效果に判斷を下すには、一要素の效力は問題にしてはならないと云ふ事が分るのである。大抵の神經症患者に於いては、發病は思春期以後に、常態的性生活の要望の下に、始めて起るのである。この常態的性生活に對して、何よりもまづ抑壓が加へられる。或は、リビドーが性の常態的滿足を得られないがために、その後になつて病氣が起るのである。二つの場合に於いて、リビドーは一つの流れの如く動いて

ゐるが、その流れの主要な河床は堰塞められてゐるのだ。そこでリビドーは今迄多分空いてゐたであらうところの傍系的水道に溢れるやうになる。このやうにして變態への明かに大きな（よしんば慥に消極的ではあるにもせよ）傾向が傍系的に條件づけられるのだ。とにかく、それは慥に傍系的に增加されるのだ。自由の制限、常態的性對象へ近付き難きこと、常態的性行爲の危險などの如き外的素因に對して性的抑壓と云ふ內的素因が加へられると云ふのが事實なのである。そのために、當然ならば常態であつたらうところの個人に變態の起源が生ずるのだ。

神經症の個々の場合に於いて、態度はまち〱であるかも知れない。或は變態的傾向の先天的の勢力が決定的である場合もあるし、或はリビドーが常態的の性對象及び性目的から離脫するために傍系の幇助が一層の勢力を振ふ場合もある。協働の存してゐるところに對比を見んとするは不當であらう。神經病者がいつでも最も大きな結果を示すのは、素質と經驗とが同一方向に協働する場合である。顯著な素質ならば多分日々の印象の助力を俟たないであらうが、生活上の深刻な障害に會ふと普通の素質のものでも多分神經症になるであらう。これ等の見解はまた同樣に他の方面に於いても、先天的と後天的との病源學的意義に適用せられるのである。

併しもし、變態への特定傾向が精神神經症的素質の特性であるとの假定の方が好ましいと云ふなら

ば、何れの性的帶域を、或は何れの部分本能を先天的に偏重するかに依つて、そのやうな素質のさまざまな形態を區別することが出來るとの豫見がつく。變態への如何なる素質が如何なる病氣形態を擇ぶか、その間に何か特別の關係があるかどうか、それに就いては、この方面の他の事柄に於けるやうには探究されてゐない。

第七章

幼兒性感に就いて

變態的感情を神經症患者の症狀と我々が認めたゝめに、變態の內に入るべき人間の數が非常に殖えて來た。これは、人類の大部分が神經症患者であるためばかりではなく、また種々な程度に於ける神經症患者が不斷の層積をなして常態的狀態に連續してゐるからでもある。メビウスが、我々總ては多少ともヒステリー的であると云つてゐるのは、至當である。そこで、我々は變態の範圍を擴大することに依つて、變態への素質が稀らしい特殊事ではなく常態として認められてゐる素質の一部分を構成しなければならないことを假定せざるを得ないやうになる。

變態が先天的の決定に俟つものであるか、或はビネーが崇物症に就いて證したやうに、偶然的經驗から發するものであるかは問題であると云ふ人があるのを聞く。で、今や我々はかく結論せざるを得ない、實は變態の基礎には何等かの先天的なものがあるが、併しそれは萬人に於いて先天的なものであつて、素質としてもその激しさに動搖があり、生活の影響に依つて高められるものであると。これ

こそつまり性本能の先天的、素質的の根幹であつて、それが或る一聯の場合に於いて性活動の眞の實行者（變態）となつてゐるが、他の場合に於いては不十分な禁壓（抑壓）を受けるのである。そこで、それ等の根幹は病的徴候としては大部分の性的エネルギーを廻りくどい道で自分の方に牽付けることが出來るが、併しまた兩極端間の都合のいゝ場合に於いては、それ等の根幹は有效なる制限と他の仕上げとに依つて常態的性生活を始めさせるのである。

併し我々は更に、また一切の變態の根を示す所謂素質はたゞ小兒に於いてのみ證明する事が出來る（尤も、小兒に於いては一切の本能はたゞ穩かな程度の激しさで現れるが）と云ふ事を忘れてはならない。もし神經症患者は幼兒狀態の性感を保存してゐるか、或はそれに復歸するものであるとの命題が正しいならば、我々の興味は幼兒の性生活に歸らざるを得ない。さうして我々は、幼兒性感が發展して變態となり、神經症となり、或は常態的性生活となる過程を支配するところのさまざまな影響の働きを辿つて見たいと思ふであらう。

第二論文

幼兒の性感

見落されたる幼兒性感

性本能そのものは子供には缺けたもので、思春期と呼ばれる時期に入つて始めて眼覺めるものであると云ふ如きが一般の人々の考へである。併しこれはたゞに簡單な間違ひであるばかりでなく、その及ぼすところも甚だ重大である。何となれば、この誤りのために現在我々は性生活の根本的實情に就いてこのやうに無知であるのだからだ。幼兒時代の性的表現を根本的に調べて見ると恐らくは我々は、性本能の本質的特徵を闡明し、その發達を知悉し、その實狀をさまぐな根源から指示するやうになるであらう。

生長せる個人の性質と反應とを說明せんと努める多くの著述家たちは、祖先の生活に依つて生じた昔に對して、個人の生涯中にあつた昔(つまり幼年時代)に對してよりも、遙かに多くの注意を寄せてゐると云ふことは見遁せないことである。この生活期間の影響は、これを理解するにより容易であ

り、また形質遺傳よりも先に考量せらるべき權利がある。(一)　我々は時々文獻中に、幼兒の早期性活動に就いての、勃起、自慰、竝びに性交に類した企てに就いての話を讀むこともあるが、併しいつも例外的な現象として、奇體の事として、早熟な墮落の驚くべき實例として書いてあるのである。私の知つてゐるところでは、如何なる著者も幼時の性本能が合法的なものであることを明白に認識してゐないし、また幼兒の發達に就いて述べる書は汗牛充棟もたゞならぬ程であるが、『性の發達』の章は看過してある。(二)

註（一）　幼兒時代の影響を十分に知らずして形質遺傳の影響を認識することは、また實際不可能である。

（二）　こゝに書いた主張は自分ながらチト大膽すぎるやうな氣がしたので、も一度文獻を見直すことにした。見直した結果は、私の始めの陳述を何等變更する必要を生じなかつた。幼兒性感の肉體的竝びに精神的現象の科學的研究はまだ漸く緒に就いたばかりである。ベル S. Bell と云ふ著者は（『兩性間の戀愛感情の豫備的研究』アメリカ心理學雜誌、第八卷、一九〇二年）かう云つてゐる。——青年期に現れた戀愛感情を注意深く分析した學者は一人もない、と。——思春期以前の時代に肉體的性表現の見えることは、たゞ變質現象との關係に於いてのみ、且つ變質の象徴としてのみ、注意を呼んだのである。この時代の心理學の何れの書にも幼兒の戀愛生活に關する一章が缺けてゐる。現に、プライヤー Preyer, バルドヰン Baldwin,（『幼兒及び種族の精神發達』一八九八年）、ペレ Pérez（『五歳乃至七歳の幼兒』一

八九四年)、ストリュムペル Strümpell,(『教育學的病理學』、一八九九年)、カール・グロース Karl Gross (『幼兒の精神生活』一九〇四年)、ヘッラー(『醫療教育學原論』一九〇四年)、スッリ Sully (『幼年期研究』一八九七年)、その他を見れば分る。この方面で今日の事情を最もよく知るには雜誌『子供の間違ひ』(一八九六年創刊)に就くにしくはない。併し人々は、幼時に戀愛の存在してゐたことに就いては、これ以上發見する必要がないと信じてゐる。ペレ(前揭)はこれを緩和してゐる。カール・グロース(『人間の遊戲』一八九九年) は誰でも知つてゐることゝして『大抵の幼兒は既に早く性的亢奮を覺えるものであり、また異性に對して接觸の欲求を感ずるものである』(三三六頁) と云つてゐる。ベルが調べた多くの實例の內で最も早く性的戀愛の擡頭したのは、或る二歲半の幼兒であつた。――これに就いてはハヴロック・エリスの『性感情』(クレッラ獨譯あり、一九〇三年、附錄第二)を比較參照ありたし、

幼兒の性感に就いての右に述べたやうな見解は、スタンリー・ホール Stanley Hall の大著(『青年期その心理學、生理に對するその關係、人類學、社會學、性、犯罪、宗教及び教育』二卷、ニウヨーク、一九〇八年) の出現以來、最早驚かれなくなつた。――モール Moll の近著『幼兒の性生活』(一九〇九年ベルリン)は、そのやうな改變に對して何等の動機を供してゐない。これに反し、ブロイラー Bleuler の『幼兒の性的異常』(スヰッツル學校保健協會年報、九卷、一九〇八年) を見よ。博士フーク・ヘルムート夫人 Frau Dr., H-v-Hug-Hellmuth の一書『幼兒の精神生活から』(一九一五年)は、その以後、等閑視されてゐる性的要素を十分に問題として取扱つてゐるのである。

幼兒の健忘

このやうに見遁してゐたといふことは注意すべきことであつて、その原因の一部分は彼等著者たちが自分自身の教育に囚はれたためであり、他の一部分は、今日までその眞相の説明を回避せしめたところの或る心的現象にあるのだ。と私の云ふのは、大抵の（總てのとは云はぬ！）人間に於いて六歳乃至八歳の幼兒時代のことを隱蔽してしまふ獨得の健忘を意味するのである。實は我々は今までこの驚くべき事實を驚くべきものと思はなかつたのである。併し我々はそれを驚くべき立派な理由があるのである。現に人々はかう云ふではないか、我々は昔の事は二三の譯の分らぬ斷片的記憶の外は何も覺えてゐないに拘らず、生々とした印象だけは殘つてゐると。また我々は苦痛と快樂とは人間らしく表現することを心得てゐたし、戀愛、嫉妬その他當時我々を強く動かした情熱を示した。また大人から見れば我々に洞察へ判斷能力の生じつゝある事の證明と認められるやうな物の云ひ方をさへした。而も、成長して見るとそれ等總ての內で何も知つてゐないのである。何故に我々の記憶は我々の他の精神活動の背後に殘つてゐるのであるか。我々が記憶を受容し再現する力のあるのは、他の如何なる生活時代に於けるよりも正に小兒時代に於いて最も大であると信ずべき理由があるのである。（二）

註（一）　最早期の幼時記憶に結び付いた問題の一つは拙論『陰蔽記憶に就いて』の中に扱つておいた。この論文は、『精神療法及び神經學雜誌』第六卷（一八九九年）に揭げておいたが、また拙著『日常生活の精神病理』（大觀

憲二譯『日常生活の精神分析』七一頁以下參照）中にも轉錄しておいた。

他方に於いて我々は、自分等の忘れたその印象は却つて我々の精神生活に最も深い痕跡を殘し、爾後の發達全般に決定的な力を及ぼしてゐるものであると云ふことを假定せざるを得ないし、また他人に就いての研究に依つて確信することが出來るのである。かくの如く、これは決して幼時印象の實際の消滅ではなく、寧ろ忘却である。その忘却は神經患者が成人後の經驗をも忘却するのと、誠によく似てゐることを我々は知る。さうして神經症者の忘却の本質は單に意識の抑制（抑壓）に存するのである。ところで、如何なる力が幼時印象をこのやうに抑壓するのであるか。この謎を解き得るものは、またヒステリー的健忘の何たるかを闡明し得るであらう。

更に我々は、幼兒的健忘が幼兒の精神狀態と神經症者の精神狀態との間の一つの新しい比較點となることを、特に强調しておきたいと思ふ。他の一つの比較點には我々は既に前に遭遇してゐる。と云ふのは、神經症者の性感は幼兒的見地を保有してをり、つまりそれへと辿ることが出來るものだとの命題を立てざるを得なかつた時にだ。要するに幼兒的健忘が、やはり幼兒の性的亢奮と關係させて見られないものであるならば、かうしたことがあるであらうか！

とにかく幼兒の健忘をヒステリーの健忘と結び付けることは、單なる機智の遊戲以上のものであ

る。ヒステリーの健忘症が抑壓の役に立つのは次の事情から說明がつく。卽ち、個人は旣に記憶痕跡の一大寶庫を持つてゐて、これ等の痕跡は意識の手にはおへないものであり、また意識からの抑壓を被つてゐるものを聯想に依つて自分の方へ引付けると云ふことだ。(二) 幼兒的健忘なくしてはヒステリー健忘はないものだと云ふことが出來る。

註(二) これ等二つの相互に影響し合ふ過程の一つだけを問題にしてゐるのでは、我々は抑壓の機制を理解することは出來ない。これをたとへて見るならば、旅行者がギゼーの大ピラミッドの頂に於いて一方からは押され他方からは引張られて進んで行くやうなものである。

幼兒健忘あるために萬人は自分の幼時を、いはゞ有史前時代にして了ひ、且つ自分の性生活の始まりを自分に匿して了ふのであつて、そのために、幼兒的生活期間が性生活一般の發達のために價値を有するものであることを認め得ない時には、責任を有史前時代に歸するやうになるのだと、今や私は考へるのである。個々の觀察者は我々の知識に於いてこのやうにして生じた穴を塞ぐことは出來ない。私は旣に一八九六年に於いて、或る重要な、性生活に委囑する現象に對して幼兒時代が如何なる意義を有するものであるかを強調しておいた。さうしてそれ以來、性に對する幼兒的契機を重視することをやめなかつたのである。

幼兒時代の性的潛在期間とその中絕

幼兒時代に於いて一見反規則的な、例外的な性的感情を持つことが異常に屢々見られ、また神經症患者の幼兒的記憶がその時まで無意識であつたのが發見せられるところを見ると、幼兒時代の性的態度に就いてはまづ次のやうに描き出すことが許される。(一)

註(一) 後年に神經症患者となつたものゝ幼年時代が、後年に健康者となつたものゝ幼年時代とは相違してゐるのは、本質的にはこの點に於いてゞはなく、激しさと明瞭さとの點に於いてゞあると云ふ事は當然期待されるからして、後の材料もその意味で役に立てゝ當然であらう。

赤ん坊が性的亢奮の芽を持つて生れて居り、その芽が段々と發達するが、やがて進展し來る抑壓のために制せられ、その抑壓がまた性發達の堂々たる進擊のために破られ、個人の特性に依つて打開せられる、と云ふことは慥なやうである。併し幼兒の性生活は大抵は三四歲の頃に、觀察に堪へるやうな形となつて表現されるやうである。(一)

註(一) 幼兒の性機能の働きに就いて私の主張するところと丁度解剖的に類似するところは、バイエルの發見(Deutsches Archiv für klinische Medizin, Bd. 73) に依つて與へられてゐる。即ち赤ん坊の內部性器(子宮)はそれより年上の幼兒の子宮よりも概して大きいと云ふことである。併し、また性器の他の

部分も出産後に收縮することは、ハルバンに依つて斷定せられたが、この解釋はまだ確證せられてゐない。ハルバン(『産科婦人科雜誌』五十三卷、一九〇四年)に依れば、出産後生活の一二週間の後にこのやうに小さくなる現象は終りを告げる。——生殖腺の間質部を性決定の器官として考へる著者たちは、解剖的探究の結果、彼等自身の方面から幼兒性感と性的潛在期とを云々するやうになつた。私は先頁で言及した思春腺に關するリップシュッツ Lipschutz の書から引用する。——『性的特徴は成熟して思春期に至つて完成するが、それはたゞ既に夙く、我々の見るところでは既に胎兒時代の生活に始まつた過程が、その時期になつて急に勃發したものであると、かう云ふならば我々は事實を寧ろ妥當に云ひ表はしたことにならう』(一六九頁)と。——『人々がこれまで一概に思春期と云つてゐたものは、實は思春の第二の大きな樣相に過ぎないやうである。その第二の樣相は二十年目の中頃に這入り込んで來る。——出産以來第二の大樣相に至るまでの小兒時代を思春の中間樣相と名付けることが出來よう。』(一七〇頁)——このやうに解剖的發見と心理的觀察とが一致するこの事はフェレンチが或る報告(『國際精神分析學雜誌』第六卷、一九二〇年)中に强調してゐるが、この一致は、性器官發達の『最初の頂上』が早期胎兒時代に當り、性生活の幼兒的早咲きが三歲又は四歲の頃に起るとの詳報に依つて破られてゐる。解剖的に形が出來上ることゝ心理的に成熟して來ることゝが時間的に完全に一致しなければならぬと云ふことは、勿論ない。當該研究は人間の生殖腺に就いてなされてゐるのである。動物には心理的意味に於ける潛在期はないからして、この解剖上の發見(これに基いて著者たちは性發達の二つの頂點を假定してゐるのだが)がまた他の高等動物に就いても見られるかどうかを知ることが、非常に大切になつて來るで

あらう。

性的禁制

全部的又は部分的潜在の時期の間に、精神の力は擡頭して、それが後に性本能に妨害を與へ、丁度堤防のやうにその方向を限定するであらう。(嫌惡、羞恥感、美的又は道德的の理想觀。)人間は學童時代に、このやうな堤防を築くことが教育の一つの仕事であるといふ印象を受ける。さうして慥に教育はこれに多くを貢獻するのである。實際に於いてはこの發達は有機的に條件づけられ、遺傳的に定着せられたものであり、また時には教育の助けなしに起り得るものである。教育なるものは有機的に豫定せられたものを引出し來り、またそれを多少手際よく深味を與へて改鑄すると云ふだけに限られてゐるならば、たゞそれだけの力の範圍を出づるものではない。

反動形成と昇華作用

我々の後年の個人的教養竝びに常態性のためにかくばかり重要なる意義を有するこれ等構成を完了するは、如何なる手段に依つてゞあるか。それは多分、嬰兒性感そのものを克服することに依つてなされるのである。この嬰兒性感の流入はこの潜在期に於いても堰止められてをらないが、併しそれのエネルギーは——全部又は大部分——性的方面への使用から他の方面へと轉向せしめられてゐる。

多くの文明史家がその見解に於いて一致してゐるらしい點は、このやうに性本能が性目的から離れて新しい目的に轉向する事に依り、つまり昇華(淳化)作用の名に價する過程に依り、あらゆる文化事業への力強き成分は獲られると云ふことだ。そこで我々はかう云ひ添へておかう、この同じ過程が個々人の發育中に働き、さうしてその始まりは幼兒の性的潛在期に起るのであると。(一)

註(一)『性的潛在期』„sexuelle Latenzperiode" と云ふ名稱はフリイス W. Fliess から借りたものである。

またそのやうな昇華作用の機制に就いては、人々は一つの推量を敢へてすることが出來る。これ等幼年期の性的亢奮は、潛在期の主要特徴として蕃殖機能がまだ起きて居ないから、實際の活用に堪へないものであると共に、他方それ自身に於いて變態的である。つまり、性的帶域から發するものであり、また個人の發達經路に於いてはたゞ不快感を喚醒ますに過ぎない衝動から生れるものである。それ故に、幼年期の性的亢奮は逆勢力(反動亢奮)を喚醒し、その諸勢力がそのやうな不快を有效に壓伏するために、前に述べたやうな精神的の堤防(嫌惡、羞恥、竝びに道德感)を築くのである。(一)

註(一)こゝに論じた場合に於いては、性的本能力の昇華は反動形成の道を進んで行く。併し一般的には、人々は、昇華と反動形成とを二つの相異る現象として概念的に區別してもいゝ。これとは別のもつと單純な機制に依る昇華もあり得るのだ。

潜在期限

嬰兒性感の潜在並びに遷延の期間に關する我々の理解は假定的なものであり、その明白さとてもいい加減なものであるが、それ等に就いて我々は敢へて自惚れることなく、寧ろ現實に立返つて、嬰兒性感のそのやうな利用は教育の理想を表はすものであると云ひたい。そのやうな理想からは、個々人の發達は大抵の場合何等かの點に於いて、また屢々非常に甚だしい程度に逸脱してゐるものである。昇華され損つた性的顯現の或る部分は時々顏を出して來る。又は、或る性的活動は潜在の全期間中殘存してゐて、思春期に至つて性本能の助力を得て遂に勃發する。教育家は、幼兒性感に何等かの注意を拂つてゐる限りでは、性感を資として道德的防禦力が出來上るのだとの我々の見解に同じてゐるかの如くに、また性的活動は小兒を教養し難くすることを知つてゐるかの如くに（何となれば小兒のあらゆる性的顯現は、教育を全然妨げるが故に『惡』であると、教育家たちは考へてゐるから）、行動してゐるのである。併しながら我々は教育家の恐れるそれ等の現象に注意を向けるべき理由が多々あるのである。何となれば、我々はそれ等の現象の內に性本能の本原的形成の解決を發見せんと期待するものだからである。

幼兒性感の顯現

指しやぶり

或る理由(それに就いては後に說くが)のために、吾人は幼兒の性的顯現の見本として指しやぶり(Ludeln–Wonnesaugen)を擧げたいと思ふ。これに就いては、ハンガリーの小兒科醫リンドナーLindnerが立派な研究をなし遂げてゐる。(一)

註(一) Jahrbuch für Kinderheilkunde, N. F., XIV, 1879.

拇指をしやぶること(Ludeln 又は Lutschen)はまづ乳呑兒に現れ、また成人するまで、或は一生續くこともあるが、これは口(唇)を以て吸付くのを律動的に反覆することで、その際營養分をとると云ふことは度外視されてゐるのである。唇自體の一部分、直ぐに間に合ふ今一つの好ましい皮膚の領域たる舌、さては大きな足の拇趾なども、吸付の對象となることがある。同時にまた物を掴みたいと云ふ欲望が起きて來る。これは耳朶を律動的に引張ることゝなつて現れる。さうしてそのために幼兒は他人の身體の一部分(大抵は耳)を同一目的のために掴まうとするやうになることがある。喜びの吸付(Wonnesaugen)の時は必ず總ての注意を集注するやうになり、やがては睡眠に、又は運動的反應を起

して恍惚（オルガスムス）に導くことさへある。（一）　喜びの吸付は身體の特に敏感な部分、例へば胸とか外部性器を摩擦し接觸するのと結合することも屢々である。この途を辿つて、多くの子供は吸付きから自慰へと到達するのである。

註（一）　この事は既に全生涯の間に亙つて眞實であること、つまり性慾の滿足は最良の催眠法であることを、示してゐる。神經衰弱的不眠症は、大抵の場合、性慾の滿足を得られないところから來てゐる。また亂暴な子守は泣く兒の性器を撫でさすることに依つて寢かせつけることも人の知るところである。

リンドナー自身はかゝる行爲の性的意義を認め、且つこれを敢然として强調してゐる。育兒室に於いては、拇指をしやぶることは子供の他の性的『不行儀』と同樣にたしなめられることが屢々である。から云ふ見解に對しては多くの小兒科醫や神經醫から激しい反對の聲が擧つたが、これは或る部分やはり『性的（セクシユエル）』と『性器的（ゲニタル）』とを混同してゐるところから慥に來てゐる。この抗議は、小兒の性的顯現を如何なる一般的特徵に於いて認めんと欲するかとの困難な、避くべからざる問題を投げる。我々が精神分析的研究に依つて洞察し得るやうになつた諸現象の關係からすると、指しやぶりはどうしても性的顯現であると見做さゞるを得ないし、また幼兒の性活動の本質的特徵をそこから研究して來ることが出來るのである。（一）

註（一）ガラント博士 Dr. Galant と云ふ人は一九一九年の『神經學中央雜誌』二十號に於いて、『指しやぶり』の題下に、或る成長した娘の告白を公表してゐる。この娘はこの幼兒的性活動を放棄せず、また指しやぶりに依る滿足を性的滿足と、殊に愛人の接吻に依る滿足と全然同一であると云つてゐる。『總ての接吻は一つの指しやぶりに比ぶべくもない。いや〱どうして……指しやぶりの時の全身に亙るよさは何とも云ひようがない。人々はひたむきに現世を離れて、全然滿足し、願望もなく幸福である。それは一つの不思議な感じである。我々にとつては安靜ほど、決して妨げられることのない安靜ほど、望ましいものはない。それは何ともいへないほど、ひたむきに喜ばしい。我々は何の苦痛も、何の憂ひも嘆きも感じない。或る別の世界へと連れ行かれる。』と。

自己色情

この例を更に立入つて論ずべき任務を我々は持つてゐる。幼兒の性活動の最も著しい特質として、この本能が他人に向けられないと云ふことを我々は强調する。幼兒は自己の身體で滿足する。彼はハヴロック・エリスのいみじき造語で云ふならば自己色情的である。（一）

註（一）、ハヴロック・エリスは『自己色情』"Autoerotícism," なる言葉に別の定義を與へてゐる。外界から喚醒された亢奮でなく、自己の内部に起る亢奮の意味に解してゐる。精神分析にとつては、對象に對する關係が本質的である。

次に明かなことは、指をしやぶる幼兒の行動が、既に體驗したことがあり、且つ今や想起されてゐ

る一つの快樂を求めることに依つて決定されると云ふことである。皮膚又は粘膜の或る個所を律動的に吸ふことに依つて、幼兒はやがて最も單純な場合に於いて滿足を得る。また幼兒が只今再經驗せんとしつゝあるこの快樂は、その最初の經驗を得たのは如何なる機會に於いてゞあつたかは、これを察するに難くない。嬰兒にとつて最初の、人生に於ける最も重要なる活動は母の乳房(またその代償)に吸付くことであつて、その事は既に幼兒にこの快樂を致へたに相違ない。嬰兒の口唇は性的帶域としての働きをなし、温い乳汁の流入することの刺戟は恐らくこの快感の原因となつたであらうと我々は云ふのである。抑々始めに於いて、性的帶域の滿足は營養攝取の滿足と相伴うてゐたのだ。性的活動は最初に於いて、生命維持のための機能の一つに已れを托して、後になつてそれから獨立するのである。存分に乳を吸つた嬰兒が乳房を離し、兩頰を眞赤にし淨福な微笑を湛へて眠りに入るのを眺めた者は誰しも、この樣子が後年に於ける性的滿足の表現と同型なる事を認めざるを得ないであらう。今や性的滿足の反覆慾は營養攝取慾から分離せられる。この分離は、齒が生えて營養攝取も專ら吸付くことに依らず咀嚼に依るやうになると共に避くべからざるものとなる。吸付きには子供は別の對象よりは自分自身の皮膚を好む。何となれば、その方が便利であるし、また幼兒がまだ支配することが出來ない外界から、かくして獨立することが出來るから、且つまたこのやうにして、云はゞ第二の(よしんば

第一のには及ばぬにもせよ）性的帶域を造ることになるからである。この第二の性的帶域が第一のに及ばぬからして、人間はやがて他人の同様な個所、口唇を求めるやうになるのである。（『自分を接吻出來ないのが殘念だ』と云ふのはこれを云ふのである。）

總ての子供が指をしやぶるわけではない。指をしやぶることを覺えた子供に於いて、口唇帶域の性的意義が殊に强烈であるのだと云ふことは出來よう。この性的意義が保存されると、この者は成人となつてからも常習的接吻者となり、また變態的接吻者となり、また男の場合には飲酒、喫煙の强い動機を供することゝなる。併しこれを抑壓してしまふと、食事を嫌惡してヒステリー的の嘔吐を催すやうになる。口唇帶域と聯絡あるために、抑壓は榮養の本能をまでも蠶食するやうになる。私の婦人患者の内で、食事不能、ヒステリー球狀形（グローブス）、頸筋を絞められるやうな感じ、並びに嘔吐などの症狀ある者の多くは、幼兒時代には盛んに手をしやぶつたものであつた。

しやぶり、卽ち喜びの吸付きに於いて、我々は既に幼兒の性的顯現の三つの本能的特徴を認めることが出來る。幼兒の性的顯現は生命に重要なる肉體的機能の一つに依屬することに依つて起源する。それは性的對象を知らない、自己色情的である。さうしてその性的目的は性的帶域の支配下に立つてゐる。これ等三つの特質はまた幼兒的本能の他の大低の活動に對しても妥當するものであることを、

吾人は假定しておかう。

幼兒性感の性目的

性的帶域の特質

しやぶりの實例からして我々は性的帶域の特徴として、なほ多くの點を引出すことが出來る。刺戟が一定性質の快感を生ずるのは、皮膚又は粘膜の一部分に於いてゞある。快感を生ずる刺戟は特別の條件に結び付いてゐることは疑ひがないが、その條件の何たるかは我々には分らない。律動的な特質が何等かの役割をその內に果してゐるには相違がない、さうしてこれが擽ぐりに類似して居ることが強く暗示せられてゐる。併し、この刺戟に依つて喚醒まされる快感の特質が『特殊』であると呼ばれ得るかどうか、またこの特殊さの如何なる部分に性的要素が存在するかはあまり惜でないやうである。心理學は快樂と苦痛の問題に就いては、なほ暗中を模索しつゝある。で、それ故に最も注意深い假定が、最も好ましい。我々は多分後節で、快感の特殊性を支持すると思はれる二三の理由に逢着するであらう。

肉體の個々の部分が非常に著しい樣子で性的特質を帶びてゐる。指しやぶりの例に於いて示したやうに、先天的な性的帶域がある。併し同じ實例はまた、皮膚や粘膜の他の如何なる部分も性的帶域の

機能を帶び得るものであることを示してゐる。だから、それ等の部分には或る適應性があるわけだ。快感の生ずるのは、それ故に、肉體の部分の性質に依るよりは、刺戟の性質に依るのだ。しやぶらうとする幼兒は自分の肉體をあちこちと探ねて、喜びの吸付のために何處か一つの個所を擇ぶ。そこでその個所は習慣に依つて、特に好きなところとなる。その時、もし先天的な性的の個所(乳頭、性器)を擇ぶと、勿論それが一番好きなところとなる。これと全然類似した轉位の傾向は、またヒステリーの症狀に於いて發見せられる。神經症患者に於いては、抑壓は本來の性的帶域に最も多く働く。そこで本來の性的帶域はその代りに、その亢奮を他の、普通成人に於いてはその働きを停止してゐる所の性的帶域に移すのである。そこでそれ等の帶域が、全然性器のやうな働きをするのである。併し、その他、しやぶりの場合と全く同樣に、身體の他の如何なる部分も性器としての亢奮を與へられることがあり得るし、また性的帶域となり得るのである。性的帶域とヒステリー帶域とは同一特質を示してゐる。(一)

註(一)　更に考へを進め觀察を續けてゐる內に、私は性的の性質を身體のあらゆる部分に、また內臟の器官に歸するやうになつた。後節ナルチスムスを論ずる個所を參照せられよ。

幼兒的性目的

幼兒的本能の性目的は、一定の擇ばれたる性的帶域の本來的亢奮に依つて滿足を得ることに存す

る。反覆したくなつて來るやうに、この滿足は以前に經驗せられたに相違ない。そして自然はこの出來事を單なる偶然に委せないやうに一定の手段を講じてゐるに相違ないと我々は確信するのである。口唇帶域に對してこの目的を果した手段に就いては、吾人は既に論じた。それは身體のこの部分が食物攝取と同時的に結合してゐることである。吾人はまた性の源泉として、他の同樣な機制に遭遇するであらう。滿足を繰返したいとの願望の狀態は二つの樣子で分る。それ自身寧ろ苦痛の性質を帶びた或る特殊な緊張の感じが見えることゝ、また中心的に條件づけられてゐるのだが周邊的性的帶域に投出されてゐるむづ痒さうな感じ、亢奮の感じとに依つて、それと分るのである。それ故に、幼兒の性目的は次のやうに定義することが出來る。——性的帶域に於ける投出された亢奮感情を、滿足感を與へてその亢奮感情を除くところの外的刺戟を以て置換へるにあると。この外的刺戟とは普通、吸付きに類似する手なぐさみである。

もし性的帶域に實際上の變化が起きる事に依つて、欲望が周邊にも喚醒まされるやうならば、それは吾人の生理上の知識と全然一致する。これはたゞ或る程度までをかしく思はれるに過ぎぬ。一つの刺戟はこれをなくするためには、同一個所に向けられた第二の刺戟を必要とするものゝ如くに思はれるからである。

性的顯現としての自慰（一）

註（一）ローレーダー Rohleder の『手淫』„Die Masturbation" 1899.『ヰイン精神分析學會討議』、『自慰』（ヰイスバーデン、一九一二年）などを參照せよ。これ等は浩瀚であるが內容のごた〳〵した文獻である。

幼兒の唯一の性的帶域の刺戟が我々に分つてしまへは、その性的活動に就いて知るべきそれ以上重要なことはない。この事を知るのは大きな滿足である。最も明白なる相違は滿足に必要なる行動の中に見られる。卽ち、その行動とは口唇帶域にとつては吸ふことであり、また他の帶域の場合にはその立場や性質に應じて、別の筋肉活動がなされる。

肛門帶域の活動

口唇帶域と同樣、肛門帶域はその位置上からして、肉體の他の機能に依屬することに依つてその性感を果すのである。肉體のこの領域の性的意義は元來非常に大であつたと考へなければならない。精神分析に依つて知り、驚いた事は、肛門から發する通常の亢奮を常態者が如何に色々に變形してゐるかと云ふことだ。またこの帶域が生涯の間、大部の性器的亢奮を保有してゐることが屢々だと云ふことだ。（一）幼兒時代には腸の障害を非常に屢々起し易いが、そのためにこの帶域に激しい亢奮が起き

る。で、このか弱い時代に腸の病氣をすると『神經質』になるとは常々人々の云ふところである。後年の神經症に於いては、腸の病氣は神經症者の症狀的表現に決定的な影響を及ぼし、腸の障害の全量がその病勢に走せ參ずるやうになる。肛門帶域の性的意義が少くとも形を變へて保有されてゐることを思ふと、昔の醫學が神經質狀態の說明に直腸の影響を重視してゐることを、滿更笑へなくなるのである。

註（一）文集第五卷にある『性格と肛門性感』並びに『肛門性感の變調に就いて』などの諸論文を參照ありたし。

肛門帶域の性的亢奮を利用してゐる幼兒は、糞便が肛門に堆積してその結果激しい筋肉の緊張を生ずるまでそれを保留してゐるので、直ぐに分る。これ等糞塊が肛門を通過することは、粘膜に非常な亢奮を與へる傾きがある。苦痛もあるが、別にまた一種の快感がある筈である。後年に偏屈になつたり神經質になつたりするその最も確かな前兆の一つは、幼兒が世話する人に便器の上にあてがはれた時に排便を拒み、この機能を自分の好む時まで保留しておく時に見られるのである。寢床を穢すと云ふことは、子供は介意しない。彼はたゞ排便時の副的快樂を失ふまいと介意するだけである。そのやうな機能を果さない子供を惡い兒だと云ふのは、教育者としてはこれまた慥に本當のことを洞觀してゐるのだ。腸の內に在るものは、性的に敏感な粘膜面を亢奮させるものであるからして、少年期の總

るまで活動を始めないところの今一つの器官の先驅の如き働きをなすのである。それのみならず、糞便は乳香兒に對して、なほ他の重要な意義を持つてゐる。子供は明かにそれを肉體の附加的部分として扱ふのである。それは最初の『贈物』であつてそれを排泄することに依つて子供が周圍の者等への服從を示し、それを拒むことに依つて反抗を示してゐるのである。この『贈物』からして、幼兒はやがて後に『子供』の意義を得て來る。子供は、性に就いての幼兒の考へ方に依れば、物を喰ふことに依つて得られ、腸から產れ出て來ることになつてゐる。

糞便を保留することは、このやうに始めは、肛門帶域の云はゞ自慰的亢奮を利用するための、或は世話してくれる人への關係に適用するための故意的過程であつたが、後には神經症者に非常に屢々見られる便祕の根源となるのだ。肛門帶域の全意義は、凡そ神經症者にして祕かに糞便を弄玩する習慣を有せざるものは殆どないと云ふ事實に於いて明白に覗はれる。(一)

註(一)　アンドレアス・サロメ Lou Andreas-Salome は『イマゴー』四卷(一九一六年)に載せた『肛門』と『性』に依つて、肛門性感に關する我々の理解を非常に深めたが、その中で彼はかう論じてゐる。――肛門並びに肛門から生じ來るものに依つて快樂を得ることの禁斷は小兒時代に始まるが、この禁斷の最初の歷史は幼兒にとつては重大な決定的意義を持たなければならない。幼兒はこの禁斷に際して周圍の者が自分の本能的亢奮に敵對することを感じ、自分が周圍とは別物であることを知り、且つ自分の快感に對する

最初の抑壓を完成するのである。『肛門』はその時以來、一切の拒否すべきもの、生活から退くべきものの象徵となつてゐる。肛門的現象と性器的現象とを純粹に區別する要求が後になつて起きるが、これ等兩者が解剖的に機能的に類似し關係あるために、これが妨げられる。性器裝置は腸管に隣接してゐる。『女に於いては、腸管に殆ど宿借りせんばかりである。』

も少し年長の子供が指で肛門の中を、又はその周圍を、操つて刺戟を與へる本當の自慰は決して珍しくない。

性器帶域の活動

幼兒の肉體のさまざまな性的帶域の内には、憶に最初の役割を演じないところの、最早期の性感情を帶びざるところの、而も後年に於いてこの大きな役目を果すべき運命にあるところの、一つの帶域がある。その帶域は男兒に於いても女兒に於いても、尿の排泄と關係がある（男性器、陰核）。で、前者に於いては粘膜の襞みの内に包藏されてゐるので、早期に性的亢奮を起し得る分泌液に依つて多分亢奮を與へなければならないやうになつてゐる。この性的帶域は實は本當の性器に屬してゐるのだがこの帶域の性的活動は後年の『常態的』性生活の始まりであるのだ。

解剖的位置のため、分泌物の過剩の流れのため、身體を洗つたり摩つたりするため、更にまた或る

偶然的の刺戟(女兒に於ては內臟器の蠢動の如き)のため、肉體のこの部分が感じ得るこの快感を、既に乳呑兒の時分にさへも覺え、これを反覆したいとの要求が眼覺めるのである。これ等實狀の總てを通觀し、また淸潔のための方法が寧ろ不淨の效果を與ふるに過ぎないことを考へて見るならば、一切の個人は幼兒として自慰を遁れ得ないのであるから、その幼兒的自慰に依つて、性活動に對するこれ等性帶域の將來の主位を確立するのだとの考へを避けることは出來ないのである。亢奮を除き滿足を與へんとするには、手を以て摩擦するやうに觸れるか、或は手を以て考へながら押すか、或は上腿を相互に押し合ふかの行動をなす。最後の遣り方は、女兒に於いて一層屢々行はれる。男兒が好んで手を用ふると云ふことは、男の性的活動の如何に重要なる部分が將來に於いて支配本能(Bemächtigungstrieb)に依つて成らざるかと云ふことを、既に示してゐる。(一)

註(一)　後年になつて自慰を行ふに普通と違つた技巧を用ふるのは、自慰禁斷の克服された影響を示すもの丶如くである。

吾人は幼兒的自慰を三期の樣相に區別しなければならぬと敢へて云ふが、これは單に事實の明白を期することになると思ふだけである。その第一は哺乳期に屬する。第二は四歲頃の性活動の短い開花期に屬する。第三になつて始めて專ら思春期の自慰と云はれるものに相當する。

幼兒的自慰の第二期相

乳兒の自慰は暫時の後に消失するやうに思はれるが、併しそれは思春期まで不斷に續きかくて文化人に望ましき發達からの始めての大きな逸脱の因をなすのである。乳兒期以後の或る幼兒時代に於いて、普通には四歲以前に於いて、その性器帶域の性本能が眼覺めるのが普通であつて、やがてまた新に抑壓を被るまで存續するか、或は斷絶することなく繼續するのである。這般の關係は非常に多種多樣であつて、個々の場合を仔細に分解することに依つて論究し得るのである。併しこの第二期の幼兒的性活動は、その總ての細々した點が最も深い（無意識的の）印象痕跡を當人の記憶に遺すものであつて、その人が健全に育つてゐる場合にはその性格の發達を決定し、思春期後に神經症に罹るならば、その神經症狀を決定するのである。（一） 後の方の場合に於いては、この性的時期は忘られてをり、その時期のものとして意識的に追憶されるものは轉位せられてゐる。――既に述べたやうに、私はまた常態的の幼兒健忘をこの幼兒的性活動と關係あるものと考へたためである。精神分析的探索に依つて、この忘れられたものを意識化し、無意識心理的材料から發してゐる強迫を取除くことが出來るやうになつたのである。

註（一） 神經症者の罪の意識は必ず自慰行爲の想起、大抵は思春期の自慰行爲の想起に結びついてゐるものであ

ることは、ブロイラーが最近に認認したが、それが何故であるかと云ふことは、なほ幾多の分析的說明を俟たねばならない。この條件の最大の、最重要の素因は、恐らく次の事實であらう。自慰は實に幼兒性感の全部を表はし、それ故にまたこれに附隨する罪障感を取入れること。

乳兒自慰の復歸

乳兒期の性的亢奮は所謂幼兒時代に復歸して來るが、その復歸し方は、中心的に條件づけられたむづ痒さの亢奮で自慰的滿足を要求するやうになるか、或は成熟後の手淫と同じく何等行動の助けなくして滿足を得る手淫に類した過程となつてである。後者の場合は女兒に於いて、また幼兒時代の後半に於いて、一層屢々見られる。何がさうさせるかはよく知つてゐないが、併し早期の能動的自慰の時代が基礎となつてゐるのに、定まつてゐないまでも、屢々である。この性的顯現の症狀は貧弱である。性器組織はなほ未發達で、一切の徵候はそれ故に、性器組織の、云はゞ後見者であるところの尿道組織に依つて演ぜられる。この時期の大抵の、所謂膀胱障害は性的障害である。癲癇樣の發作を示さない場合には、夜尿は遺精に相當する。

性的活動の復歸に對しては、內的原因と外的契機とが、これを決定してゐる。これ等兩者は、神經症の場合に於いては、症狀の形態に依つて判定することが出來るし、また精神分析的探究に依つて確

實に發見することが出來る。內的原因に就いては、後に述べるであらう。偶然的な外的契機は、この頃に於いて大きな、持續的な意義を獲得するのである。最初の外的契機としては、未成熟の幼兒を性對象として取扱ひ、誘惑の影響を及ほし、また印象多き事情の下に於いて性器帶域の滿足を敎へることであつて、そのために幼兒は大抵自慰のこの滿足を自分で繰返さゞるを得ないやうになるのである。このやうな影響は成人か、または他の子供から來る。私は『ヒステリーの病源に就いて』（一八九六年）の拙論に於いて、如何にそれが屢々起り、また如何なる意義を持つてゐるかを看過はしなかつたつもりである。よしんば當時私は、常態的の個々人も幼兒時代に同じ經驗を持つものであることを知らなかつたし、從つてまた性的素質や發達に見られる素因に對してよりも、誘惑をより重要視してゐたにもせよ——。(一)幼兒の性生活を喚起するには誘惑は何等必要がないと云ふこと、またそのやうな喚起は內的源泉から自發的に來り得るものであることは、固より明かである。

註（一）ハヴロック・エリスは『性的感情』（一九〇三年）に關する研究の附錄中で、後年常態者となつてゐる人々の幼兒時代に始めて受けた性的亢奮とその契機とに就いての澤山の自傳的報告を與へてゐる。これ等の報告には勿論、幼兒的健忘に依つて隱蔽されてゐる性生活の歷史前時代の事が含まれてゐないと云ふ缺點はあるが、この時代の事は、神經症になつてゐる個人を精神分析することに依つてのみ闡明される。併しこれ等の報告はそれにも拘らず、さまぐな點で價値があり、この種の見聞に依つて私は自分の病

源論的假定を變更して本文中に擧げた如きものとなすに至つたのである。

多形的變態性

幼兒が誘惑の影響を受けると多形的に變態となり、またあらゆる可能なる邪道に導かれ得るものであることを知るは、我々にとつて甚だ爲めになる事實である。併しその事は、幼兒に於いて既にその素質の存することを示してゐるのである。そのやうな變態の形成は未だ僅少の抵抗をしか被らない。何となれば、羞恥、嫌惡、道德心の如き、性的脫線への精神的防波堤は、勿論幼兒のこの歲頃では築造されてをらぬか、或は漸く築造されかゝつたばかりに過ぎない。この點に於いては、幼兒は多分かいなでの無敎養の女と、その行動に於いて異るところはない。實際、敎養のない女には多形的變態の性癖が存するのである。そのやうな女は普通の條件の下に於いては性的に常態であり得るかも知れないのだ。併し巧みな誘惑者に導かれて、彼女はあらゆる變態に喜びを見出し、その變態を自分の性的活動として保持するやうになるのである。この同じ多形的、又は幼兒的性癖は娼婦の職業的活動には適してゐるのだ。で、非常に多數の娼婦竝びに娼婦に適してゐると吾人と見なさゞるを得ない女に於いて、よしんば彼女等がこの仕事に從つてゐないにもせよ、彼女等が一律的にあらゆる變態への性癖を具へてゐる點に於いて、彼女等が普遍的に人間的であり、且つ原始的であることを認めないわけに

は、畢竟するに行かないのである。

部分本能

その他云つておかねばならないことは、誘惑の影響だけでは、性本能の始まりの事情を闡明するに足らず、寧ろ、幼兒が始めの程は何の必要をも示さゞる性對象を倚早的に宛てがうと云ふ點に於いて、幼兒的性本能の始まりの事情に對する我々の洞觀を亂すものであると云ふことだ。併し、幼兒の性生活は、主として性的帶域の支配下にあるとは云へ、また自分以外の人を始めから性對象と見做してゐるやうな點もそこに存してゐることを、我々は承認せざるを得ないのである。その證據に、見たり見せたり、或は虐待したりする衝動が存してゐて、これ等の衝動は性的帶域とはいさゝか獨立的に顯現するものであり、またそれは後になつて性生活と始めて密接な關係に入るに過ぎないものである。併し、幼兒時代に於いて既に、性帶域的性活動とは別物として、獨立的の活躍が認められる。幼兒は何よりもまづ羞恥を知らない。で、或る早期の年代に自分の肉體を露出させることに、殊に性器の部分をひけらかすことに、喜びを感じてゐることは疑ひがない。この變態的露出願望の相反になる、他人の性器を見たがる好奇心は、やゝ後期の幼兒年代に漸く現れるやうである。その時は羞恥感が既に或る程度まで發達してこれを妨げてゐるのである。誘惑の影響の下にあつては、偸視的變態は小兒の

性生活に對して大きな意義を持つことが出來るのである。併し、常態的竝びに變態的患者の幼兒時代を私が調べて見たところでは、偸視の衝動は幼兒に於いて自發的の性的顯現として表れ得るものであると結論しなければならない。小兒は自分の性器に——普通に自慰に依つて——一度注意を向けると、外部からの干渉なくともその方に進んで行き、從つてまた自分の遊び仲間の性器にも生々した興味を持つやうになるものである。そのやうな好奇心を滿足させる機會は兩便の必要を滿す間に與へられるので、そのやうな子供は偸視者(voyeurs)となり、他人が糞尿を排泄するのを熱心に眺めるやうになる。この傾向が抑壓された後に、他人の性器(同性のもの、又は異性のもの)を見ようとの好奇心は惱ましい欲求となつて殘存し、それが多くの神經症者の場合に於いて症狀形成の最も力强き衝動となるのである。

性本能に於ける虐待性的要素は、性的帶域に結付いてゐる性的諸活動からは更に一層無關係に幼兒に於いて發達する。虐待性は殊に少兒の特質に近いものである。と云ふのは、支配の衝動が他人に苦痛を與へるのを抑制する禁壓は——つまり同情心は——比較的遲く發達するからである。この衝動の根本的な心理分析は、我々の知る通り、まだ十分になされてゐない。我々は、この虐待性的感情が支配の衝動から發し、性器が後年の役割を執る以前の性生活に於ける或る時代に現れるものであると假

定することが出來よう。やがてこの虐待性的感情は性生活の一時期を――我々が後に性器前的組織として記述するであらうところの一時期を――支配するのである。動物や遊び仲間に對して特に殘忍さを示すので目に立つ子供は性的帶域に於いて激しい、成熟前の性活動をなしつゝある子供であることが察せられる。さうして總ての性本能が同時的にみな成熟前の狀態にあるのに、性的帶域だけが慥に第一に擡頭して來てゐるらしいのである。同情心と云ふ障碍がないと、虐待性と性本能とが子供の時分に結び付いて、それが後年になつても破り難くなるのである。

虐待への受働的本能(被虐性 Masochismus)の性的根源が肛門の苦痛的刺戟に見出されることは、ジャン・ジャク・ルソーの懺悔以來、總ての敎育家に知られてゐることである。このために敎育家たちは、通常體罰はこの部分に加へられるが、斯る體罰は總ての子供等に於いて避ける方がよいと考へるやうになつた。子供に於いてはリビドーは後年の敎育の力に依つて傍系的道路へ導かれるのであらう。(一)

註(一) 幼兒性感に關する如上の主張の本質は、成人を精神分析した結果、一九〇五年に正しいとなつたものである。幼兒への直接的觀察はその當時には十分に利用せず、たゞ時々片鱗を示したり價値ある確證を與へたに過ぎない。その時以來、幼兒の危機に於ける神經症の二三の場合を分析することに依つて、幼兒の性心理を直接的に理解することが出來るやうになつた。(『精神分析竝びに精神病理的研究年報』一卷二卷、一九〇九年。)直接的觀察は精神分析に依つて得た結論を十分に確證し、かくしてまた精神分析法

の信頼し得べきことのよき保證を與へたことを明言し得るのは、私の深く滿足に思ふところである。

それのみならず、『五歳の一男兒の恐怖症の分析』（年報、第一卷）に依つて、我々が精神分析に依つて未だ知り得なかつたことを學び得たのである。卽ち、非性的對象並びに關係に依つて性的なものを代表せしめること、つまり性的象徵作用は、遠く幼兒が始めて言語を學ばんとしつゝある時代にまで溯り得ることを知つたのである。私はまた、右に說き來つたところには、一時的分離としての自己色情と對象愛との二期間の區別を、明瞭を期するために立てたが、それが缺陷であることを氣付くやうになつた。引用された分析からして（また、ベルの上揭の書からしても）、我々は、三歳から五歳までの幼兒が判然たる對象選擇をなすと共に、またその際に强烈な感情を伴はしめるものであることを、知るのである。

幼兒の性研究

知的衝動

幼兒の性生活がその最初の開花に達するその頃に、つまり三歲から五歲までの間に、彼等に於いて、知識本能、又は研究心とも云ふべき活動の萠芽がまた見え出すのである。知識衝動はエレメンタルな諸本能の中にも數へ入れられないし、さりとてまた性に所屬せしめることも出來ない。その活動は、一方、事物を支配し獲得することの昇華(淳化)方法に相當し、他方、偸視慾のエネルギーを以てなされる。併し知識衝動の性生活に對する關係は特に意義が深い。何となれば、吾人が精神分析に依つて體驗したところに依ると、幼兒の知識衝動は思ひも寄らぬ程夙く、且つ意想外に激しく、性問題から引出され、實は多分性問題に依つて喚醒まされてゐるのである。

スフィンクスの謎

幼兒に於いて探究活動の仕事の始まるのは、理論的興味からよりは、實踐的興味からである。別の子供が實際に生れて來ること、或は生れて來るやうに思ふことからして自分の存在の條件を脅され、またこれに聯關して自分が親の愛護の獨專を失ふ心配が起り、そのために子供は鋭敏に物を考へるや

うになる。幼兒が最初に考へる問題は、その覺醒の事情に相應して、性別の問題よりは、子供は何處から來るかの謎である。これはまたテーベのスフィンクスが提出した問題であるのだが、たゞ形が少し歪んでゐるだけだ。どう歪んでゐるかは容易に闡明することが出來る。性別の事實は幼兒には普通に最初、何の苦もなく受容される。男兒は自分の知つてゐる總ての人間に於いて、自分のと同じやうな性器があると豫想し、それのない人間があるなどとは考へられないことは甚だ自然である。

去勢コンプレクスと男性器嫉妬

この信念は男兒が頑强に株守するところであつて、やがて事實を觀察することに依つてこの信念に動搖を來すが苦しい内的煩悶(去勢コムプレクス)の後に、遂にこれを放棄するのである。女のこの失くなつた男性器(ペニス)の補償形成と云ふことが、多くの變態を形作る上に大きな役割を果すのである。(一)

註(一) 我々はまた女の去勢コムプレクスに就いても一言しておくが正當である。男兒も女兒も、女は元來男性器(ペニス)を持つてゐたのだが去勢されて失くなつたのだと云ふ考へを持つてゐる。が、遂に、女はペニスのないものであると分るので、そのために男は女を永く輕視するやうになるのが屢々である。

このやうに一切の人間にはこの(男)性器があるのだとの假定は、著しき、及ぼすところ重大なる幼兒的性觀の最初のものである。生物學的知識に依つてこの先入見を正され、女の陰核は當然男性器の

代償と見做さるべきものであると知つても、子供には追付かぬのである。女兒が自分のとは違つた男兒の性器を瞥見した時には、同樣な偏倚の反應を起さない。女兒は直ちにそれを容認し、さうして漸くペニスを羨むやうになる。その結果、自分も男兒になりたいと云ふ重大な願望を起すやうになる。

出産觀

多くの人間は思春期以前に於いて、子供は何處から來るかと云ふ問題に對して如何に激しい興味を覺えたかと云ふことを明白に想ひ出すのである。その時分の解剖的解決は甚だまち〳〵である。子供は乳房から出ると云はれたり、或は身體を割いて引出すと云はれたり、或は臍が自然に割けて出て來ると云つたりする、等々。早期幼年時代に出産の事を如何に考へてゐたかは、精神分析以外には我我は殆ど滅多に想起さない。その事は久しく抑壓を被つてゐるが、調べたその結果は全く一致してゐる。人間は或る一定のものを喰べるから子供が出來るのだ（童話に於ける如く）とか、また子供は通路のやうな腸管から生れるとか云ふのである。このやうな幼兒的出産觀は動物界の出産事情を聯想せしめる。殊に、哺乳動物以下の腸管を想はしめる。

性交を虐待性的なものと見ること

さう云ふ頑是ない時代の子供は性の何たるかを解さないと思ふて、成人はつい自分たちの性交を見

られるやうな機會を與へたりすると、彼等子供はそれを一種の虐待、暴行、つまりサディスティックな意味に解するやうになる。精神分析して見ると、そのやうな早期幼兒時代の印象が、後年になつて性目的をサディスティックなものに轉位する如き性癖を形作るに寄與してゐることが分る。それのみならず、子供はまた性交とは何であるか、彼等の解してゐる如き結婚とは何であるかと云つたやうな問題を考へ、さうしてその祕密の解決を大低は排尿、排糞の機能に關係のある方面に求めるのである。

幼兒的性觀の見當違ひの典型的なもの

一般的には、子供の性觀は自分等の性的素質の寫しであり、またそこに途方もない間違ひもあるにはあるが、大低の人が思ふよりはもつと性に就いての理論を彼等が持つてゐるものであると云ふことが出來るのである。子供等もまた母親の姙娠して變つてゐることを知覺し、さうしてそれを正しく解釋することを心得てゐる。赤ん坊は鴻の鳥がくわへて來ると云ふ話を幼兒等は聽いて、默つてこそゐるが深い疑ひを抱いてゐる。併し幼兒の性探究には全然判らない二つの要素、即ち蕃殖せしめる精液の役目と女性器の凹所と——正に幼兒に於いて未發達の部分に當る——があるからして、彼等の探究はいつも必ず失敗に終つて一種の諦めに終るのであるが、そのために彼等の知識慾には永續的な傷害の殘ることが一再でない。これ等早期幼年時代の性探究は常に單獨に進められ、世に立つて獨立的に

振舞はんとすることの第一歩を意味し、從前は全然信頼して來た周圍の人々に對し幼兒が强き疎隔を覺える契機となるのである。

性組織發達の諸段階

吾人はこれまで幼兒的性生活の特質として、それが本質的に自己色情的（その對象を自分の身體に見出すこと）であり、またその個々の部分本能が、全體として相互に聯絡なく獨立してをつて、快感獲得に努めてをると云ふ二點を擧げて來た。この發達の歸結が、つまり所謂成人の常態的性生活であつて、そこでは快感獲得が蕃殖機能の下に事（つか）へ、部分本能は單一の性帶域の主權下に立つて、自分以外の性對象に性目的を果すに足るだけの强固な組織を構成してゐるのである。

性器前期の性組織

精神分析の力を借りて、これ等發達經路に於ける禁制と障害とを研究して見ると、今や部分本能のそのやうな組織の附加物と前階とを認めることが出來るやうになるのである。その附加物と前階とは、同時に一種の性的支配を供するものである。この時期の性組織は常態的に無事に進み、僅かにそれと察し得るくらゐである。たゞ病的な人に於いてのみこの時期は變態的となり、粗雜な觀察者にも氣付かれるやうになる。

性器帶域が未だ主位的役割に就かざる性生活の組織は、吾人これを性器前期（プレゲニターレ）と呼ばうと思ふ。その

やうな組織の二つを、吾人は今までのところで知つてゐる。それ等二つの組織は早期動物狀態への復歸の如き觀を與へるのである。

そのやうな性器前期的性組織の最初の一つは、口唇的（オラール）、又は食人種的（カニバリツシユ）とも云ひ得べきものである。この時期の性活動はまた榮養物攝取から獨立してゐない。それ自身の內部の矛盾がまだ矛盾になつてゐない。一つの活動の對象はまた他方の活動のそれであり、その性目的は對象を自分の肉體內に取込むこと(Einverleibung)に存する。これは後に同一化(Identifizierung)となつて意義深き精神的役割を果すことになるものゝ初型である。このやうな性組織時期は虛構の如くであるが、病理學からは必然的のもので、指をしやぶることはこの時期の殘物と見られる。しやぶりに於いては、性的活動は榮養攝取の活動から分離して、自分以外の對象の代りに自分の身體に於ける一對象をとるものである。(一)

註（一） 成人せる神經症患者の場合に於けるこの時期の殘物に關しては、アブラハムの著『最早期の性器前期的發達段階に於けるリビドーの研究』を參照せよ。それ以後の論文『リビドー發達史考』（一九二四年）に於いては、アブラハムはこの口唇時期のみならず、後の虐待性的肛門時期をも二つの小時期に分けてゐる。それ等の時期に於いては對象に對する態度が區々であつて、それ〴〵に特質をなしてゐる。

第二の性器前期は虐待性的肛門性感時代である。この時期に於いて、性生活に付きものである相反

對立が既に形成せられてゐる。併しその相反對立はまだ男性的、女性的と名付けらるべきものではなく、能動的、受動的と名付けらるべきものである。この能動性は肉體筋肉力の方面からの支配衝動に依つて生じて來る。受動的性目的を持つ器官としては、就中、性帶域としての腸粘膜が妥當してゐる。兩方の働きに對してそれぐ〵對象が存在してゐるが、併し同じ對象と云ふわけではない。それと共に、他の部分本能が自己色情的に活動する。この時期に於いてはこのやうに、性が兩極的（能動的にして受動的）であることゝ自分以外のものを對象にとることゝが既に證據立てられてゐる。蕃殖機能の下に於ける組織と隸屬とは、まだ見られない。（二）

註（一）先に擧げた論文の中で、アブラハムはかく論じてゐる。肛門は胎兒萠芽の口に相當するところ（Urmund）から生じたもので、つまり性心理發達の生物學的初型の如き觀を呈してゐる。

アムビヴレンツ

かう云ふ形式の性組織は生涯中保存持續せられ、性活動の大部分を永く自分の方に引寄せてゐる。加虐性の傾向が強く現れたり肛門帶域が腸管としての役目を果したりすることは、性活動が非常に古風なものである證據である。性生活のそれ以外の特質としては、一對の相反衝動が殆ど同じやうな風に形成されてゐることである。その相反衝動の働きをばブロイラー Bleuler は、いみじくも相反並存（アンビヴァレンツ）

性感情(Ambivalenz)と云ふ名を以て呼んでゐる。

性生活に性器前期的組織のあることは神經症患者を分析して見て假定したことであつて、その方面の知識と獨立しては殆ど價値がないのである。分析の努力を續けて行くならば、常態的性機能の構成と發達とに關して、更にこれ以上の事を知り得べきことを期待することが出來る。

幼兒の性生活の如何なるものであるかを十分に示すには、既に幼年時に於いても屢々、又は常に必ず、對象選擇と云ふことが立派に行はれてゐるといふ事を吾人はなほ云ひ添へておかねばならぬ。對象選擇が思春期の發達期間の特質として見らるべきものであることは、吾人既にこれを述べたが、幼年期の對象選擇の行り方も、性活動全體がその目的を果さんと欲する唯一人物に方向をとると云ふ風にである。して見れば、これは思春期以後の性生活の定型に非常に近似したもので、それが幼年時代に於いて可能であるのだ。兩者性生活の形態の相違は、幼兒のは部分本能の總括竝びに部分本能が性器の主權下に隷屬することが行はれないか、或は只不完全にしか行はれないと云ふ點に存するのである。この主權が蕃殖の爲めに奉仕するやうになることは、つまり性組織が發達中に閲すべき最後の段階である。(一)

註(一) この邊の意見を私は自分で後(一九二三年)に變更して、幼兒期發達中の二つの性器前期的組織の後に、第

三の時期を挿入することにした。この時期は既に性器的の名に價し、一つの性對象と、その對象に對する性活動の集注とが見られるが、併し本質的な點に於いては性的成熟者の確定的な性組織からは區別せられる。つまり、この時期は一種の性器(男性器)のみしか知らないものである。それ故に私はこの時期を男根的性組織段階と名付けた。(『幼兒的性器組織』、國際精神分析學雜誌、九卷一九二三年)それの生物學的初型は、アブラハムに依れば、何れの性にもなり得べき胎兒の性器狀態である。

對象選擇の二期

對象選擇に二期あること、つまり二度對象を追及すると云ふことは、正に典型的な出來事であると云ひ得る。第一番目は二歲から五歲の間に始まり、潛在期間中は休止してゐる。その性目的が幼兒的であることはその特徵である。第二番目は思春期と共に始まり性生活としての一定の形態をとるのである。

對象選擇に二期あるこの事實は、本質的には潛在期なるものが中間に介在するために生ずるのであるが、併しこの窮極目的を障害される點では甚だ意義の深いことである。幼兒的對象選擇の歸結は後年の時代にまで影響して來る。そのやうな歸結はそのまゝに保存されるか、或は思春期に至つて更新して來る。兩時期の中間に於いて抑壓作用の發達し來るにつれて、幼兒的對象選擇の歸結は役に立た

なくなる。その性目的は弱められて來て、今や性生活の感傷的の流れ（zärtliche Strömung）とも云ひ得べきものが現れて來る。精神分析に依つて調べて見ることに依つて始めて、この感傷性、崇拜、尊敬の背後に、古い、今では役に立たなくなつた幼兒的部分本能の性的活動の匿れてゐることが分るのである。思春期の對象選擇は幼兒的對象を放棄して、感覺的流れとして新たに始まらなければならない。兩方の流れが合致しないと云ふことは、屢々その結果として、性生活の理想の一つたる、一切の欲望を一對象中に統一すると云ふことが、協はなくなるのである。

幼兒性感の源泉

性本能の根源を探ねんと努めてゐる内に、吾人はこれまでに次の諸項を發見した。即ち、性的亢奮は(a)他の有機的現象に因つて體驗した滿足の模倣として起ること、(b)性的帶域の周邊の適切なる刺戟に依つて起ること、(c)我々にその起源のなほ十分に分明しない二三の『本能』、例へば偸視本能、加虐本能などの表現となつて起ること。後年から幼兒時代に溯つて精神分析的に研究すると共に、同時に幼兒を觀察して見ると、なほ他に、性的亢奮となつて定まつて流れる源泉のあることが指示出來る。幼兒期觀察はとかく誤解し易い對象を取扱ふ不利があるし、精神分析はその對象に對してもその結論に對しても、非常な迂路を通つて漸く達することが出來ると云ふ困難がある。併しこれ等二つの方法を一つに働かせることに依つて十分確實な認識に到達することが出來るのである。

性帶域を調べた時に、我々は既に發見したことであるが、これ等の皮膚の個所は特に亢奮し易い個所であると云ふだけで、何等かの程度に於いては皮膚の全面がさう云ふ性質を帶びてゐるのである。から云ふ次第であるから、我々は、皮膚の刺戟一般の內、或る種類のものが非常に判然たる發情的效果を有するのだと云ふ事を知つても驚かないであらう。それ等刺戟の內、特に溫度の刺戟を我々は擧

げておく。そこで、温浴に治療的效果あることは、多分我々に容易に理解し得るであらう。

機械的亢奮

更らにまた、吾人はこゝに肉體を律動的、機械的に振動させることに依つて性的亢奮を獲ることをも同列に論じておかねばならぬ。そこには三重の刺戟の效果がある。前庭神經の感覺裝置に對する效果と皮膚に對する效果と、體内の部分(筋肉、腱裝置)に對する效果と。その效果のために快感が生ずるところを見ると、我々はかゝる場合に『性的亢奮』と『滿足』とを區別なく用ゐることが出來ると云ふことを强調して然るべきであるし、また子供が受働的に動かされる運動(例へば、ブランコや空中飛行)を非常に好み、絕えずそれを繰返したがるのは、何等かの身體動搖に依つて快樂を得る證據である。(一) むづかる子供を寢かし就けるためにはいつも必ず搖り籃が用ゐられることは、人々のよく知るところである。車に乘つて搖すぶられること、また後には汽車に乘つて搖られることはやゝ年長の子供には魅惑的な效果を與へるもので、少くとも總ての子供はいつかは車掌か御者になりたがる程である。鐵道上の出來事には彼等は非常に高度の興味を寄せ、空想の盛んな年代(つまり思春期以前)には、それを種子にして非常に精妙な性的象徵を造り出すのが常である。何故このやうに鐵道旅行と性感とを結びつけるやうになるかと云ふと、それは明かに運動感覺の愉快さから來てゐる。やがてそこ

に抑壓か加はると、子供時分に好きであつた多くの事柄がその反對にいやになる。そこで、それ等の人物は青年となり、或は成人となると、搖籃やぶらんこを嫌ふやうになる。汽車に乘ると疲れたり、車に乘ると不安になつたり、或は鐵道を恐ろしがる事に依つて、苦痛なる經驗を反覆すまいとするやうになる。

註（一）ぶらんこに乘つてゐて動搖する空氣が性器に當つて、性的快感を直接的に覺えたことを記憶してゐると云ふ者が少くない。

なほ玆に、まだ不明ではあるが、云つておかなければならない事は、驚愕と機械的震動とが合一した場合には、重いヒステリー型の外傷性神經症が生ずると云ふ事實である。我々は少くとも斯く主張することが出來る。これ等の影響は極些細な激しさのものと雖も性的亢奮の源泉となり得るものであるから、非常に大きなものである場合には、性的機制又は化學作用の深い攪亂を起すものであると。

筋肉活動

爲めになる、能動的な筋肉活動が子供にとつて必要であり、またその必要を滿すことに依つて子供が異常な快感を獲ることは周知の事實である。この快感は性的なものと何か關係があるか、快感そのものゝ內に性的滿足を含んでゐるか、或は性的亢奮の源因たり得るかどうか、これ等はなほ批評的に

考慮して見る餘地があるが、さう云へば前に述べたところの、受動的運動の感覺に依る快感は性的性質を帶びたものでありまた性的亢奮を與へるものであると云ふ命題も、實はやはり批評的に考慮して見る餘地があるのである。併し事實は雄辯である。多くの人々の報告してゐるところに依ると、彼等は遊び仲間と摑み合つたり相撲したりしてゐる間に、その性器に最初の亢奮を覺えたと云ふ。さう云ふ場合に於いては、一般的な筋肉緊張以外に、相手との皮膚の接觸が或る效果を與へるのである。『好いた同志は罵り合ふ』と云ふ言葉があるやうに、後年には言葉の爭ひとなるが、それが子供の時分には或る相手を定めてそれと筋肉を緊張させる傾向があるが、この事はこの相手を對象として選擇してゐることのよい證據である。筋肉活動に依つて性的亢奮を進めることの內に、加虐性的本能の根の一つを認めることが出來よう。幼兒時代に於いて摑み合ひと性的亢奮とを結び付けることが、多くの人人の後年の性本能の特に好んで進む方向を決定するやうになるのである。(一)

註(一) 步行障害と空間恐怖の神經症者を分析して見ると、運動快感に性的性質の存することは疑ふべからざることゝなつた。近世の文化敎育は、誰しも知つてゐる通り、非常に廣範圍にスポーツを採用して靑年等をして性活動から離脫せしめてゐる。寧ろ、近世敎育は彼等をして運動の快樂を以て性的享樂に置換へしめ、またその性的活動を自己色情的要素に還元せしめてゐると云ふ方が正しいであらう。

感動過程

子供等に於いて、性的亢奮の源泉がなほ他に存することは殆ど疑ひの餘地がない。總ての激しい感動過程、例へば驚きの亢奮すらもが性感を喚起すこと（この事はまたそのやうな感動が病氣の原因となることを理解するの一助となり得る）は、その當時の觀察に依つても、後年の取調べに依つても、これを確認することが容易である。學童にとつては試驗をされることの心配、難問題の緊張は、學校に對する氣持に重大な意義あるばかりでなく、性的顯現の出口にも同様に重大である。現に、そのやうな事情の下に於いては、一種の亢奮感が擡頭し來り、そのために性器をいぢりたくなり、遺精に類した現象が生じてその結果頭が惡くなると云ふやうなことが非常に屢々起るのである。學校でこのやうに子供が急に頭が惡くなつたりすることは教師にとつては誠に謎であるが、併しこれは抑々子供等の性が眠醒め來ること丶關係させて考へるべきことなのである。多數の、それ自身不快なる感動たる心配、戰慄、殘忍などに依つて起る性的亢奮の效果は、成熟者としての生活中にまでこれを保存してゐる人が少くない。さうしてこの事はまた多くの人々が、或る隨伴事情（物語を讀んだり、芝居を見たり、凡そ實在界から離れてゐる時）のために不快感の峻嚴さが抑制されてゐる時だけには、さう云ふ感覺を味ふ機會を却つて求めてゐる事の説明にもなる。

激しい苦痛の感覺もまた同樣な色情的效果を生ずるもので、殊にその苦痛が隨伴事情に依つて淡くせられ、又は遠々しくされた場合には然りである。果してさうであるならば、這般の關係には加虐被虐的本能の主要根原の一つが潜んでゐる。この本能が如何に複雜多樣な構成であるかは、我々は漸次に分つて來るのである。(一)

註(一)(所謂『色情』上の被虐性。)

知的な仕事

それから最後に、一つの知的な仕事に注意を集注すること、竝びに精神的緊張一般は、多くの青年に於いて、成人に於いても同樣、性的亢奮に導くものであることは明かである。この事は、知的な『仕事仕過ぎ』から神經衰弱に罹ることの病源が從來不明であつたのを說明するものとして容認せられる唯一の基礎である。

以上、吾人は幼兒性感の起源を說き來ること必ずしも十分ではなかつたが、而も結論としてこれを大觀して見るならば、大體次のやうに認識せられるのである。――性的亢奮の過程(その本質の何たるかは、勿論吾人には正に謎となつてゐるが)は動きを持つやうにされてゐるやうである、このやうな動きを多少とも直接的に與へる素因は、感覺表皮――皮膚及び感覺器官――の亢奮である。就中、最も

直接的には、性的帶域と名付けられる或る個所の亢奮である。性的亢奮のこの源泉に於いて基準となるものは實は刺戟の性質であるが、(苦痛に於ける)激しさの素因とても全然重要でないことはない。併し更にこの上に、有機體中には或る組織があつて、それ等の組織のために、いろ〳〵な內的過程の間に性的亢奮が隨伴效果となつて(それ等の過程の激しさが或る量的限界を超えたゞけで直ちに)現れるやうになるのである。吾人が性慾の部分本能と名付けたものは、性的亢奮のこれ等內的源泉から直接的に出て來るか、或はそのやうな源泉竝びに性的帶域からの亢奮の綜合であるか何れかだ。有機體中に起る何等かの重要なるものにして、性本能の亢奮に寄與せざるものはない。これはあり得ることである。

只今のところ私にはこれ等の一般的命題を一層明白に確實にすることは不可能のやうに思はれる。何故かと云ふに、その理由は二つあると私は考へる、第一は、かう云ふ探究法が全然新しいと云ふこと、第二は性的亢奮の本質は我々には全然分つてゐないと云ふ事である。とは云へ私は、將來に於いて廣濶なる眼界を打開する見込みのある二つの點に就いて語つておくことを斷念するに忍びないのである。

性的素質に種々あること

（a） 吾人は前に既に、性的帶域の構成がまち〳〵であるために持つて生れた性的素質も多種多様であると云ふことを論じたが、丁度それと同じに我々は今度は、性的亢奮の間接的源泉に就いても同様の論を試みることが出來る。ところが我々の考へでは、これ等の相異る源泉はあらゆる個人に何等かの寄與を供してゐるが、總ての人間に於いて平等の強さで存すると云ふわけではないし、また性的亢奮の或る源泉が特に發達してゐると云ふことは性的素質の相違のまた一つの原因となつてゐるのである。（一）

註（一） 以上の論述からして次の如き歸結の生ずることは否み難い。あらゆる個人には口唇性感、肛門性感、尿道性感その他が認められること、またこれ等の性感に相當する精神的コムプレクスがあると云ふとも、それは必ずしも變態又は神經症との判斷を下したことにはならぬと云ふこと。常態との變態との區別は性本能の個々の構成要素の相關的の強さ、並びに常態と變態とが發達の過程中にそれ等の要素を使役する具合に存するに過ぎない。

相互感化の道

（b） 性的亢奮の源泉などと從來譬喩的な物の云ひ方をして來たが、今や我々はそれを捨てると、他の機能から性感の方へと導き來る一切の結合の道は、また反對の方向へも辿り得るものであることを

推想せざるを得ない。若し、例へば口唇帶域が兩機能の共通個所であるために榮養攝取に際して性的滿足が得られることになるのであるならば、共通帶域の性的機能が障碍せられた場合には、榮養攝取の方も障碍せられることは、これを理解するにさして困難はないのである。注意の集中が性的亢奮を喚起し得ることを知るならば、我々は直ちに、その同じ道を但し反對の方向から辿ることに依つて、性的亢奮を有意的注意に利用することが出來るとの假定を下すは、必ずしも不自然でない。神經症者の症狀は性的過程の障碍から發起するものであることを私は知つたのであるが、それ等症狀の大部分は、他の非性的の肉體機能の障碍となつて現れる。さうしてこの作用は從來理解すべからざることゝされてゐたが、併しそれ等の作用は性的亢奮の所産を支配する力の相反となつて表はれてゐるに過ぎないならば、一向不思議でも何でもないのである。

併し性的障碍が肉體の他の機能を蠶喰する時に辿るその同じ道は、健康者に於いては、今一つの重要な機能に奉仕するものである。性的動力が性以外の目的に牽引されるのは、卽ち性慾が昇華されるのは、これ等の道に依つてゞなければならない。が、我々とても、この恐らく兩方から通じ得る道が慥に存在してはゐるが、なほ確實なことはよく分らぬと云ふことを告白して、本論を結ばざるを得ないのである。

第三論文

思春期に於ける性感の變化

思春期に入ると共に變化は起きて、幼兒的性生活は確定した常態の形に轉ずるのである。これまでは性本能は主として自己色情的であつたが、今やそれは性的對象を發見する。これまでは性本能は個個の本能や性的帶域に於いて發現し、相互に獨立して或る快樂を唯一の性目的として求めてゐた。今や一つの新しい性目的は生じ、それの達成のためは一切の部分本能が協同し、他方、諸々の性的帶域は性器帶域の主權下に服從するのである。(一) ところがこの新しい性目的は兩性に於いて著しくその機能を異にしてゐるからして、今や男女の性的發達は非常に離れたものとなるのである。男の性的發達は前進的であり、また我々にも容易に理解出來るが、女の方には一種の退行的現象が起る。常態的性生活は、性對象及び性目的に差し向けられたる二つの流れ――感傷的の流れと官能的の流れと――の正確な合流に依つてのみ實現せられる。これ等二つの流れの內、前者の方には幼兒的性感の開花期から殘留してゐるものを包含してゐるのである。この合流は云はゞ、トンネルを兩方から開鑿して行

くやうなものである。

註（一）本文中に擧げたやうな圖解的な說明をすると相違が大裂裟になる。幼兒性慾が對象選擇に於いて、如何なる程度まで成人の性的組織に近いものとなつてゐるかは、一〇七頁に於いて詳論しておいた。

新しい性目的は男子に於いては、性的所產を放射することにある。それは以前の性目的、卽ち快樂を得ることゝ必ずしも無緣なものではなく、寧ろ非常に多量の快樂が性的過程に於けるこの窮極的行爲と結付いてゐるのである。性本能は今や蕃殖機能の下に奉仕して、云はゞ愛他的となる。この變化が成功すべきためには、この過程は諸本能の本來の性質竝びに一切の特異性に順應しなければならない。

新しい結合や構成が複雜な機制でなされる一切の他の機會に於けると同じく、この場合でもまた、もしそこにこの新秩序が起らないと、病的な障碍が得てして起りがちである。性生活の一切の病的障碍は發達の支障であると考へて十分に至當である。

性器帶域の主權と豫備快感

右に記述し來つた發達の徑路からして、その歸結と窮極目的とは吾人の眼に明白に映じ來るのである。中間の過渡期はなほ幾重にも不明であつて、吾人がその期に存するとなす謎は一二にして止まらぬのである。

思春期に入つての最も著しい現象を人々はそれの本質的なものとして選んだのである。それはつまり外部性器の顯著なる發育であるが、幼兒時代の潛在期には外部性器の發育は殆ど阻止されてゐたのである。同時に內部性器の發達も非常に長足の進步を示し、新しい生存物を作る目的のために性的所產を授受することが出來る程になるのである。かくの如くにして最も複雜なる裝置は出來上り、その運用を待つばかりである。この裝置は刺戟に依つて運轉を開始する、これを觀察するに、刺戟は三樣に働きかける。我々の知悉してゐる性的帶域に外界の刺戟を受けて。內的有機界から刺戟を受けて、(但しその方法はなほよく調べて見なければならないが。) それから精神生活からの刺戟を受けて、(但し精神は單に外的印象の貯藏庫であり、內的亢奮の受附所たるに過ぎぬ。) 同じ結果は總て三つの場合に生ずる。つまり、『性的亢奮』と名付けらるべき狀態で、これは心的竝びに體的の徵象となつて現

れる。心的徵象は或る差迫つた性質の特殊な緊張感となつて現れる。さうして多樣な體的の徵象の內では、性器に於ける多くの變化が第一に立つ。これ等の徵象は一つの確定的な意義を持つてゐる、つまり準備である。性行爲の用意の整つたことを意味してる。（男性器の勃起、女性器の腺的活動。）

性的緊張

性的亢奮の緊張の特質に聯關して一つの問題があるが、それの解決の困難であることは、性的過程を理解する上にそれが重要であるのと一般である。この緊張の特質に就いては、心理學上いろ〳〵意見の相違があるが、私としてはこの緊張感には不快の特質が伴つてゐることを斷乎として主張せざるを得ない。私にとつては畢竟するに、そのやうな感情は心的立場を變更したいとの衝動を伴ひ、從つて追ひ迫まられるやうに行動するものである。この事は普通の快感には見られない性質である。併し性的亢奮の緊張を不快感だとしてしまふわけにも行かない。何となれば、そこには慥に快感が存在してゐることは事實だからである。性的亢奮に依つて生じた緊張には常に快感が伴つてゐる。性器に於ける準備的變化に於いてさへも、そこには明かに滿足感がある。この不快なる緊張とこの愉快なる感情との間には如何なる關係があるか。

凡そ快害の問題に關する一切は、今日の心理學の弱點の一つに觸れる。吾人は能ふべくんば當面の

場合の決定要素に就いて研究すべく試み、この問題の全體を摑まうとすることは避けたいと思ふ。(一)まづ、新しい事情の起り來るに對して、性的帶域が如何に應ずるかを一瞥して見よう。性的亢奮の起つた場合には、性的帶域に一つの重要な役割が掛つて來る。性對象から非常に緣遠い性的帶域たる眼が、對象求愛の間に、亢奮のかの特殊な性質に依つて魅惑される。(性對象に於けるこの亢奮の原因を吾人は美と名付けるのである。)性對象の好きな點はそれ故にまた『魅惑』と呼ばれる。この魅惑は一方に於いて既に快樂に結び付き、他方に於いてこの魅惑は性的亢奮を增加させる結果になるが、或は亢奮がまだない場合にはそれを喚起する結果になる。もしまた別の性的帶域、例へば握手の亢奮がその上に加はつた場合には、その效果は同樣である。

一方には快感となるが、この快感は既存の快感に依つて直ぐに强められ、他方には性的緊張のその後の增加となるが、この增加は直ちに變化して、もし一層の快樂となり得ない場合には、明かに不快の感となるのである。今一つの場合は恐らく一層明白である。例へば、性的に亢奮してゐない或る人物が、一つの性的帶域(婦人の乳房の皮膚の如き)を觸れることに依つて刺戟された場合などである。この接觸それ自身は既に快感を喚起するが、併しそれは同時にまた更に一層の快感を要求するところの性的亢奮を呼覺ますに何よりも適してゐるのである。與へられたる快感が更に一層大なる快感への

要求を呼覺ますのは如何にしてゞあるか、それが正に問題である。

註（一）　拙論『被虐性の經濟的問題』（一九二四年）の序論中にこの問題を解決せんと試みた一節がある。それを參照せられたし。（『國際精神分析學雜誌』第十卷。全集第五卷。）

豫備快感の機制

併しその場合に性的帶域に賦せられた役割は明瞭である。一つに妥當するものは、總てに妥當する。總ての帶域はそれ〴〵の亢奮に從つて一定量の快感を供給するやうに役立たせられてゐる。さうしてその快感が緊張を增し、緊張の方ではまた性行爲を窮極に導くために必要なる動力的エネルギーを生み出すべき筈になつてゐるのである。この行爲の窮極の部分の直前の部分は或る性的帶域、つまり性器帶域、殊に龜頭が適當なる對象（膣の粘膜）に依つて適當なる刺戟を受けることである。さうしてこのやうな刺戟が與へる快感に依つて今度は反射的の方法で動力的エネルギーが生じ、そのエネルギーが性的實質を外面に持出すやうにするのである。この最後の快樂はその激しさに於いて最高であつて、最早期の快樂とはその機制に於いて異つてゐる。それは全然射出に依つて生じ、全然滿足の快樂であり、それに依つてリビドーの緊張は一時的に消滅するのである。

これ等二種の快樂を名前に依つて區別し、一を性的帶域の亢奮に依る快樂とし、他を性的實質の射

出に依る快樂とすることは、必ずしも不當でないと私は考へる。窮極快感（エンドルスト）、即ち性的活動の滿足の快感と對立させて、吾人は始めの快感を豫備快感（フォアルスト）と名付けて正に至當である。豫備快感は、して見れば、幼兒的性本能が旣に供したものと同じであるが、たゞ幼兒の場合ではその行り方が幼稚なだけである。窮極快感は新しく、思春期に於いて始めて現れた條件と多分聯關してゐる。諸々の性的帶域の新機能を約言して見ればかうなる。——豫備快感は幼兒生活に於ける如く、性的帶域から得られるが、その豫備快樂に依る滿足の快感をより大ならしめ得る目的のために諸々の性的帶域は利用せられる。

私は近頃他の一實例を精神生活の全然別の一分野から說明することが出來た。この分野に於いては、或るより些小な快感に依つてより大きな快感の效果が目指されるのである。その些小な快感はその場合、誘惑的な效果を及ぼすのである。（一）

註（一）一九〇五年に公刊した拙著『機智とその無意識に對する關係』を見よ。機智の技巧に依つて得られた『豫備快感』は內的禁制を解くことに依つてより大なる快感を味はしめるやうに利用せられるのである。

豫備快感の危險

併し豫備快感と幼兒的性生活との關係は、豫備快感が病理的役割を果す時、愈々强固になる。豫備快感を味つてゐるところに、常態的性目的を達成するためには、一つの危險が明かに存してゐる。そ

の危險は、當面の性的過程に於いて豫備快感があまりに大に、緊張感があまりに小なる場合に於いて生ずるのである。その時、性過程を更に續けるための衝動力が弱くなり、全道程は短縮され、常態的性目的の代りに當面の豫備行動の方が起ることになる。かう云ふ困つた事情は、以前に旣に經驗があるから、それに依つて決定されるのである。卽ち、當該性的帶域又は當面の部分本能は旣に幼兒生活に於いて快感の獲得に大いに貢獻するところあつたからである。その上定着を起すやうな原因があると、後年の生活に於いて容易に一つの强迫が生ずる。この强迫があると、一つの豫備快感が新しい關係に入らうとする時に遮げられる。さう云ふのが、つまり、多くの變態性慾の機制なのである。卽ち性過程の準備的行爲に於いてぐづついてゐることなのである。

豫備快感のために性の機能が十分に働かなくなることは、幼兒生活時代に旣に性器帶域の主權が大體示されてゐる場合には、最も早く避けられる。それへの準備は事實上、幼兒時代の後半（八歲から思春期まで）に於いてなされるやうである。性的帶域はこれ等の年代に於いて旣に、成熟時代に於けると同じやうな働きをなすのである。その帶域は、他の性的帶域の滿足に依つて何等かの快感が感ぜられた時には（尤もこの結果は未だ何の目的もなく、つまり性過程を續けるには何の寄與もしないが）、亢奮感覺の座となる。このやうに旣に幼兒時代に於いて、滿足快感の外に、一定量の性的緊張が

生ずるのである。よしんば成人の緊張ほどは持續的でなく豐富ではないにもせよ……。そこで今や我々は次の事を理解することが出來る、我々は性感の源泉を論じた際に、問題の性的過程が性的滿足の結果を與へると共に性的亢奮の結果をも與へるとのことをあれほど正當に論ずることの出來たのは何故であるかを……。吾人は認識の途上に於いて、幼兒的性生活と成人的性生活との區別を始めにはあまりに大袈裟に考へ過ぎた、さうして今やそれを是正するのである。常態的性生活からの離脫のみならず、また性生活の常態的形態とても、性慾の幼兒的顯現に依つて決定されるのである。

性的亢奮の問題

性的帶域が滿足を得ると同時に快感を伴うて生じ來る性的緊張は何處から起るのか、またその緊張の本質は何であるか、これ等の問題は吾人にはなほ全く不明でゐる。(一)第一に想像されることは、この緊張が快感それ自身から如何樣にかして生ずるとの考へであるが、これはたゞにそれ自身に於いて非常に本當らしくないのみならず、また辯護の餘地もない。何となれば、最大の快感は性的所產物の射出に伴つてゐるが、その射出には何等の緊張が生じないで、寧ろ一切の緊張が消失するからである。快感と性的緊張とは、この通りに、たゞ間接的に關係を保つてゐるだけである。

註(一)　滿足感を與ふると共に性的緊張の一因をも供する豫備的性亢奮の役割が本文中で舉げてあるが、それに對してドイツ語では Lust (快感)と云ふ語を宛てるが、これには二重の意味があつて、性的亢奮の感じ(私には快感がある。私は何々したい。私は衝動を感ずる)を滿足の感じとしても、同時に示すのである。これは非常に意味深長なことである。

性的材料は如何なる役割を果すか

常態者に於いては性的材料を射出することのみが性的亢奮を鎭靜せしめるのであるが、この事實と

は別に、性的緊張を性的所産と關係させる重要事實がある。禁慾してゐる生活に於いては性的機關はとかく夜間の、性行爲の樂しい夢の幻覺の內に射出し勝ちである。このやうな射出のあるのは、思春期に入りかけの、抑壓の强い時代にである。で、この現象——遺精——に對しては、これを次のやうに說明して支障へがない。卽ち、性的緊張は、性行爲の代りとして幻想に依る捷徑を知つてゐるのであるから、性的產物の貯藏所に堆積した精液の機能であると。性的機制の萎微することに就いての、人々の經驗に就いて見ても、同じ事は云へる。性液の貯藏なき時は性行爲をなし能はざるばかりでなく、性的帶域の亢奮もやはりなくなり、本來ならば亢奮するやうな刺戟を與へても何等の快感を催さないのである。そこで我々は序ながら知るのである。一定量の性的緊張は性的帶域の亢奮のためにさへも必要であることを——。

そこで吾人は、性的材料が性的緊張を生み且つ支持するとの假定（もし私の見るところにして誤たないならば、この假定は一般に受容されてゐる）を下さゞるを得ない。これ等の所產物がその貯藏所の壁面を壓迫し、脊骨の中樞に亢奮を與へる、この狀態がやがて高等な中樞に依つて認識せられ、その中樞が次に意識中に例の緊張感を生ずるのである。もし性的帶域の亢奮が性的緊張を增すならば、それはたゞ、性的帶域が豫め形成されてゐる解剖的關係に依つてこれ等の中樞と結合してゐること、

性的帶域が亢奮の調子を高めること、また性的緊張の十分にある場合には性行爲を動かすが、不十分な時には性的材料製産へと刺戟するだけであること、などの事實に由るに過ぎない。

この說は、例へばクラフト・エービングの性現象論中に採用せられてゐるが、この說の弱點は、この說が成熟者の性活動のために立てられて、三種の關係(それの說明も同時になすべき筈であつたのに)に就いてあまり考慮を拂つてゐないと云ふ點に存する。三種の關係と云ふのは、小兒、女、去勢された男に於いて見られるそれを云ふのである。これ等三つの場合の何れに於いても、性的製産物の堆積を男に於けると同じ意味に於いて云ふことは出來ない。して見れば、當然この說明を一般に宛てはめることは困難になつて來る。併しこれ等の困難をさへも輕視することが是認されさうな場合が發見されることは直ちに認められる。何れにもせよ、性的製産物の集積のせいにはしにくいやうな重荷を、それに負はせることは警戒せねばならぬ。

內部性器を重要視し過ぎること

性的亢奮は性的材料の製産とは殆ど無關係であると云ふことは、去勢された男を觀察して見ると分るやうに思はれる。去勢された男に於いては、リビドーは時として手術のために障害を被らないことがある。實はその反對に、障害を被るやうにと云ふのが動機で手術をするのであつて、それが普通で

はあるのだが——。それのみならず、人々は既に久しく知つてゐることであるが、男の性細胞の製產を許さないやうな病氣に罹つても、今や斯くて子供を造ることの出來なくなつた個人のリビドーと性力(ポテンツ)とは猶障害されずに殘つてゐるのである。して見れば、リイゲル C. Rieger も指摘してゐる通り、相當の年齢になつて男性の生殖腺を失つたからとて、その個人の精神生活に大した影響を及ぼさないと云ふことは驚くに足らぬことである。慥に、思春期以前の柔軟な時代に去勢を施すとその目的をより完全に達し得るが、併しこの場合に於いては、性腺を失ふことの外に、これと聯關して他の要素の發達が阻害せられると云ふことも考へておかねばならぬ。

化學的の說

有脊髓動物に於いて生殖腺(睾丸又は卵巢)を取除き、その代りにそれ〴〵反對の新しい機關を植付ける動物試驗(前揭リップシュッツ著書一三頁參照)を行つて見て、性的亢奮の由來が或る部分明かになつた。その時、併し、細胞的な性的製產物が偶然的に堆積するのは如何なる意義を有するか、その事は不問に附せられてゐる。そのやうな實驗に依つて雄を雌に、またその反對に雌を雄に變へることは可能となつた(スタイナッハ E. Steinach)。この實驗に於いて、肉體上の性的特質に應じて、またその特質を有つと同時に、その動物の雄性的又は雌性的の態度も變つて來るのである。併し、このやうに性を

決定する影響は生殖腺のあるがために生ずるのではなく、この腺は特殊な性細胞（精蟲と卵子）を生ずるのみで、寧ろ生殖腺の間質組織のために生ずるのである。この間質組織はそれ故に、多くの學者に依つて『思春腺』と名付けられてゐる。更に研究を進めて見ると、思春腺は常態者に於いては雌雄混性的である事が分るらしく、高等動物の兩性具有說もそこに論據を置いてゐるのである。さうして思春腺は性亢奮並びに性特質を産み出す唯一の機關ではないらしいと云ふ事が、今日ではどうやら明かになつてゐるのである。この新しい生物學上の發見は、我々が既に以前から、性慾感に對する甲狀腺の役割に就いて知つてゐたところに、更に附加するところあるものである。そこで我々はかく信ずることが出來る、生殖腺の間質部には特別な化學的材料が生じて、その材料が血液から取上げられて中樞神經組織の一定の部分に性的緊張を賦與するのである。實はそのやうに一つの毒物的刺戟が特殊な機關的の刺戟に改變せられることに就いては、身體の外部から注入せられた他の毒物的の材料からして、吾人は既によく知悉してゐるのである。中樞的機關が豫め亢奮してゐる場合に性的帶域の刺戟に依つて如何にして性的亢奮は生ずるか、また純粹に毒物的の刺戟と生理的の刺戟との複合は性的過程に於いて結果するものであるが、そのやうな複合を、よしんば假設的にもせよ取扱ふことは、只今は我々のなすべき場合でない。このやうな性現象觀に於いて、性的材料の變化から特殊な材料が生ずる

事を假定することだけで、十分に我々は滿足するのである。何となれば、右の主張は一見氣まぐれに見えようけれど、從來はあまり注意されなかつたが、實際は非常に注意に價すべき一つの見解に依つて支持されてゐるからである。神經症なるものは必ず性生活の障碍にのみ辿ることが出來るものであつて、この病氣は、快樂を生ずる有毒なる物質(アルカロイデ)を常用することから結果する酩酊と禁慾との現象に、臨床上非常に類似してゐるのである。

リビドー説

性的亢奮の化學的根據に關するこれ等の假定說と完全に合致するのは、性生活の心理的顯現を十分に說明するために我々の形成した補助的概念である。吾人はリビドーの概念を量的に變化し得る力と定めたが、この力は性的亢奮の分野に於ける現象と變轉とを評量し得るものである。このリビドーは精神生活の一概に適用すべきもので、吾人はそれの起源が特殊である關係から、これをエネルギーとは區別する。さうしてリビドーに對してまた質的な特性を賦與する。リビドー的エネルギーを他の精神的エネルギーから區別するに當つて、かう云ふ假定を下す。卽ち、有機體の性的過程は特別な化學的引力（親和力）のある點に於いて榮養的過程と區別されると。變態者や精神神經症者を分析して見ると、この性的亢奮は所謂性的部分からのみならず、一切の肉體機關から供給せられてゐることが分るのである。このやうに吾人は吾々自身でリビドー量 Libidoquantum なる概念を成定する。このリビドー量の代表を吾人は自我リビドー Ichlibido と名付ける。このリビドーの所產、增減、分裂、並びに轉位は、吾人が觀察し來つたさまぐ\な性心理上の現象に對して十分な說明を下し得るであらう。

併し精神分析的研究に對してこの自我リビドーが都合よくあてはまるのは、精神的に適用されて性

的對象への纏綿となつてゐる場合、つまり、對象リビドーとなつてゐる場合のみである。その場合に於いては、吾人は自我リビトーが集中して對象に定着し、又はそれ等の對象を離れて別の對象に移り、このやうな位置からして自我リビドーは個人の性的活動を指導するのである。で、その性的活動が滿足へと、つまり部分的、一時的のリビドー消費へと導くのである。所謂轉嫁神經症(ヒステリーと强迫神經症)を精神分析して見ると、這般の消息が明瞭になつて來るのである。

對象リビドーの成行きに關しては、吾人はなほ次の事實を認めることが出來る。對象リビドーは對象から引離されて特殊な緊張狀態で保存され、遂に自我中に取込まれて、再び自我リビドーとなると。自我リビドーはこれを對象リビドーと對比して、吾人はまたナルチスス(自己愛)的リビドーと呼ぶ。精神分析から見るとそこに一つの境界があつて、これを超えるとナルチスス的リビドーの活動の中に分け入り、兩者の比較を知ることは我々に許されない。(一) ナルチスス的リビドー即ち自我リビドーは吾人には大きな貯藏庫のやうに思はれる。そこからして對象纏綿は送り出され、またその中へ再び引入れられる。而も自我のナルチスス的リビドー纏綿は赤ん坊時代に實現された原始狀態であるやうに思はれるが、この原始狀態は後年に於けるリビドーの纏綿のために被はれてゐるが、根柢に於いてはそれの背後に匿れて殘つてゐるのである。

註（一）この限界は以前ほどは妥當でなくなつた。何となれば、『轉嫁神經症』以外の患者も精神分析で非常によく癒るやうになつたからである。

神經的竝びに精神的の障害をリビドーで說明する以上は、凡そ觀察された現象、闡明された過程の一切をリビドー經濟の方面から云ひ表す任務があるわけだ。リビドー經濟の方面から云ひ表はして見ると、自我リビドーの成行きには一層重大な意義が伴つて來ることは見易い道理である。殊に一層深い精神症的な障碍を說明する事が問題となつてゐる場合には——。そこで困難なのは、我々の取調方法たる精神分析が、現在のところではたゞ對象リビドーの變形に關してのみ確實な知識を供し得るに過ぎなくて、（二）自我リビドーを自我內に勢力を張つてゐる他のエネルギーから區別することが、なほ立入つた硏究をしなければ出來ないと云ふ事實に存するのだ。（三）それ故にリビドー說を突き進めて行くと云ふことは、姑くたゞ思辨的にだけなし得られる事である。ところが、ユング C. G. Jung の範に倣つてリビドーの概念をまでも回避するならば、人々はこのリビドーを精神的本能力一般と共に放擲することになるからして、從來精神分析的觀察に依つて得た一切の知識を放棄する事になるのである。

註（一）上揭の註を見よ。

(二) ナルチスムス發端論（『精神分析年報』一九一三年）參照。ナルチスムス Narzissmus なる語はそこには誤つてネッケ Naecke に出づるやうに云つてあるが、實はハヴロック・エリスの造語である。

男女の別

誰しも知つてゐる通り、思春期に入ると共に男女特質の別は明白となる。この對立は他の如何なる對立よりも人間の生活形態に對して決定的な影響を及ぼすのである。男女の性質は固より既に幼兒時代から明白に分つてゐる。性慾禁制（羞恥、嫌惡、同情その他）は女兒に於いては、男兒に於けるよりももつと早く發達し、且つその抵抗も少い。性慾抑壓の傾向は概して一層强いやうに思はれる。性慾の部分本能が明白に見える場合には、それ等本能は好んで受動的な形式をとる。性的帶域の自己色情的活動は、併し、兩性の何れに於いても同樣であつて、これが同樣であるために、思春期以後にはあれほど容易に分る男女の別が、幼兒時代には容易でないのである。性慾上の自己色情的竝びに自慰的顯現に關しては、少女の性感は全然男性的の特質を帶びてゐると斷ずることが出來る。實際、人々が『男性的と女性的』の語の内容をもつと確定的にすることが出來るならば、また次の如き主張をなすことが出來る。リビドーはそれが男に現れようが女に現れようが、何時もきまつて男性的な性質を帶びてゐるものであつて、またその對象に就いて見るならば、これは男でも女でもよいのである。（一）

註（一）こゝで明かにしておく必要のあることは『男性的』と『女性的』との概念の内容が普通の意味では非常に曖

味でないやうに思はれるが、科學上の用語としては最も渾沌たるものゝ内に屬し、少くとも三つ方面に分つことが出來ると云ふことである。人々は男性的と女性的とを或は能動と受動との意味に用ゐ、或は生物學的の意味に用ゐ、それからまた社會學的の意味にも用ふる。これ等三つの意味の第一のは本質的な意味であつて、精神分析に於いて用ゐ得べき唯一なるものである。これは右の本文中に述べた、リビドーを男性的と呼んだそれに合致する。何となれば、リビドーはそれが受動的な目的に向けられた場合にでも、常に能動的であるからである。第二の、男性的、女性的の生物學的の意義は最も判然たる定義に堪へるものである。男性的と女性的とはこの場合には精液があるか卵子があるかに依つて、またそれ等から發する機能に依つて、決定される。能動性とその副的顯現例へば一層強く發達した筋肉、攻擊力、より激しいリビドー等は概して生物學上の男性的特質をなすものとされてゐるが、併し必ずしもそれと關聯してゐるものではない。現に、それ等が女性に屬してゐる動物の種類もある。第三の社會學的意味の內容は、實際に生存する男女個人を觀察することに依つて與へられてゐるのである。そのやうな觀察の結果は、生物學的、心理學的何れの意味に於いても純粹の男性又は女性は人間に存せぬことが明かになつた。總ての個人は寧ろ常に、自分自身の生物學的性特質と異性の生物學的特徵との混合であり、能動と受動との合一であることを示してゐる。これ等の心理學的な特徵が生物學的な特徵に依憑してゐようが獨立してゐようが、これを示してゐるのである。

私はこの兩性具有の見地を知つて以來、かゝる場合にはこの見地を適用すべきものと考へてゐる。

さうして兩性具有を問題にすることなしには、男や女に實際に見られる性的顯現を理解することは出來ないと信ずるものである。

男女に於ける主要帶域

それはそれとして、私はなほ次の事を附加へることが出來る。女兒に於ける主なる性的帶域は陰核であつて、これは男の陰莖と同構造のものである。私が發見し得た總てに就いて見ると、女兒の自慰はみな陰核に於いてゞあつて、後年の性的機能に於いてあれほど重要であるところの、他の外的諸性器に於いてゞはないのである。殆ど例外なしに女兒は陰核自慰以外には誘惑され得ないものであることを私は信じてゐる。女兒が性的亢奮を自發的に起すのは屢々、陰核にむづがゆさを覺えると云ふ形である。さうしてそれが屢々勃起するので少女は、異性の性的顯現を知らないでも、正しくそれを理解することが出來るやうになるのである。彼女等は單に自分自身等の性的過程を少年たちに轉嫁するに過ぎないのである。

少女がどうして一人前の女になるかを知らうと思ふならば、この陰核亢奮のその後の成行きを辿つて見なければならない。思春期に入つて少年にはリビドーが非常に進展するが、少女に於いてはこの反對に抑壓の新たな波が認められるのである。殊に陰核性感の抑壓が甚だしいのである。その時抑壓

を被るのは一部の男性的性生活である。女のこの思春期の抑壓に際して性の禁制は强くなる、その事がやがて男のリビドーの刺戟となり、それの力を增させることになる。リビドーが高まると共に性的買被りも高まつて來る。この買被りは自分の性慾を禁斷し否認する女に於いて殊に十分に現れて來る。もし遂に性行爲をなして陰核自體が亢奮することゝなると、その時陰核は亢奮を附近の女性的部分に導くの役割を果し、つまり固い木に火をつけるために松の木の一片が利用されるのと同じ働きをするわけである。この轉嫁が十分になされるまでには大抵は多少の時間が掛る。その間、若い妻は不感の狀態にある。この不感狀態は、もし陰核帶域がその亢奮を放棄しないでゐると、いつまでも續いてゐることがある。この狀態は幼兒時代に正に盛んな勢で豫備せられてゐたものであるから——。女の不感症は一見さう見えるだけであり、また或る部分がさうなだけであることは人々の知るところである。彼女等は膣の入口に於いて不感なだけで、陰核又は他の帶域に依つては必ずしも亢奮を得ないではないのだ。不感症にはこれ等の肉體的原因の外に精神的の原因があつて、これは抑壓がその條件となつてゐるものだ。

この色情的亢奮が陰核から膣に首尾よく移ると、その女の將來の性的活動の主要帶域が變つて來る。然るに男の方は子供の時分から持續けてゐる。女が神經症に、殊にヒステリーになりたがるその

主要條件は、このやうに主要帶域が變ることゝ、思春期に於ける抑壓とに存するのである。このやうに、これ等の條件は、女らしさの本質と最も內奥に於いて關係があるのである。

對象發見

思春期に於ける樣々な過程に依つて性器帶域の主權が確立せられ、また男に於いては勃起した性器が昂然として新たな性目的を求めてゐる間に、幼兒時代からそれへの準備を積んで來たところの對象發見が精神方面に於いて漸く形を整へて來る。極めて早期の性的滿足がまだ榮養攝取と結付いてゐた時には、性本能は自分自身の肉體以外に母の乳房をその性對象としてゐた。ところが後になつて幼兒は自分に滿足を與へる機關を有する者が何人であるかに就いて總括的な觀念を持つやうになる、多分丁度その頃になつて幼兒性本能はその對象を失ふのである。性本能はそれからは概して自己色情的となるが、潜在期が濟むと共に漸く再び最初のやうに對象を持つやうになるのである。子供が母の乳房に吸付いた事が一切の情事の原型となつてゐるのは、相當の原因のあることだ。對象發見は、實は再發見であるのだ。(一)

註（一）精神分析の敎ふるところに依ると、對象發見の途は二つある。第一の途は本文中に論じたもので、早期嬰兒時代の原型に導かれてゐるものであり、第二はナルチスス型であつて、これは自分自身を求めてこれを他人の內に再發見するのである。第二の途は特に病氣の原因となり得べき重大な意義を持つてゐるが、只今論じてゐる事には直接關係はない。

哺乳期の性的對象

併しこの幼兒時代の性的事情は總ての性的事情の內、最も早期のものであり最も重要なものであるから、性活動が榮養攝取から分離した後にも重要な部分が殘留するのである。かくてこの部分が對象選擇を準備し、失はれたる幸福の再獲得に助勢するのである。この潛在期の間、小兒は自分の無援を助け、その要求を滿して異れる他の人間を愛するやうになるのであるが、これがまた幼兒の乳母に對する關係の例に傚ひ、これの存續である。幼兒が自分の世話をして異れる人に對して和やかな感情を持ち、またこれを尊重することを、性的愛情と同一化することはどうかと思はれると云ふかも知れないが、併し十分に心理學から調べて見ると、如何なる疑ひをも克服して兩者の同一なることを確立し得ると私は考へるのである。幼兒が自分の世話をしてくれる人と交涉することは、幼兒にとつては性的亢奮竝びに性帶域滿足の不斷の源泉である。殊にその世話をする人――大抵はやはり母親――が、自分の方でもやはり性生活に根源をおく感情を子供に注ぎ、これを愛撫し、接吻し、搖り動かし全然性對象の代りにするやうな風であると、さうなるのである。(一)　母親がその和やかなる愛撫を以てその子の性本能を眼覺ませ、その本能の後半の激しさを準備するものであると聞いたならば、世の母親たちは驚くことであらう。彼女等は、自分たちの行動は性的には『純粹』なる愛であると考へてゐる。

何となれば、彼女等は子供の世話をする時に已むを得ざる以上には子供等の性器を亢奮させるやうなことは注意深く避けてゐるからである。けれども性本能が目覺めるのは、單に性器帶域の亢奮のみに依るのでないことは、吾々の知つてゐる通りである。吾々が和やかなる感情と呼ぶところのものは、いつかは慥にその影響を性器帶域の上にも及ぼすやうになるであらう。この性本能が心的生活の全般に對して、總ての倫理的、竝びに心理的の活動に對して如何に高き意義を有するかを、世の母親がもつとよく理解するならば、この事を知つたゝめに自分自身を批難するやうなことはないであらう。子供に愛を敎へるのは、たゞ母親がその役目を果すだけである。何となれば子供は精力的な性的慾求を持つ確乎たる人間となり、この衝動が人間を驅つて爲さしめる一切を人生に於いて仕遂げねばならないからだ。併し、兩親の愛撫があまりに度を過すことは、勿論、有害である。何となれば、それでは子供があまり早くませてしまふし、また子供が荒み、後年に於いて愛を一時的に放棄し、又は少量の愛で滿足することが出來ないやうになるからである。子供が兩親に甘へて飽くことを知らないやうであると、それは後年神經症となるべき最も明白な前兆の一つである。また他方に於いて、無暗に子供を甘やかす神經症的の親は、その甘やかしに依つて、子供の性質を最も早く神經病的に傾かせるのである。少くともこの實例に依つて見ると、神經症的の親は自分の病氣を子供に移すに遺傳以上の近道を持つ

てゐることが分るのである。

幼兒の恐怖

子供等自身は極早期から、自分等の世話をして吳れる人に對する心持は性的愛の性質を帶びたものであるかの如くに振舞つてゐる。子供等の心配は元來、己れの愛してゐる人が何處かへ行つてしまひはせぬかと云ふ事に外ならないのだ。それ故に彼は誰でも他所の人に對しては心配の眼を以て向ふのである。彼等が暗黑を可怕がるのは愛するものを視ることが出來ないからである。で、もしその人の手を握ることが出來れば、彼等は鎭まるのである。子供が可怕がつて結果がよくないから可怕い話を聽かせるなと乳母に云つたりするのは、その結果をあまり大袈裟に考へ過ぎてゐるのだ。始めから可怕がりの傾向のある子供は別に他人に大した印象を遺さないやうな話を夢中になつて聽くものだ。で、性衝動があまりに極度であつたり、ませてゐたり、或は甘やかされたゝめに始末が惡くなつてゐる子供だけが可怕がる傾きがあるのだ。かう云ふ場合の子供の行動は成人のと同じやうである。つまり、子供も自分のリビドーの滿足を得られぬ場合には、これを恐怖に變へてしまふのである。またリビドーの滿足を得られないために神經症になる成人は、その恐怖に於いては、丁度子供と同じ行動をしてゐるわけである。さう云ふ人は一人では不安なのである。つまり自分を慥に愛してをり、非常に子供ら

しい方法で自分の恐怖を鎭めてくれると信じ得る人がゐないと不安なのである。(一)

註（一）幼兒恐怖の起源を私が說明出來るやうになつたのは、三歲になる子供のお蔭である。その子が嘗て暗の中からから云つてゐるのを聽いたのである『叔母ちやん、何か云つてよ、眞暗で恐怖いんだもの。』と。それに對して叔母さんはから答へた。『話したつて恐いのは仕方がないでせう。どうせ何も見えないんだから――。』『それでもいゝの』と子供は答へた。『誰か話してゐてくれさへすれば明るくなるの。』――吾々の見るところでは、その子供は暗を恐れてゐるのではなく、自分の愛してゐる人が見えなくなることを恐れるのだ。さうしてその人が傍にゐるとなれば、氣の鎭まることは受合へるのだ。――神經症的恐怖がリビドーから生じたものであり、それの變化した產物であり、つまりこれに如何樣にか關係のある事は(例へば醋と酒との如くに)、精神分析の結果分つたことの內、最も重要な一つである。

近親姦禁斷

親の甘やかしに拘らず子供は幸にして性本能を早めに(つまり思春期の肉體的條件が具はる前に)、あまりに強く誘發せられ、精神的亢奮が不知不識の內に性器組織へと傳達されるやうなことがないならば、親の甘やかしもその任務を果して、その子供が成年に達して、性對象を選ぶ時に導きをなすことが出來るのである。傍に子供にとつては、自分が嬰兒時代から、云はゞ抑壓したりリビドーを以て愛して來たその人を性對象として選ぶことは、最も手近なことである。(二)　併し、性の成熟が相當遲延す

るために、その間に、他の性的禁制もさる事ながら、近親姦の禁斷が確立せられ、肉親として幼年時代に愛した人を對象選擇から除外するかの道德的格律が出來上るのである。この禁斷を遵守することは、何よりも文化社會の要望であつて、より高き社會的單位を產み出すために必要なる事柄を家族のために浸蝕されることを防ぐのは、實にこの要望である。(二)

註(一)　一〇九頁に於いて、幼兒の對象選擇に關して云つた『感傷的の流れ』zärtliche Strömung を參照せられよ。

(二)　近親姦の禁斷は恐らく人類が歷史的に獲得したものであり、また他の道德上の忌み(タブー)の如く、既に多數の個人に於いて、有機的な遺傳に依つて定着せられてゐるものに相違ない。(拙著『トーテムとタブー』(一九一五年)を參照せられよ。)ところが精神分析的に研究して見ると、如何に個人がその發達中にこの近親姦の誘惑と戰ひまた如何に屢々これを空想し、また更にこれを實行にさへ移すかと云ふことが分るのである。

併しながら對象選擇はまづ觀念中に於いて行はれる。さうして丁度成熟し行きつゝある青年の性生活は空想中以外には耽るべき場所がないのである。つまり結局實現せられることなき觀念に淫するより外に途はないのである。(一)　總ての人々のこれ等の空想に於いて幼兒的傾向が、(今は肉體的な助勢を得て)再現し、就中きまつて、一番多く現れるのは親に對する幼兒の性感である。この性感は大抵

の場合、男兒は母に、女兒は父に、對する性別的な牽引力に依つて旣に特色づけられてゐるのである。(二)　これ等の明かに近親姦的空想を克服し拒否すると同時に、思春期の最も重大なる、且つ最も苦痛なる心理的事實が生起するのである。それは親の權威から離れることである。この事あればこそ文化の進步に非常に重要なる新舊兩時代の間の相反は形成されるのである。總ての個人が通過すべき發達經路中の各驛に於いて引留められる者が少くない。そこで親の權威をどうしても卒業し切れず、自分の親に對する感傷的な心持を撤回することの出來ない人間が出來るのである。さう云ふのは大抵は娘であつて、彼等は思春期が過ぎても幼兒時代の愛情を保留してゐる。さうして親はそれを孝行娘として喜んでゐる。ところがさう云ふ娘は結婚しても自分の夫に對して務めを果すことが出來ないのだから喜んでばかりも居られない。彼女等は妻として冷やかであり、性的にはいつまでたつても不感である。して見ると、一見性的ならぬ親への愛も性的の愛と同じ源泉から養はれてゐる事が分るのである。つまり親への愛は單にリビドーの幼兒的定着に外ならぬことが分るのである。

註(一)　思春期の空想は幼兒時代に放棄した性研究に結付いてをり、一部分はまた多分潛在期に溯る。これ等の空想は全然、又は大部分、無意識に保存されてゐるのであつて、それ故に屢々明白に何日頃からと指すことが出來ない。これ等の空想は樣々な症狀の生起するに就いて重大な意義を持つてゐる。空想が症狀

の前階となり、つまり抑壓されたリビドーの要素が滿足を得るやうな形式を供するからである。またこれ等の空想は愛として意識せられる夜の空想の型である。愛は覺醒生活から傳つて來てゐる晝間の刺戟（『晝間の殘物』）に依憑する、またそれの影響の下にある、さう云つた空想の再現に外ならない。――思春期の性的空想中にあつて特に際立つてゐる二三のものがあるが、それ等は最も普遍的に現れること丶個々人の體驗から殆ど獨立してゐる點とに於いてその特徴が認められる。例へば兩親の性交を偸視する空想、愛する人から早期に誘惑される空想、去勢脅威の空想、母胎內の存在、又は胎內での經驗をさへ內容とする胎內空想、更にまた所謂『家族の物語』がある。家族の物語といふのは親に對する子供の差別の反應が現れて自分を里子とする空想である。かう云ふ空想が神話に於いて如何に現れてゐるかは、オットー・ランクが『英雄誕生の神話』（一九〇九年）の中に論じてゐる。

エディポス・コムプレクスが神經症の中核的コムプレクスを成し、神經症の內容に於いて本質的な部分をなすと云はれてゐるのは正しい。更にその本質的な部分でもその頂點をなすのは幼兒性慾であつて、これが成人の性慾に對して決定的な影響を及ぼすのである。凡そ人として新たに生れ來るものは、誰しもこのエディポス・コムプレクスを克服すべき任務を負ふてゐるのである。これを克服し得ざるものは神經症患者となる。精神分析法の進歩に伴ふてこのエディポス・コムプレクスの意義は愈々明白になつて來た。これを認めると認めざるとは、その人が精神分析派であるかないかを示す合言葉となつて來た。

ランクはまた別の書物（『出產の外傷』一九二四年）に於いて、母への執着を胎兒時代にまで溯り、エディポス・コムプレクスの生物學的根據を示した。近親姦の禁斷に就いては彼は、私が上述したところとは

違つて、これを出産の恐怖の外傷的印象に因ると斷じた。

(二) エディポスとはギリシアの神話『テーベ王エディポス』から來た名である。大槻憲二譯『夢の註釋』(一〇四頁)を參照せられよ。

性心理發達上の障碍を愈々深く調べて見れば見るほど、近親姦的對象選擇の意義は益々明白となつて、到底否めなくなるのである。神經症患者に於いては性慾拒否の結果として、對象發見に對する性心理の働きが無意識中に殘つてゐる。感傷愛の要求をあまり激しく持ち、性生活の實際的欲求に對して同程度の畏怖を持つ少女は、一方に於いて沒性慾的戀愛の理想を人生に於いて實現しようとすると共に、他方に於いて自己批難なしに發現出來るやうな感傷愛の下に自分のリビドーを匿さうとの(つまり思春期に入つて新たになつて來た、親や同胞に對する傾倒を生涯中保持しようとの)強い誘惑を覺えるのである。彼等の徵候竝びに病狀を賴りとして精神分析法に依つて彼等の無意識的思想を跡付け、これを意識的思想に飜譯するならば、彼等がその肉親に惚れて(この言葉の最も普通の意味に於いて)ゐる事を證明し得るのである。また始めは健康であつた者が一度失戀をすると病氣になつたりするところを見ると、この病氣の由つて來る所以は、彼のリビドーが幼兒時代に愛した人に戾るからだと說明して非常に明瞭である。

幼兒的對象選擇の後年に及ぼす影響

幸にしてリビドーが近親姦的定着をしなかつた人々と雖も、その影響を全然免れるわけには行かない。若い男の最初の眞劍な戀愛が成熟した婦人に向けられ、また娘のそれが權威を具へた年長の男に向けられ、――つまり彼等に母や父の俤を偲ばせるやうな人々に向けられると云ふことは、明かにこの發達時期の反響である。(一) 概して云へば、對象選擇は疑ひもなく、これ等の原型に大體に於いて從つてなされるのである。男は何よりもまづ、幼兒時代の始めから自分の心の鏡に映つてゐる母の面影を求めるのである。であるから、母がもしまだ生きてゐるとすれば、この自分の生寫しに反對し、これを敵視するのは甚だ自然である。親に對する幼兒的關係が後年に於ける對象選擇にこれほど重大な意義あるものとすれば、幼兒時代のこれ等の關係に何等かの障害があれば、それが成熟後の性生活に對して最も重大なる結果を及ぼすと云ふことは、これを理解するに困難でない。戀する人の嫉妬とても、そこに幼兒的の源泉が、少くとも幼兒的要素の助勢が、缺けてゐないわけはない。兩親間の爭ひ、竝びにいざこざは、子供の性的發展を障碍し、また彼等の神經症の恐るべき原因となる。

註(一) 拙論『男の對象選擇の或る特殊の型』を參照ありたし。

思春期に入ると共に更新し、やがては對象選擇の途を指定する伏線は數々あるが、親に對する幼兒

的傾到は恐らくその最重要のものであるが、併し唯一のものではない。同じ源泉から來る伏線はなほ他にもあつて、それがために人間はなほも自分の幼時に依憑していろ〳〵な系統の性現象を發展させ、それがために對象選擇の條件が非常に區々になつて來るのである。(一)

註（一） 人間の戀愛生活の特徴は實に無數であり、また戀愛それ自身が强迫的でさへあるが、それ等はそも〳〵たゞ我々の幼兒時代と關係させ、また幼兒時代から效果を及ぼしてゐる殘物としてのみ、慥に理解され得るのである。

同性愛の防止

對象選擇には色々な任務があるが、その一つは、間違ひなく異性者を選ぶと云ふことである。これは我々も知つてゐる通り、さう容易に解決出來る事でない。思春期以後の最初の感情は、恒久的な弊害こそなけれ、とかく常態を逸し勝ちなものである。デッソアール Dessoir は 少年少女が同性者の間に熱烈な友情を構成するのは如何なる法則に基くかに注意を向けてゐるが、至當なことである。性對象が恒久的に同性となつてしまふのを防ぐ最大の力は、慥に異性の特質が相互に働きかける牽引力である。この最大の力の何たるかの説明のためには、只今の議論に關する限りでは、吾人は何も云ふことが出來ない。(一) 併しこゝに論じた要素だけでは、同性愛を除外するには不十分である。これの

外に慥になほ幾多の要素が支持してゐなくてはならない。就中、そこには社會が權威を以て禁斷すると云ふ要素がある。經驗の示すところに依ると、同性愛を罪惡視しないところでは、多くの人々の間に盛んに同性愛が起つてゐる。それのみならず、男に於いては幼時に於ける母のみならず、子供としての自分を世話してくれた他の女の溫情の記憶が、力強い助勢となつてその選擇を女に導いて行くが、他方早期に於いて父に依つて經驗した性的反撥、竝びに兩者間の敵對は、少年をして同性を回避せしめる。少女の場合に於いては兩方の要素が妥當する。何となれば彼女の性活動は母が特別に注意してゐるからである。この結果、同性に對して敵對關係を保ち、それが決定的な影響を及ぼして常態的な意味に於ける對象選擇をなすに至らしめるのである。男兒を男に(古代に於ける奴隷のやうに)世話させると、えてして同性愛が起り易いやうである。現代の貴族が屢々同性愛者となるのは、多分下僕を傭ふことゝ、この階級の母親たちが子供に注意を拂ふことが少いためとであらう。二三のヒステリー患者に就いて調べて見たところ、彼等の兩親の一人が(死、離婚、又は別居のため)缺けてゐた。そのために殘つてゐる方の親が子供の愛を壟斷し、そのために後年性對象としてその性の人を擇ぶやうになつた。このやうに恒久的の同性愛もあり得るのだ。

註(一)　こゝで是非云つておかねばならないことは、フェレンチの慥に空想的とは云へ、併し非常に天才的な論

文『性器説に就いて』(Versuch einer Genitaltheorie, 1924) の事である。この論文中に於いては、高等動物の性生活がその生物學的發達史からして來る所以が説いてある。

論旨要約

以上論じ來つたところを、これから要約して見よう。吾人は性本能の對象及び目的に關する異常から論じ出して、これ等の異常は持つて生れた先天性から發してゐるか、或は生活の影響の結果生じたものであるかとの問題に逢着した。この問題に對する答は精神神經症患者の、健康者とさう變りのない多數人の性生活上の諸關係を洞察することに依つて與へられた。さうしてその洞察は精神分析的研究に依つて得られたものである。そこで吾人は知つたのである、一切の變態への傾向はこれ等の人物に於いて、症狀構成者としての無意識力となつて慥に存することを、また神經症は變態の消極とも云ふべきものであることを——。かくの如く變態への傾向が普く行亙つてゐるところを見ると、變態への傾向は人類の性本能としては原始的に、且つ普遍的に所有してゐるところの性向であり、この性向からしてその人の成熟に伴れて肉體の變化し精神の禁斷する結果として常態的な性行動が發展し來るのだとの考へを抱かざるを得なかつた。吾人はこの性向が元來幼兒の生活に於いて存在することを證明し得ばやと思つた。性本能の方向を制する力としては、羞恥、嫌惡、同情、竝びに社會の道德と權威を擧げておいた。吾人はかくて、常態的な性生活から逸脫してゐる一切の變態者に於いて、發達が

多少禁壓されてゐる部分や嬰兒症の存することを認めざるを得なくなつた。元來の性向が變化することの意義は特に重要視しなければならなかつた。併しそれ等本來の性向と生活の影響との間には、吾人は反撥でなく協力關係を假定せざるを得なかつた。他方に於いて、本來の性向は複合(コムプレクス)したものであつたに相違ないからして、性本能自體は吾人には多くの要素から成つてゐる或るものであると思はれる。さうしてこの或るものが變態に於いては、云はゞその要素に分割せられるのである。變態はかくて、一方に於いては禁制であり、他方に於いては常態的發達からの逸脫である事が分るのである。これ等二つの考へを一つに結合すると、成人の性本能は幼兒生活のさまぐ\な感情を一つに集約し、單一目的へと努力することに依つて成立するとの假定となるのである。

吾人はなほまた、精神神經症者に於いて何故に變態的傾向が主要となるかに就いての說明をも與へておいたのである。卽ち吾人はこれ等の傾向が『抑壓』のために主要河床が移動してそのために生ずる支流を傍系的に滿すと云ふことであると知つたのである。さうして次に吾人は、幼兒時代の性生活を調べるやうになつたのである。(二) すると遺憾なことには、人々は幼兒時代には性本能などはないと云ひ、偶々幼兒に性的顯現が認められると、それは異例的な現象であるとしてゐることを知つたのである。吾人は寧ろ、幼兒は性活動の芽を持つてこの世に生れ出で、既にその營養攝取に於いて性的

滿足を享受するものであり、さうしてこの滿足を更に『指しやぶり』としてよく人の知つてゐる活動として再現せんとするものであることを思ふのである。併し幼兒の性活動は彼等の他の諸機能と同じ歩調で發達するものではなく、二歲から五歲までの短い開花期の後に、所謂潜在期に入るのである。この期間に於いても性的亢奮は決してその製産を中止せられるものではなく、相變らず製產は繼續せられて、エネルギーは蓄積せられる。この蓄積せられたエネルギーの大部分は性的以外の目的のために利用せられる。即ち、一方に於いては、社會的感情に對して性的要素を交附するために、また他方に於いては(抑壓及び反應形成に依つて)、將來に於ける性的禁斷を造り上げるためにである。それ故に、性本能を一定の道程に於いて導いて行くべき諸々の力は幼兒時代に於いて、大部分の變態的性感情を犧牲にし、また敎育の力を借りて、築き上げられるのである。幼兒の性的顯現のまた別の部分は、このやうな利用を洩れて、性的活動として現れることがある。次に發見せられることは、幼兒の性的亢奮が樣々な源泉から流出することである。就中、滿足は所謂性的帶域が適當な感覺的亢奮をなすことから生ずる。このやうな帶域としては、如何なる皮膚の部分も、感覺機關もその目的に協ふのである。併し或る有機的機制に依つて慥に亢奮させ得る如き、何等かの性的帶域が明かに存在してゐる。それのみならず、性的亢奮は有機體に於いては、大低の過程が一定の激しさに達するや否や、云

はゞ副産物として生じ來るのである。特にこれの起り易いのは、よしんば苦痛な性質のものにもせよ總て强い情緖的亢奮に於いてゞある。總てこれ等の源泉からの樣々な亢奮は未だ統一せられず、各々その目的を別々に追及する。この目的と云ふのは、單に或る種の快樂を得やうとするに止まるのである。幼兒時代の性本能は、それ故に、中心がなく、無對象であり、自己色情的である。

註（一）この事は神經症に於いて『消極的』に生ずる變態傾向にあてはまるのみならず、また同樣に積極的な、本來の變態にもあてはまるのである。この後者の方はこのやうに、單に幼兒的傾向の定着に歸すべきのみならず、また性の流れの別の道の間違ひのために幼兒的傾向へ退行したことにも歸すべきである。それ故に積極的變態もまた精神分析で取扱へるのである。

なほ、幼兒時代の間に、性器と云ふ性的帶域が擡頭して來る。他の何れの性的帶域とも同じやうに、この帶域も適當な感覺的刺戟に依つて滿足を供すること、或は何等かの不可解な方途に依つて、他の源泉からの滿足が同時に、性的帶域と特別な關係を持つてゐるところの性的亢奮を呼覺ますてふ事實となつて——。性的滿足と性的亢奮との關係並びに性器帶域の活動と性感の自餘の源泉との間の關係を十分に說明し盡すに到らなかつたことを、吾人は遺憾に思はなければならなかつた。

神經症的障碍を硏究することに依つて、吾人は、幼兒の性生活に於いて極始めから、性的本能の諸要素が一つに組織される傾向のあることを知つたのである。第一の、非常に早い頃には、口唇性感が

主位に立つてゐる。この『性器前期』の、第二の組織に於いては、加虐性（サディスムス）と肛門性感とがその特質となる。第三期（この時期は小兒に於いては陰莖及び陰核が主位をとるまで續く）に至つて始めて性生活は本來の性器帶域に移ることになるのである。

そこで我々が最も驚くべき發見の一つとして確認せざるを得なくなつたのは、この幼兒的性生活の開花期（二歳から五歳まで）には對象選擇も十分に發達し、而も總ての豐かな精神的活動もそれに伴ふてゐると云ふ事である。實際この性的開花期に密接の關係あり、またこれに相當する時期は、個々の本能要素の統合こそ乏しけれ、また十分に目的を果し得る後年の性的組織の重要なる先驅としてはこの性目的は不確實であるにもせよ、大いに尊重すべきものであるのだ。

人間に於いては性的開花に二つの時期ある事實は、つまり潛在期に依つてこの發達が中斷せられてゐる事實は、我々には特別の注意に價するものと思はれる。この事實は人間がより高き教養に發達し得べき條件の一つであるが、併しまた同時に人間が神經症に罹り易い條件の一つでもあると思はれる。人間と親類の動物に就いては、これに似たことを、我々の知識では證明することが出來ない。人間に特有なこの性質が如何にして生じ來つたかは、人類の起源史に就いて、我々はこれを求めなければならない。

は、我々には明言出來なかつた。幼兒時代の性的顯現の特質は、主として自慰的であることが分つた。それのみならず我々は經驗に依つて、誘惑と云ふ外的印象が潜在期を早熟的に中斷し遂にこれを切上げてしまふものであり、また幼兒の性本能は同質異形的に變態であり、更にまた一切のそのやうな早熟的性活動は子供の教育を不可能にすることを信ずるのである。

幼兒の性生活に對する我々の洞察はまだ不完全であるに拘らず、次に我々は、思春期に入ると共に如何なる變化が生ずるかを研究せんと試みざるを得なかつた。吾人はその基準として二つの變化を擧げたのである。即ち、性的感情の他の總ての源泉が性器帶域の主權下に從屬すること、竝びに對象選擇の過程――。これ等二者は子供時代に既に發達してゐる。第一の方は豫備快感が利用されるやうになれば完成されたのである。即ち、快感や亢奮に結び付いてゐる一切の他の獨立した性的行爲が、新しい性目的(性的産物の放射)、つまり大きな快感と共に性的感情を終らせる目的のための豫備行爲となつたならば、それは完成されたのである。同時に我々は男女に於いて性的性質の相違することを考へなければならなかつた。さうして女となるためには一つの新しい抑壓が必要であり、その抑壓に依つて一部の幼兒的男性的要素が廢絕され、かくて女としての主要なる性的帶域の變化の道が開けて來

ることを知つたのである。最後に、吾人は對象選擇なるものが、幼兒時代を經て思春期に至つて復活するところの、幼兒が親や世話をして吳れる人に對して持つ性執着の現れであり、またその中途に起る近親姦の禁斷に依つてこの執着がこれ等の人物から離れて他の人物に向ふことを發見したのである。なほこの上に附言すべきことは、青春的性慾の過渡期の間に、身的發達と心的發達とが別々に竝んで進んで行くが、遂に激しい心的の戀愛衝動が性器の神經組織にまで爆發すると共に、常態者として當然必要なる戀愛機能の統一が確立せられると云ふことである。

發達障碍の樣々な契機

この長い發達途上に於いて、一歩々々は定着の個所となり得るものであり、またこの複雜なる構成物のあらゆる繼ぎ目は性本能解體の契機を供するものであることは、既に吾人が樣々な實例に就いて論じた通りである。なほ他に我々の爲すべきことは、發達を障害する樣々な內的外的の契機を大觀し、この機制の如何なる個所に於いて、それ等の契機から發する障害が起るかを論じておくことだ。こゝに吾人の續々擧げる多くの契機は、それ自身に於いては同じ價値のものではない、さうして如何なる契機にどれほどの重要さを認めるべきかはなか〳〵困難であることを覺悟せねばならない。

素質と遺傳

それ等契機の內、第一に擧ぐべきは性的素質に生れつきの相違あることである。この事は最も重大視されさうであるが、併しこの事は云ふまでもなくたゞ後年になつて現れたところに依つて判ずるのみであつて、而もそれとても必ずしも非常に確實と云ふわけには行かない。これに依つて見ると、性的亢奮の源泉はさま〴〵ある內、その何れか一つが重要であることを吾人は知るのである。またそのやうに素質が相違してゐると、それが後年になつて、必ずしも變態的のものとなるとは云はないまでも、常にその結果を示すべき事を信ずるのである。勿論、吾人も、元來素質が何等かの變化を有するがために、必然的に或る變態的の性生活が營まれるやうになると云ふことは、これを想像するに難くない。そこでこれを『頽廢的』と呼び、またこれを遺傳的惡化の顯現と見なすことも許されるであらう。これに關して、私は一つの注意すべき事實を報告しておかなければならない。私がこれまで精神療法上取扱つたヒステリー、强迫神經症その他の重症患者の半數以上は、その父親が結婚前に黴毒の症狀を持續してゐた者であることを見事に實證し得たのである。つまり、彼等の父親は全身衰弱又は漸進的痲痺をわづらつてゐたり、或は父親に遺傳的病毒のあつたことを一時忘れてゐたのを又思ひ出したりするのであつた。私は明言しておくが、後年になつて神經症者となつた子供等には病毒遺傳の徵象は絕對になく、從つて性的變態の素質は病毒遺傳の窮極の派生と見做さるべきだと。黴毒の親か

ら出た子はいつも必ず神經症になると病源的に決定されてゐると云ふが如きは私の考へに甚だ遠く、また私は自分の觀察した事情を偶然にして無意味なものとは考へないのである。

積極的變態者の遺傳關係はよく知らない。と云ふのは、彼等は質問を避ける途を心得てゐるからである。併し變態性慾に於いては、神經症と事情が同じであると信ずべき理由がある。我々は同じ家族の異性者の間に於いて變態性慾と精神神經症とを見ることが屢々である。例へば、その家族の男たちの方は、又は男の一人は、積極的變態者であつて、而も女の方は性を抑壓する傾向あるため、消極的變態、即ちヒステリーである。この事は二種の障害の間の本質的關係として吾人の發見したものゝ一つのいゝ實例である。

その後の仕上げ

とは云へ、性的素質に於けるさまぐ\の要素が附加しさへすれば、それだけで性生活の形態が決定されると云つたやうな見地は成立たないのである。その反對に、條件の方は相變らず持續されてゐるし、また個々の源泉から發する性の流れのその後の成行きに應じて色々な事情も起きて來ると云ふ始末である。このやうなその後の仕上げは明かに窮極的であり、決定的であるが、他方、記述上同樣なものとされてゐる素質は結局三つの相異るものに成つて行くのである。もし總ての性質が變態的とさ

れてゐる相對的の關係を持續し成熟につれて強まるものであるならば、たゞ變態的な性生活のみが窮極的な歸結となり得るわけである。そのやうな變態的素質の性質の分析はまだ十分に試みてゐないが、併し吾人はこれ等の見解の光に照して直ちに說明し得べき多くの實例を既に知つてゐるのである。例へば多くの著者たちの信ずるところでは、總ての定着的變態者は必ずや性本能が生れつき弱かつたと云ふことが豫想されると――。この形ではこの斷定は成り立ち難いと私は思ふ。併し、もし性本能の一つの要素、卽ち性器帶域が素質的に弱いと云ふならば甚だ意味あることである。何となればこの帶域は後になつて個々の性的活動を統括して蕃殖の目的を遂げる機能とするやうになるものだからである。思春期に於いて必要なるこの統括がこの場合缺けてゐるに相違ないのである。で、他の性的要素の最も強いものが變態としてその活動を繼續するのである。(一)

註(一) この場合、我々が屢々見ることは、思春期に入つて始めの程は性の流れが常態的に進んでゐるが、その流れの內面に弱さがある結果、最初の外的障碍に會つて崩壞し、やがて退行から變態的定着へと變化するのである。

抑壓

これとは違つた今一つ別の歸結を示すのは、發達の途上に於いて個々の力強い要素が抑壓と云ふ過

程を經驗した場合である。抑壓であつて消散ではないと云ふことを特に斷つておかねばならない。件の亢奮はその場合も他の場合と同じやうに生ずるのであるが、精神的妨害のためにその目的の到達を阻まれ、さま〴〵な他の方途に驅逐せられ、遂に徵候(症狀)となつて發現するのである。その結果は殆ど常態的な性生活——大抵は局限された性生活——であり得るが、併しそこに神經病的要素が加はつてゐるのである。實はこれ等の場合は、神經症患者を精神分析的に調べて見て、分つたのである。それ等の人物の性生活はその始めが變態者の性生活の如くであつて、彼等の幼兒時代の大部分は變態的性活動に滿ち、その變態的性活動が成熟時代以後にまで及び、やがて內的原因からして——大低はまだ思春期以前であるが、併し時々には思春期以後にも——抑壓的變化が生ずる。さうしてその時から以後は、古い亢奮は消滅することなしに、神經症が變態の代りに起つて來る。『若き娼婦は老聖女』„Junge Hure, alte Betschwester" と云ふ言葉があるが、たゞこの場合は若い間が非常に短くなつてゐるだけである。同一人物の生活に於いて神經症のために變態の解消されること、竝びに前にも述べた同一家族中に於いて別々の人物に變態と神經症とが配分されることは、神經症が變態の消極であるとの事實と照し合せて考へて見なければならない。

昇華

變態的素質者に於いて、第三の歸結は『昇華』と云ふ過程に依つて可能となるのである。この昇華の過程に依つて、個々の性的源泉からのあまりに力強い亢奮は他の分野に放射され應用され、かくて心的行動力の非常な增加がそれ自身としては危險な先天性から結果し來るのである。藝術活動の源泉の一つがそれである。さうしてそのやうな昇華が完全であると不完全であるとの如何に依つて、天才ある、殊に藝術的性向ある人物の性格分析をして見ると、創造的能力と變態と神經症との間の混合が如何なる割合で成つてゐるかゞ分るのである。昇華の出來損ひは反動形成 „Reaktionsbildung“ に依る禁壓である。これは我々も知つてゐる如く、既に小兒の潛在期に於いて始まり、やがてそれのためには好都合なる性の時には全生涯の間存續するのである。吾々が人の性格 „Charakter“ と呼ぶところのものは大部分は性的亢奮の材料で構成され、また幼兒時代から定着されてゐる本能から、昇華に依つて得た構成、並びにそれに類した構成から成り立つてゐる。それ等の構成は變態的な、利用の道なきものと認められた亢奮を有效に禁壓すべきものとなつてゐるのである。(一) 幼兒時代の性的性質は概して變態的であるが、この事はそれ故に、我々の多くの德の源泉として尊重すべきである。そのやうな性的性質が反動形成に依つてそれ等の德を創造せしめる限りは――。(二)

註(一) 二三の性格的特徴に於いては、一定の性的要素とさへ關係あることが知られてゐる。例へば剛情、吝嗇

着實などは肛門性感の適用から來てゐるし、名譽慾は强き尿道性感的素質に依つて決定される。

（二）『人間をよく知るもの（メンシエンケンネル）』であるところのエミール・ゾラE. Zola は、その作 ,,La joie de vivre'' の中に一少女を描いてゐる。彼女は自分の所有してゐるもの、權限を有してゐるもの、彼女の財産、彼女の生命の希望などの一切を擧げてこれを自分の愛するものに捧げ、何等報復の考へなどはなく、全然自己を放棄して捐る者である。この娘は幼兒時代には常に他人からの愛撫を要求して飽くことがなかつた。その代り他人から蔑にされるとその人に對して殘酷になるのであつた。

偶然の經驗

性交の經驗、抑壓の變化、並びに昇華作用に對比すると、その他の總ての影響は遙かに重要さを失ふのである。これ等三つの内、後の二つの現象が如何なる内的の條件に依つて決定されてゐるかは、我我に全然分つてゐない。抑壓や昇華を素質の内に數へ、素質の生活的發現であると見なす人は、性生活の窮極形態は何よりもまづ生れつきの素質の歸結であると主張するのが當然である。併しながら、そのやうな樣々な要素が協同してゐるにしても、その間に、幼兒時代やそれ以後の時代に得た偶然的要素の影響が働きかける餘地があると云ふことも、具眼者ならば異議を申立てないであらう。

素質的要素と偶然的要素との相互關係に於いて如何なる影響があるかは、これを明白に測定することは容易でない。理論は常に前者の方を買被りがちであるが、實際治療の事に當つて見ると、後者の

方の意義の重要である事が分る。が、ゆめ忘るべからざるは、兩者の間に協同の關係があり、相互に排擠するものではないと云ふことだ。素質的要素は經驗を俟つてはじめて表面に浮び出るものであるし、偶然的要素の方もそれが效果を發するためには素質的要素の支持を必要とするのである。大抵の場合に於いては所謂『補助的病源群』“Ergänzungsreihe”なるものが考へられる。この群の內で或る一つの要素の激しさが衰へかけると他の要素の激しさが高まつて來て平均されるのである。併し、この群の末端に於いて最終の場合の存することを否定するのではない。

早期幼兒時代の經驗がもし、偶然的要素の內でも主要な位置を占めるやうならば、なほさら精神分析での探究と一致するわけである。さうなれば一團の病源群は二つに分れ、一方を性質的と呼び、他を決着的と呼ぶことが出來る。素質と偶然的な幼兒的經驗とが前者（性質的）の內に於いて協同することは、丁度性質と後年の外傷的經驗とが第二群（決着的）に於いて協同するのと一般である。性の發達を傷害する總ての要素がその效果を示すのは、それ等が抑壓を生み、又は以前の發達段階に歸らしめることに於いてゞある。

我々は今や我々の任務とするところを繼續して、性の發達に影響を及ぼすものとして我々の認めてゐるさまざまな要素（それ等の要素が能働的な力であらうと、或は單にそれ等の力の發揮であらうと

を問はず）を數へ上げることが出來る。

早熟

そのやうな契機（要素）の一つは自發的な性的早熟であつて、これは少くとも神經症の病源に於いて確實に證明することが出來る、尤も、それ自身としては早熟は、他の契機と同樣に、原因とはなり得ないものではあるが——。早熟は幼兒時代の潛在期を打破し、短縮し、消滅させることに依つて現れ、さうして性的障碍の原因となる。何となれば、早熟のために現れる性的狀態は（性的禁制の狀態が十分に整つてゐないため、もしくは性器組織が十分に發達してゐないために）變態の特質をのみと り得るからである。これ等變態への傾向は、傾向として殘存してゐるか、或は抑壓の始まつた後に、神經症的徵候の動機力となる。とにかく、性的早熟は、後年になつて性本能をより高き精神力に依つて望ましくも支配すると云ふことを困難ならしめ、さうして强迫的な特質を强める。この特質は、早熟と云ふことがなくてさへも、この本能の精神方面の代表が要求するところのものであるのだ。性的早熟は知力的發達の早熟と並行することが屢々である。性的早熟はそのまゝの形で、非常に優れた、非常に創造的な個人の幼兒時代の發達史中に現はれる。またそのやうな場合に於いては、性的早熟は孤立的に現れた場合ほどには、發病的效果を及ぼさないものであるやうに思はれる。

一時的契機

早熟と同じやうに注意すべき契機が他にあるが、吾々はそれを『一時的』な契機として早熟と同じにすることが出來る。個々の本能的感情が如何なる順序に於いて能働的となるか、またそれ等の感情が新たに擡頭し來る本能的感情に、又は典型的な抑壓に服するまでどれほどの長さの間顯れてゐるかは、種族發生的に定まつてゐることであるらしく思はれる。併しこの一時的繼起に於いても、繼起の連續時間に於いても、經驗に對して確定的な影響を及ぼす如き變化が起るらしく思はれる。或る一つの流れがそれの反對の流れよりも早く現れるか遲く現れるかは、些細な問題である筈はない。何となれば、後から抑壓を加へて先の流れに及ぼす事は出來ないからである。諸々の要素の構成が一時的に離反すると、必ずその結果に變化を生ずる。他方に於いて、特別な激しさを伴ふて現れる本能的感情は、驚くほどその終りの早いのが屡々である。例へば、後年には明かに同性愛者となつてゐるものが、異性愛的執着を示す場合の如きである。幼兒時代にいろ〱の努力が最も猛烈に現れたからとて、それが長く成人としての性格を支配するであらうことを虞れるには當らない。さう云ふ努力はその反對の努力のために席を讓るやうに姿を匿すことを期待して然るべきである。（暴君は治政長からず。）發達過程がそのやうに一時的に混亂するのは何のためであるか、我々にも一寸見當がつかない。

生物學上の、さうしてまた多分歷史上の問題の深刻な大軍がそこに見えてゐるが、その大軍と戰端を開くほどまだ我々は、それに近づいてゐないのである。

印象の殘り易さ

早熟な性的顯現はそこに或る精神的の要素が加はると、その意義が重大さを益して來る。その精神的要素の起源の何であるかは、我々にはまだ不明であるが、現在のところでは或る心理上の先驅的(豫備的)傾向として定めておくことが出來るだけである。私の信ずるところでは、それは性生活のこれ等の印象の殘り易く又は定着し易いことである。それ等の印象は、後年になつて神經症になるものに於いても、變態になるものに於いても、他の事情と共に必要なる補足となるべき要素である。何となれば、早熟な性的顯現は同じでも人が違へば印象の深さも違ひ、强迫的に反覆生起したり、後半世を通じて性本能の道を決定したりするに足りないことがある。此樣な殘り易さが何に由つて來るかは、多分今一つの心的契機から或る部分は說明出來る。その心的契機は神經症の原因として見落し難きものであり、つまり最近の印象に比較して記憶痕跡の方が何故に重要な役割を帶びるかに關して見落し難きものである。この契機は明かに、知的發達に依屬するものであり、また個人的修養の發達に連れて生育するのである。これに反して、野蠻人は『刹那の、不幸なる子供』であると云はれてゐる

る。（一）修養と性慾を自由に發達させる事々は撞着するからして（この撞着の結果は我々の生活形成の中に遙かに跡づけることが出來る）、幼兒の性生活が如何に發達するかの問題は教養と文明の程度低きところでは後年の生活に於いてあまり重要でないが、その程度高きところでは非常に重大な意義を持つのである。

註（一）印象が甚だ殘り易くなつてゐると云ふことは、幼兒時代に特別に激しい體的、性的顯現のあつた結果に過ぎないと云ふこともあり得る話である。

定着

以上述べ來つたやうなさまぐ\な契機が悉く具はつてゐるところへ、今や幼兒性感の刺戟が偶然的に體驗せられて來るのである。その幼兒性感の刺戟（他の子供又は成人の誘惑が第一である）が材料となり、この材料が諸々の契機の助力を借りて、持續的な障害となつて定着する。後年になつて觀察して見て常態的性生活から逸脫してゐるのは、その大部分はこのやうにして、神經症者に於いても、變態者に於いても、最初から、所謂色氣のない幼兒時代から受けた印象に依つて確立されてゐるのだ。その原因は素質の歸結、早熟、强められた固着の特性、外部からの影響に依る性本能の刺戟などによつて生ずるのである。

性生活の障碍に就いて以上の如く調べて見た結果は甚だ不滿足なものとなつたが、それは吾々がまだ生物學的現象(性感の本質はそれであるのに)に就いて知るところ少く、そのために我々の精神分析からだけの觀察では、常態並びに病態を理解するに足るやうな理論を形作ることが出來ないためなのである。

性說に關する三論文　終

禁制と徴候と杞憂

第一章

病的現象を記述するに當つて、我々は禁制と徴候といふ用語を使用してゐるが、この區別は餘り價値がないのである。禁制だけを示して少しの徴候も示してゐないと見做される病例がない場合、或はそれには何が條件となつてゐるかを知らうと欲せぬ場合には、この兩者の概念を區別することは何等の興味もないであらう。

この兩者は同じ根柢から生じたものではない。禁制とは、機能の特殊な場合で、それが必ずしも病的のものでなくともよく、且つ又常態的(ノルマール)に制限を加へられた機能をも禁制と名づけ得るのである。これに反して徴候とは、病的現象のあらはれを云ふのである。故に禁制もまた徴候と云ひ得るのである。かくして用語上、機能が單に低下せるものはこれを禁制と稱し、機能の異狀なる變化、又は新しき作用を示すものは、これを徴候と稱するのである。我々が病的現象の積極的方面を强調するか、或は消極的方面を强調するか、卽ちその結果をして徴候と見做すか禁制と見做すかは、多くの場合隨意に取扱つてゐるやうである。それ故に、これら總ては實際的には餘り興味のあるものではなく、我々が出發點とした問題は餘り役に立たないのである。

概念的に考ふる時には、禁制は機能に對して頗る密接なる關係を有する故に、その障碍されてゐる自我機能が個々の神經症的感情に於いて如何なる形で現はれるかを、種々なる自我機能 Ichfunktionen に就いて研究して見ようと思ふ。この比較研究には性機能、食事、運動及び職業を選んだ。

（a） 性機能は頗る多様なる障害を受くるもので、その障害の多くは簡單なる禁制の性質を示してゐる。これらは精神的陰萎症 Psychische Impotenz として取扱はれてゐる。故に常態（ノルマール）の性行爲を成就せんが爲めには、常に複雜した經過を豫想せねばならず、その場合々々に障害が附き纒ふのである。禁制の起る主要個所は、男子に於ては次のやうである。即ち性交の開始に當つてリビドーが他に移ること(精神的の不快)、精神的準備の停止(勃起消失)、行程の短縮(早漏、これはまた積極的徴候としても說明し得る)、自然的結果前に行程停止(射精不足)、精神的效果の起らぬこと(最高潮（オルガスム）の快感の起らぬこと)。其他の障得としては機能が、特別なる條件、即ち變態的或は崇物的性格と關聯して起るのである。

禁制が杞憂に對する關係は古くから注意されてゐる。多くの禁制は明かに機能の放棄である。それは、この放棄の實行に際して杞憂が發生するらしいからであらう。性機能から直接に起る杞憂は婦人に多くある。吾々はこれらの杞憂をヒステリーの部類に入れ、同樣に嫌惡の防禦徴候をもその部類に

入れる。この嫌惡の防禦徴候は元來被動的に經驗した性行爲に對して後から現はれた反應であつて、後に至つて性行爲の觀念となつたものである。又强迫行爲の大多數は性行爲に對する豫防及び保證として現はれたもので、畢竟するところ恐怖症の性質を帶びたものである。

これらに就いては餘り知られてゐない。知られてゐる事は、機能障碍を起すに當つては多種多樣なる手續を經たものだといふ事だけである。その手續きとしては、第一、早期に起つたと思はる〻リビドーの單なる轉移で、これこそ眞正の禁制である。第二、機能の働きの惡化、第三、特別なる條件に依る機能の阻碍及び他の目的への轉向に依る機能の變化。第四、保護作用に依る豫防。第五に杞憂發生による機能の中絕、竝びにその副的機能が最早妨げ得られなくなる事。最後に第六、機能が猶働きを繼續してゐる場合には、これに對抗して、旣に起つた事を逆戻しさせむとする追加的反應である。

（b） 榮養機能に屢々起る障害は、リビドーの退去に依る食欲不進である。又食欲亢進も稀なことではない。强迫攝食は飢餓を杞憂する事から生ずるのであるが、この事に就ては十分な研究は出來てゐない。ヒステリー的攝食は嘔吐といふ徴候で示される。杞憂に基ける食物拒否は精神病狀態に屬してゐる（中毒妄想）。

（c） 運動は多くの神經症狀態の場合には、禁制によつて步行不快、步行困難を起す。ヒステリー

的障碍にあつては、運動器の運動性麻痺を助長し、或はこの器官の一機能を特に停止せしめる（歩行不能症(アバジー)）。特に著しいものとしては、一定の條件の介在に依つて運動困難が起る。この介在が不完全なる場合には杞憂を惹起する。（恐怖症(フォビー)）。

（d）　仕事の禁制は、獨立したる徴候として屢々治療を要することがある。これは仕事の繼續を無理に強ひられた場合に現はれるもので、快感減少、仕上げの不手際、及び疲勞の如き反應現象（眩暈、嘔吐）を示すのである。ヒステリーは器官及び機能の麻痺を發生する事に依つて仕事の完成を邪魔し、かくて仕事の中絶を餘儀なくせしむる。強迫神經症の人は絶えず仕事が手につかず、その間に仕事を延引し又は繰返して、時間を空費して仕事を進捗させないのである。

この觀察を猶他の機能の上に押し擴げて考へる事が出來るが、押し擴げたからとて更に多くの事を期待するといふ譯には行かない。我々は現象の表面を飛び超えては進まないのである。それ故に禁制の概念は最早多くの謎を殘さないといふ見解に達するのである。禁制は自我の機能制限の表現であつて、この機能禁制それ自身は非常に多くの原因を持つてゐる。機能放棄の多くの機構(メカニスメン)と、この拋棄の一般的傾向とは、我々にはよく分つてゐる。

特殊化された禁制では、この傾向は一層容易に分るものである。ピアノの演奏、筆寫又は歩行の如

きものが神經症的禁制を蒙つた場合には、これを分析すると、この機能に就いて必要なる器官卽ち指と足との非常なる色情化がその原因となつてゐるのを認める。若しその色情性卽ち性的意義が增加した時には、或る器官の機能が障碍されるといふ事が、全く一般的に分つたのである。猶少しく滑稽じみた比較を敢てすれば、これは一人の女コックが、そこの主人と戀愛關係を結んだが爲めに、料理場で最早働かうとしないやうなものである。筆寫卽ち白紙の一片に筆端からインキを流出させるといふ事が性行爲の象徵的意味を帶びたものとするならば、或は又步行といふ事が、母體である大地に足跡を印する象徵的代償であるならば、この二つの筆寫と步行とは拋棄されるのである。何故ならば、それは恰も禁斷されてゐる性行爲を實行するやうなものだからである。自我は新しい抑壓を始めざらむが爲めに、換言すればエスとの葛藤を避けむが爲めに、自分のこの作用を拋棄するのである。

其他禁制は屢々職業的活動の禁制と同樣に、明かに自己膺懲の爲めに起るのである。嚴格なる超自我が拒絕したものを自我が遂行することは許されない。これは自我に利益及び成功を齎すかも知れないからである。又、超自我との葛藤に陷らざらむが爲めに自我は斯かる行爲を拋棄するのである。

自我の、より一般的なる禁制は、簡單なる他の機構から生ずる。特別に困難なる精神的問題、例へば悲痛、强大なる感情壓迫、又は絕えず擡頭して來る性的瞑想（ファンタシー）を抑止せむとする努力等に依つて自我

が多忙になつた場合には、自我に融通されるエネルギーは減少される故に、その消費を多方面に向つて制限せねばならないのである。これは恰も投機師が企業に當つて資金を固定すると同じである。その好適例として、私は或る強迫患者で、短持續の強度の一般的禁制をもつた者を見ることが出來た。この患者はある原因の下に一日乃至數日間連續する痲痺的疲勞に陥入つてしまふのである。この原因は明かに躁狂發作を伴つてゐたに相違ない。これよりして、又一般的禁制を理解すべき方向を見出さねばならない。この一般的禁制によつて鬱憂狀態及びその強度のもの卽ちメランコリーの何たるかを知ることが出來るのである。

最後に禁制に就て約言して置かう。禁制とは用心（フォールジヒト）の結果か或はエネルギー減少の結果に依つて自我機能が制限されたものである。禁制が徴候と異れる點の何れにあるかは、これで容易に知ることが出來る。かくして徴候は最早自我の內なる、或は自我に卽したる現象として説明される事は不可能となつた譯である。

第二章

徵候構成の特徵は、永い間研究され、且つ、恐らく遺憾なき方法で云ひ表はされてゐる。徵候とは滿足せられざる本能の表現であり又代償であり、抑壓過程の結果である。抑壓は、自我が場合によつては超自我の命令でエスに起つた本能纒綿を共同しようとは欲しない時に、その自我から生ずるのである。自我は抑壓によつて不快の亢奮傳達者たるが如き觀念をして、意識させないやうにすることが出來る。これが無意識の形式として存在してゐることは、分析によつて屢々證明されてゐる。然し乍らこれまでは明瞭にされたとしても、未解決の難問が直ぐ現れるのである。

現在までは、抑壓に關する機制の說明は、意識されずにある結果を强調して居つて、其他の點に就ては疑惑を置かなかつたのである。そこで今、エスの中に滿足を得ようとして起つた活動的な本能は如何なる運命をたどるかといふ問題が生ずる。これに對する解答は間接的であつて、卽ち抑壓の機制によつて、豫期された滿足快感が不快感に變ずるといふ事であつた。さらば如何にして本能滿足の結果が不快になるだらうかといふ問題に逢着する。確固たる斷言をするには、吾々はこの關係を明かにしたいのである。エスに於て企てられた亢奮行程は、抑壓によつては結局完結せられずして、自我が

それを禁斷し若しくは拒絶して完結されるのである。かくして抑壓の場合の「感情變化」といふ謎は消散する。然し乍らこれによつて吾人は、自我がエスに對して頗る廣大なる影響を及ぼすことを承認したのである。且つ如何なる途に自我の驚くべき力の傳搬が行はれてゆくかを理解せねばならぬのである。

余の考へる處では、この影響は、知覺區劃と密接なる關係の結果自我に屬するものであり、この關係が確かに影響の本質を決定し、エスとの差別の根本となつたものであると思ふ。我々が W-Bw（知覺意識）と呼んでゐるこの區劃の機能は、意識の現象と結合してゐるものである。卽ち亢奮を外部のみならず內部よりも受け、この內外より到來する快不快感情に依つて、精神的の出來事の經過を快感原則の意味に從へようとするのである。自我はエスに對して無力であるのは相應しいものだと吾人は考へるが、然し、エスの本能機制に反抗する時には、彼の目的を達せんが爲めに快感原則の殆んど絕對的審判の助力によつて不快の信號を與へればそれでよいのである。この關係を獨立させて觀察するならば、我々は他の方面から引例によつて證明することが出來る。或る國家に於ては、或る主義者は大衆の傾向に一致するやうな決定を作る方策に對して反抗する。卽ちこの少數者は壓迫を持つて、これに依つて支配者の『公の思考』を改變して、計畫された決定が中絕されるやうにするのである。

この解答には猶問題が附隨してゐる。それは、不快感信號に用ひられたエネルギーは何處から移動して來たかといふ事である。內部の好ましからざる機制に對する擁護が、外界の刺戟に對する擁護の型通りに起り、猶外界の危險に對すると同樣に、內部に對する保護を同じ方法でするといふ事が、この移動の行程を證明するのである。外界の危險に際しては生物は逃亡の計畫をなし、次で危險の知覺から纏綿を撤回する。その後に危險を拒絕する事が出來ない時でさへも、危險の及ぶ範圍から逃げ了せない時でさへも、效果のある方法卽ちそれを筋肉動作とする事によつて、危險の知覺を處理するやうにする。斯くの如き逃亡計畫はまた抑壓と同價値のものである。自我は抑壓される本能代表から纏綿(前意識の)を撤回して、これを不快感(杞憂)の解放に向ける。抑壓の場合に如何にして杞憂が生ずるかといふ問題は簡單には云へない。自我は本來の杞憂の場所であると主張すること、又抑壓された亢奮に纏綿せるエネルギーは自動的に杞憂に移行してゆくといふ、昔の解釋を再び支持することは、常に正しいことである。以前に一度斯く述べた事があつたが、それは現象學的の叙述であつて、超心理學的の說明ではなかつた。

この記述から新問題が生ずる。それは前意識の自我纏綿の撤回の如き、單なる撤回作用と輸送作用とが不快感或は杞憂を生ぜしむるに至るといふ事は、これは我々の假說では單に纏綿が增加して來た

結果であるとしてゐるが、經濟學的には如何樣に說明するかといふ問題である。余は、この原因を經濟學的だけでは決して說明できないと答へる。杞憂は抑壓の場合には新しく生ずるものでなく、むしろ存在せる記憶象による感情狀態として再生されるのである。我々はこの杞憂の由來——結局は感情も同じく——の一層深い問題を携へて、明瞭なる心理學の地域を振り捨て、而して生理學の領域を進んで行かうと思ふ。感情狀態は、古代の外傷的經驗の殘渣として精神生活に合併して居り、それが記憶と同じ狀態に於て喚び起される。余は思ふに感情狀態を、遍く且つ個人的に得た處のヒステリー發作と比較して、それをそのものゝ常態の姿として觀察するのは不當ではないと考へる。人類並びに人類に近い動物では、出產といふ事が、杞憂感の表現上に個人の最初の杞憂の經驗として特殊の形式を與へたやうに見えるのである。然し我々はこの關係を過信してはならない。又この認知から、危險狀態に對する象徴感情は生物學上必要であり、それが各場合に起るであらうといふ事を見逃してはならない。杞憂發作の各場合には、出產狀態の再生と同樣な或物が、精神生活中に生ずるといふ事を、余は不當なことゝ考へてゐた。根原的に斯くの如き外傷の再生である處のヒステリー發作は、この特徴を連續して保持するかといふ事は、確實なことではないのである。

余は他の場所に於て、治療に當つて問題となつた多くの抑壓は、後期抑壓の例であることを論じ

た。この後期抑壓は以前に起つた初型抑壓から假定されて出來たもので、初型のものは新らしい狀態で彼の強力なる影響を及ぼすものである。これらの抑壓の基礎となつてゐるもの及び前階段となつてゐるものに就ては未だよく知られてゐないのである。抑壓に際して超自我の働きを過信するといふ危險は屢々生ずる。超自我の分立された事が幾分初型抑壓と後期抑壓との境界を作るに至つたのではないかと考へることは今俄かに判斷を下せない。最初の杞憂勃發——甚だ強大なる——は常に超自我の分立前に起るのである。亢奮の過大なる強さ及び刺戟防禦を破壞するが如き量的要素が、初型抑壓の第二次原因となつてゐることは、極めて明瞭なことである。

刺戟防禦の說明に當つて我々は刺語の如く想起させられるものがある。それは抑壓は二つの異なる狀態で起るといふことである。卽ちその一は好ましからざる本能活動が外部的知覺によつて喚起される場合と、その二はそれが斯かる煽動なしに內部に於て生起する場合とである。我々はこの差異に就いては後に述べよう。然し刺戟防禦はたゞ外部の刺戟に對してだけに止まり、內部の本能の要求に對しては働かないのである。

我々は自我の逃亡計畫を硏究してゐたが爲めに、徵候構成に就いては何等觸れることはしなかつた。徵候は、抑壓によつて侵害された本能活動から生じるのである。自我が不快感信號から請求され

て、本能活動は完全に抑壓せむとする目的を成就するに當り、これが如何樣に起るかに就いては我々は何も知らない。我々は多少不完全なる抑壓として、示された實例によつてそれを學ぶより外に途はないのである。

本能活動は、抑壓されるにも拘はらずある代償を發見するが、然しその代償は極めて萎縮された、移動された禁制されたものであるといふやうに一般からは見做されてゐる。それ故にこれも亦最早滿足なものとは認められない。若し代償が完成されたとするならば、快感は起らずに、却つてこの完成によつて强迫の性質を帶ぶるに至る。然し乍ら徴候が滿足になされなかつた場合には、他の點に抑壓の作用は及ぼされるのである。代償機制は運動によつて輸送される事が出來ず、且つ、又この機制が成就しない時には、外界に交渉をつけることは許されずして、自己の肉體を變化せしめる事に盡力せねばならない。即ち行動に換はることは禁ぜられるのである。抑壓に際しては、自我は外界の現實の影響のもとに働くのであつて、それが爲にこの現實から代償機制の結果を得るのである。

自我は、意識に達する進路を、行動への通路と同樣に外界に對して支配してゐる。そして抑壓の場合には、自我はその力を二方向に働かせてゐる。その一つを本能代表は受けてゐる。それは本能活動ですら、自我の力の發現する他の方面を探求する爲めである。そこで自我の能力を斯樣に承認する事

と、我々の研究『自我とエス』に就てこの自我の立場に就いて説明した事とが、如何なる關係にあるかを訊すに好都合となつた。其處で我々は自我の超自我並びにエスに對する從屬性を述べ、兩者に對する自我の無力及び杞憂胚胎、又懸命に保持せし自我の尊大心の假面を剝いだのである。それ以來、この判定は精神分析の文獻に强き反響を及ぼした。多くの聲は感銘的にエスに對する自我の薄弱及び吾人の内部にある神祕的な者（デモーニッシュ）に對する合理性の薄弱を强調し、これをもつて精神分析的「世界觀」の大黑柱にせむとするやうになつたのである。この抑壓作用の見解によつて、分析者は極端に偏した論者から全く隔絶されたと云つてはならぬであらうか。

余は別に世界觀を創出しようとするものではない。それは哲學者に委ねる。哲學者は、何事にも詳細なる敎示を與ふる處の手引書なしには、人生を全然實踐的には發見しないものである。我々は謙遜して侮蔑を受けよう。哲學者はより高い窮乏の地點から、侮蔑をもつて我々を見下すのである。又我我は我々のナルシス的傲慢を否定することは不可能なる故に、熟慮灸の如き考究をもつて慰安を求めむとするのである。即ち、斯かる「人生指導者」の總ては速かに老衰すること、それはまさに我々の小範圍の管見的な小事業で、改版を要すること又その手引書の最も現代的なものをさへ、昔のかの適當なる且つ完全なる問答示敎（カテヒスムス）に換へようなどと企てゝゐることである。從來科學の光はこの世界の謎に就

いては極めて僅かの部分に投げられたに過ぎなかつた事を我々は精細に知つてゐる。總ての哲學者の擧げた騷音は、それに就いて何等の變動をも齎し得なかつた。たゞ確實なるものに對する研究に、あらゆるものを從屬せしめた忍耐ある仕事の繼續のみが、徐々に變動を創り得たのである。旅人は闇路をゆく時、唄を唄ふならば怖しさは覺えない。然しそれについて旅人は何等明瞭な理由を知らないのである。

第三章

自我の問題に戻らむが爲めに一言したい。我々が抽象論を强調し、且つ複雑なる關係から或は一側をのみ或は他側をのみ抽出せる事に就いて反對論を受けたやうである。自我をエスから分離することは正しいことに見えるが、これは一定の關係から餘儀なくされた事である。然し一面から見れば、自我はエスと同一物であつて、單にエスの特に分化された部分である。我々はこの考への部分を全部に對立せしめるか、或は又この二つの實際の分裂が行はれたとするならば、この自我の薄弱さは明瞭にわかるのである。これに反して自我がエスと結合して、分離されずにあるならば、自我は强力となる。自我が超自我に對する關係も亦これと同樣である。多くの場合この兩者は合流してゐるが、たゞ兩者間の緊張、即ち葛藤の起つた場合には區別することが出來るのである。抑壓の場合に於ては、自我は一編成（オルガニザチオン）を作るがエスは何も作らないといふ事實は決定されてゐる。即ち自我は恰もエスの編成化された部分である。自我とエスとは、二つの異つた陣營のやうであるといふ比喩は、當らないかも知れない。即ち抑壓によつて自我はエスの一部分を禁壓せんとするや、エスの殘部は被壓者を援助し又自分の强度を自我の强度に比肩せむとするであらう。これは屢々起り得ることであるが、然し抑壓

の出發點が確かでなく、通常抑壓される本能活動は孤立して殘るものである。抑壓の作用が我々に自我の强さを現した時には、抑壓は自身の無力といふこと及びエスの各本能活動に對して無影響であるといふ證據を示すのである。何となれば抑壓によつて徴候の生ずる機制が、自我編成以外に又それとは無關係に、その存在を主張するからである。又獨り彼のみならず彼の後裔の總ては同じ特權を享け、てゐる。故に次の如く云ひたいのである。それは特別統治區域である。然し其處で此の作用が自我編成の一部分と聯盟を結んだ場合には、此の作用は自我編成を自身に誘引しないかは疑問であり、又自我を犧牲に供してこれを占領するかは疑問である。從來より知られてゐる比喩は、徴候を異物として見做すことで、この異物は組織内に潜居して間斷なく刺戟及反應の現象を取扱つてゐるとしてゐる。好ましからぬ本能活動に對して起つた防禦爭鬪は徴候構成といふ事で終結をつげることはあり得る。我々の知れる範圍では、これは最初ヒステリー的肉體轉換の場合に見るが、然し通常はその經過は違つてゐる。即ち最初の抑壓作用に次いで永續的の或は無限の續發事件が起り、本能活動に對する爭鬪は持續されて、徴候に對する爭鬪の中に入込んで行く。

この二次的の防禦爭鬪は二つの容貌——反抗的な表情をした——を我々に示してゐる。一方には自我は自身の性質に從つて、革新とか調和計畫と考へられるやうな事を企てねばならぬやうに餘儀なく

される。自我は一つの編成されたものであつて、その各の編成要素の中自由なる交通及び相互影響の可能の上に建立されてゐる。彼の非性慾的エネルギーはその成立を猶一致及均勢へ向つて努力せむことを示し、かく綜合しようとする力は自我が强大に發達すればするほど益增加して來る。斯くて自我も亦奇怪な又は飛び離れた徵候を廢棄し、同時にあらゆる方法をもつて自分に結合させようとし、又結合によつて彼の編成を成就せしむべく試みることは明かなることである。かくの如き努力は現に旣に徵候構成の仕事に影響を與へてゐる事は認められるのである。それに就いての古い例としては、かのヒステリー徵候で、それは明かに滿足要求と懲罰要求との互讓(コンプロミス)によつて出來たものとされてゐる。斯樣に超自我の要求が滿たされて出來た徵候は、最初に出來た自我の一部分を所有してゐると同時に、一方に於ては自我編成に於ける抑壓されたもの丶狀態とその侵入部位とを意味してゐる。故に云はゞ混合纒綿をもつた境界停留所である。總べて最初のヒステリー徵候は斯樣にして作られたものか否かは精細なる研究を俟たねばならない。自我は永い經過の間に、恰かも熟慮の末なされたかの如き態度を示して來る。それは何かといふと、一度そこに出た徵候は決して除去することは出來ないといふことで、云はゞこの狀態に滿足して且つ出來るだけ大なる利益をそれから抽出するのである。現實の外界に對して自我が最も普通な仕方で適合させてゐるやうに、徵候によつて代表される處の內部の

自我以外の部分に對しても適合作用が起る。これに就いての原因は決して缺けてはゐない。徴候が成立されるには、行動が禁制されるといふ事が必要である。この禁制が超自我の要求を和解し、又外界の要求を拒否する。故に徴候は次第に必要なる興味の代表とせられ、自己主張に價値を持つことが出來、自我と共に親密に發達することが出來、自我にとつては缺くべからざるものとなるのである。ただ極めて稀なる場合にある異物が治癒してゆく場合に、稍これと同じやうなことが繰返されることがある。吾人は徴候に對して斯かる二次的に適應させる意味をも誇張することが出來ると同時に、自我は徴候より生ずる利益を單に享けんとして徴候を自ら創つたと切言することが出來る。恰も勞働せずして養老金にて生活せんが爲めに、戰傷者が故意に脚を射たせたのだと强ひて考へるならば、それは正しくもあり、又不正でもある。

其他、强迫神經症及び偏執狂（パラノイア）の徴候形式は自我に向つて重要なる價値を有してゐる。それは彼に利益を與ふる故ではなく、却つて不要なナルシス的滿足を與ふる爲めである。强迫神經症者の系統（システム）構成は眩惑によつて自分の自己愛に媚びてゐるのである。彼等は他人よりは特別に純潔なる或は正直なる人間であるかもしれぬと思ふことである。偏執狂の妄想形成は、仕事の區域は容易に變へ難いものだといふことを、この患者の判別力や空想（ファンタシー）に知らしめてゐるのである。斯く述べて來た總ての關係に基

いて、我々に神經症の罹病(第二次的)として知られてゐるものが、惹起されるのである。それはその徵候を自身に合併させようとして自我の努力を援助し、然かして徵候の固着を强めるものである。若しも我々が徵候に對して爭鬪してゐる自我に、分析的輔佐を爲さうと試みるならば、我々は抵抗の部分に於て、自我と徵候との間の和解的條件が働いてゐることを發見するのである。然しこれを解說するは容易な事ではない。自我が徵候に對して行つてゐるこの二つの仕事は、實は互に相反してゐる仕事なのである。

其他の仕事は、親和な性質を餘り持たずに、抑壓の進路を持續させてゐるのである。然しながら我我は自我は矛盾を以つて非難せらるべきものでないと考へてゐる。自我は平和的で爲めに徵候を自身に合併し、それを吸收して合併しようとしてゐる。處がその障碍は徵候から出てくるのである。卽ち徵候は抑壓された亢奮の正しい代表者及び後繼者としてその役目を果し、そのもの丶滿足要求を常に新たにしてゐる。それが爲めに自我は更に不快信號を與へて自身を防禦せんと努力するのである。

徵候に對する二次的防禦爭鬪は多樣であつて、種々なる舞臺の上で演ぜられ且つ多數の方法が用ひられる。我々は徵候形成の個々の場合を硏究の根本としなければ、徵候に就いて多くを斷言することは出來ない。こ丶に於て我々は杞憂の問題に進むべき機會を發見する。それは久しく我々が心底に於

て待遠しく感じてゐた問題であつた。それにはヒステリー性神經症を惹起させる處の徴候から出發して行かうと思ふ。然し强迫神經症、偏執狂及び其他の神經症の徴候形成に就いては、我々は未だ猶說明を與ふる準備はとゝのつてゐないのである。

第四章

我々が觀察した最初の例は、或る小兒のヒステリー性動物恐怖症(ティールフォビー)である。即ち『少年ハンス』(一)の馬恐怖症の如きは總ての主要點に於てこの典型的の例として擧げられる。神經症疾患を實際に取扱ふ場合に、我々が抽象的に考へてゐた時の期待よりも非常に複雜なものであるといふ事は、一見して直ちに知られるのである。これには二三の仕事が附隨してゐる。それは抑壓された衝動は何か、その徴候代償は何か、抑壓の動機は何處かを標示することである。

註（一）Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben. (Ges. Schriften, Bd. Ⅷ.)參照。

少年ハンスは馬が怖ろしい爲めに街に行くことを拒むのであつた。これが素材である。それならそれに就いての徴候卽ち杞憂發生、杞憂對象の選擇、或は自由なる運動性を斷念すること、或は同時にそれに就いての種々なる事柄等は何であるか。拒絕するといふ滿足は何であるか。それを拒絕せねばならぬは何故であるか。

この例に於ては左程多くの謎はあるまいといつても差支へなからう。馬に對する不可解な杞憂が徴候であつて、街を歩く事の出來ないことは、杞憂を起させない爲めに自我が自身に課した制限、卽ち

禁制現象である。後者の點の説明の正しい事は容易に判ることだが、今こゝでこのやうな禁制現象といふ事を論議することは問題外とする。然しこの例の初めの皮相的觀察では、この確固たる徴候を實際的に云ひ現したとは決して云へないであらう。我々が精密な審問をした場合に經驗する通り、これは馬に對する不明瞭なる杞憂ではなくて、一定した杞憂の豫想であつて、即ち馬は自分を嚙むだらうといふ事なのである。確かに斯ういふ内容それ自身が意識から消退して、その代りとして單なる恐れとその對象とを持つてゐる處の不明な恐怖症でもつて、置き換へようとするのである。今は先づ斯樣な内容がこの徴候の核心ではあるまいか。

この少年の全精神的狀態が分析の仕事中に明瞭に觀察されない間は、我々はこれを進めて行くことは出來ない。彼は父に對して嫉妬と敵愾心とをもつたエヂポス狀態に置かれてゐたのである。然し母が不和の原因となつてゐない限りは、彼は父を心から愛してゐたのである。斯樣にしてアンビバレンツ葛藤、即ち心からの愛と十分是認される憎惡との二つのものが、同一人に對して向けられてゐるのである。彼の杞憂は、この葛鬪を解決せむとする試みでなければならぬ。斯かるアンビバレンツ葛藤は屢々存するもので、我々はその葛藤の他の一典型的出發點を知つてゐる。この場合にこの兩者の一方は、相互に廻轉する感動(普通は愛情的のもの)を非常に强大にし、他方はそれを消失させるのであ

る。この愛情の過度や强さは、これを示すのみが唯一の態度ではなくて、その態度によつて絶えず其の反對物(憎惡)を壓迫するやうに警戒して居り、更に反應構成(自我に於ける)による抑壓として記述したやうな出來事を組立てゝゐるのである。少年ハンスの場合では斯樣な反應構成は何も示してゐない。アンビバレンツ葛藤から惹起されるやうな種々なる途は明かにあるのである。

或る異つたものが此の中に存することを確實に認めた。卽ち抑壓された本能は、父に對する敵愾心の衝動である。分析によつて、馬が咬むといふ思考の成立を辿つて行けば、その事は證明される。ハンスは乘馬遊びをしてゐた時、馬が倒れるのを見たり、仲間が落ちて怪我したのを見たことがある。馬や仲間が倒れたり怪我したやうに、自分の父もさうなつて吳れゝばよいがといふ願望を組立てることが、このハンスの場合に於ても正しいといふことを、精神分析は我々に知らせて吳れる。最初に觀察した事柄を見ると、父を亡きものにせむとする願望が又幾分臆病なる表現を採つたといふことが想像される。然し斯樣な願望は、エヂポス・コンプレクスの殺人的衝動をもつたもので、自分自身を亡きものにせむとする目的と同じものである。

この抑壓された本能から、馬恐怖症を想像し得るやうな代償を見出す方法は、現在の處一つもないのである。我々は今幼時の動機及びアンビバレンツを除去しつゝ少年ハンスの精神狀態を單純化して

見ようと思ふ。彼は或る家庭の若小使であつて、そこの主婦に惚れ込んで、その主婦から寵愛されるのを喜んでゐた。それが爲めに彼は威めしい主人の方を嫌つて、これが亡くなつて與れゝばいゝがといふ願望を抱いてゐたのである。さういふ譯で自然の結果として、彼はこの主人から復讐されることを怖れ、主人に對して怖れるといふ狀態を現はすに至つたのである――恰も馬に對しての恐怖症の如くにである。これは、我々はこの恐怖症の杞憂を徴候として見做すことは出來ないのである。若し母に愛情を感じた少年ハンスが、父に對する杞憂を示したやうな場合には、これを神經症とか恐怖症と見做す事は正當でないかもしれない。我々は全く理解できる感情的の反應を各自に持つてゐるらしい。この反應を神經症に爲すものは單一のものであつて、馬をもつて父に置換へたといふ事それのみである。そこでこの轉移（置換へ）によつて徴候と名附くべきものが出來るのである。この置換へは他の機制（メカニスムス）、即ち反應構成の助けを借らずにアンビバレンツ葛藤の解決をつけた機制である。これは元來トーテミズムの考へ方の痕跡が、尙この稚い時代には容易に復活されるといふ事よりして、この轉移が容易となり又可能となるのである。人間と動物との差は未だ猶明瞭にされて居らず、確かに其後强く主張された程には考へられてゐないのである。欽仰されてゐるが然し又怖れられてゐるといふやうな成人は、大きな動物と同位置に置かれる。何故ならば大きな動物は色々な事で羨望されるが、又危害

を受ける爲に警戒されるからである。かくの如くアンビバレンツ葛藤は同一人では解決されないで、云はゞ迂回し乍ら、その衝動の一つに、或る他の人物を代理として置換へて成されるのである。

然し乍ら我々の知つてる限りでは、少年ハンスの恐怖症の分析は、他の點に於て我々に完全に謎を解いて呉れたのである。徴候構成を仕立てる處の歪みは、抑壓されてゐる本能の代理者(觀念內容)に用ひられてゐるのではなくて、それとは全く異つて、只本來の憎惡に對する反應にのみ一致するやうなものに用ひられてゐる。若し少年ハンスが、馬を恐怖する代りに、馬を虐待して毆打しようといふ考へを起すか、或は馬が倒れ又は痙攣を起して、死ぬやうな傷害を受けるのを見たいといふ願望を明かに示したならば、我々の期待はもつと早く達せられたのであらう。この種の或物は又實際に彼の分析中に現はれてくるが、然しそれは長く眞先には神經症には存在しない。そして——特別に——若し彼が父に向ける代りに馬にのみ向けた斯樣な敵愾心を、實際に主要徴候として發達させたならば、彼は神經症であるかどうかは全く判斷出來まいと思ふ。それ故に抑壓の解釋によつても、或は徴候の定義から見てもこれは秩序立つてゐる事とは云ひ難い。從つて勢ひ斯樣なことが直ぐ浮んで來る。それは少年ハンスが實際馬に對して斯かる事實を示すのであるならば、確かに非難すべき虐待的本能が抑壓によつては變化を受けないで、單にその對象だけが變へられたのではあるまいかといふ事である。

抑壓が斯く餘り遂行されない場合のあることは確かである。然し少年ハンスの恐怖症の發生には、この抑壓が多大に起つたのである。猶精細にせむが爲めに我々は他の部分の分析から解釋しよう。

我々は既に少年ハンスが彼の恐怖症の內容として馬に咬まれるといふ觀念を擧げてゐるのは承知してゐる。そこで我々は其後狼が恐怖動物となつてゐた動物恐怖症の一例の發生に就いて觀察した事があるが、これは狼が同時に父の代償となつてゐたのであつた。(こ　分析して明瞭になつた一つの夢によると、この男兒には七つの小山羊の童話のやうに狼に咬まれるといふ杞憂が起りつゝあつたのである。少年ハンスの父が、明白な證據となるやうな、乘馬遊びなどを子供と一緒になしたといふ事が、確かに恐怖動物の選擇を決定させるに至つたのであるが、これと同樣な事を極めて蓋然的に作らしめる事は、余が三十年間に初めて分析した露西亞人の父親は、その子供と遊んでゐる間に狼の眞似をして、冗談に喰つて了ふぞと脅した事である。其後余は第三の例として或る米國青年を知つた。その青年は動物恐怖症ではないが、その症狀によつて前の場合を諒解するに好い助けとなつた。その青年の性慾亢奮は空想的(ファンタシー)の童話で燃え立つてゐた。その童話といふのは人から讀んで聞かされたもので、或るアラビアの酋長が食べ物で造つた人間(Gingerbeadman)を喰はうとして追ひかける話であつた。彼は自身この食べられる人間と同一化(イデンチフィチーレン)したものであり、酋長は父の代理として容易に諒解され、更に、

この空想は彼の自己性感（アウトエロテイツシ）の活動の基礎となつてゐるのである。父に喰はれるといふ觀念は、典型的な古代の小兒の遺產（キンデルグート）であつて、かゝる神話（クロノス）と動物生活との類似性は一般に認められてゐるものである。

註（一） Aus der Geschichte einer infantilen Neurose (Ges. Schriften, Bd. VIII.)

この觀念の內容は、斯樣に解說したにも拘らず我々には異樣に感ぜられて、それを子供にたゞ懷疑的にしか聞かせられない程である。又この觀念の內容は、實際明示されたやうな事の意味を持つてゐるか何うかは我々には判らないし、更にそれが如何にして恐怖症の對象となり得たかをも理解できないのである。然し乍ら精神分析の仕事は總べて我々の要求する處のものを敎示して吳れる。分析の敎ふる處によれば、父に喰はれるといふ觀念は、受動的の愛情の亢奮が退行して低下した形を採つたものであつて、性器性感の意味で、對象としての父から愛情を受けたいと希ふことである。この例の病歷を追求すると、以上の意味の正しい事に疑念を挾めなくなるのである。この性器亢奮が口唇リビドー編成から虐待性リビドー編成までの、征服されたる移行期の言葉で表はされる時には、この性器亢奮は勿論最早何等その愛情的目的を示さないのである。然しこれは單に退行的の形であらはれた代理者の代償に過ぎないものであるが、或は又エスに於ける性器亢奮の事實上の退行的低下であるかは、

容易に決定することは出來ない。露西亞人の『狼男』の病歷では、全く決定的にこの後者の重要なる可能性を示してゐる。何となれば、彼はその決定的な夢で邪惡な拷問的な加虐的な態度をとり、そしてその上に直ちに本當の强迫神經症を起して來たからである。常に我々が考へてゐる意見は、抑壓は、不快なる本能亢奮を防禦すべく自我の命に從ふ處の唯一の方法ではないといふ事である。若し本能を退行させる事に成功するならば、其時は自我をして抑壓によるよりも根本的に、より力强く傷害することが出來るのである。確かに屢々抑壓は最初の强ひられた退行に從はせられるのである。

狼男の場合の事情とそれより稍簡單な少年ハンスの場合の事情とは、猶多くの事を考へさせる。そこで旣に我々は二つの豫期しなかつた觀察を得た。疑ひもなくこれらの恐怖症の場合に抑壓された本能は父に對する敵愾心である。これは逆に變へる行程をもつて抑壓されるので、卽ち父に對する虐待の代りに、自分に對する父の虐待——復讐——が起ると云ひ得る。斯樣な虐待はそれでなくても虐待性リビドー期に根ざしてゐるのであるから、確かに猶口脣期の段階まで或る低下を必要とするのである。この段階はハンスの場合では咬まれるといふことで示され、露西亞人の場合では又喰はれるといふ事で明かに示されたのである。其の他又實に分析は、種々の疑惑に就いて確實に明示してゐる。それは同時に他の本能活動で、父に對する受動的愛情の反對のもの、卽ち旣に性器男根リビドー編成の

水準に達した處の本能活動は、抑壓下に置かれるといふ事である。しかのみならずこの事は、抑壓作用の最終の結果に對してより深い意味をもつてゐるやうに思はれる。即ちこれは更に引續いて退行して、恐怖症の內容に或る一定の影響を與へるものである。斯くて我々が單に本能の抑壓のみを研究するならば、斯樣な二つの作用の關係を承認せねばならなくなる。即ちこの二つの本能活動――父に對する虐待的進撃と被動的の愛撫的狀態――は反對の一對をなしてゐる。これは少年ハンスの病歷を正しく檢べると猶一層明かにわかる。ハンスには恐怖症が發生したからとて母の愛撫的對象纏綿は中止されてゐないことが認められる。この愛撫的對象纏綿には恐怖症の內容は少しもないのである。これは、ハンスの例では――露西亞人では餘り明瞭でないが――エヂポス・コンプレクスの殆んど全構成に相當する抑壓作用に關係してゐるのであつて、卽ち父に對する愛撫的活動と同じやうな敵愾心と、母に對する愛撫的活動とである。

これ等は我々にとつて厄介なる合併である。我々は單に抑壓から生じた徵候の簡單な例を擧ばうとして、其の目的をもつて小兒の最も早期の且つ明瞭なやうに見えた神經症に向けたのであつた。たつた一個の抑壓の代りに、斯樣な餘計なものを發見し、そして更にこれが退行といふことに關係して來たのである。恐らく我々が混亂に陷つた理由は、この二つの動物恐怖症の勝手な分析――少年ハンス

と狼男——を同一の軌道に置かうとしたからであつた。今こそ此の兩者の或る差異には氣が附く。唯ハンスの場合に於て確實に切言出來ることは、彼の恐怖症によつて、エヂポス・コンプレクスの二つの主要活動、卽ち父に對する虐待性と、母に對する超愛撫性とが作られたといふ事である。父に對する愛撫性も亦確かに存在してゐたのであるが、この愛撫性はその反對のものゝ抑壓の際に演じられた役割であつて、その反對のものは抑壓を招く程十分に强かつた事や且つ又其後に廢棄された事も證明される事である。ハンスは所謂「積極的」エヂポス・コンプレクスを有する常態（ノルマール）の青年であつたやうに思へる。我々が失つた要素が又彼の場合に助力的であつた事は可能であるが、然し我々がその要素を示すことは出來ない。我々が徹底的に分析した材料でさへもこれと同樣に缺點があり我々の理論も不完全である。露西亞人の場合では缺陷は他の部分にある。卽ち彼の女性的對象に對する關係は早期の誘惑によつて妨げられてしまひ、受動的の女性的方面が彼に强く形成された。且つ又彼の狼の夢の分析では父に對して企てた虐待的進擊に就いては僅かよりしか分らないが、その代りに、抑壓は父に對する受動的愛撫的態度に相當してゐるといふ明かなる證據を得るのである。こゝに又他の要素が關與してゐるかも知れぬが、それは現はれてゐない。この二つの例が殆んど正反對に近いほどの差異をもつてゐるに拘らず恐怖症の最後の結果が殆んど同一であつたとするならば、これに對して他の方面

からの說明が必要になる。我々が少しく比較研究した第二の結論に就いて說明しよう。我々は兩例に於て抑壓の動機を認めたと信ずるし、その役目が二人の子供の發達の經過によつて强固になつたことを知つてゐる。これは兩例とも同じもので、卽ち去勢の脅威から生じた杞憂である。去勢杞憂から少年ハンスは父に對する虐待性を放棄した。それ故に馬に咬まれるといふ杞憂は强迫的でなしに完成せられたもので、馬は彼の性器を咬み取つて去勢するだらうといふのである。然し又露西亞少年も去勢杞憂から性的對象として父より愛されたいといふ願望を斷念する。何となれば、斯樣な事は女性との區別點である處の自分の性器の犧牲を、豫期するかもしれぬといふ事を彼は承知してゐたからである。エヂポス・コンプレクスのこの二つの形態、卽ち常態（ノルマール）のものと加動的のものは、同性愛と同樣に實際去勢コンプレクスに出逢つて坐礁するのである。狼に喰はれるといふ露西亞人の杞憂觀念は、去勢の意味がないとは云へず、又口唇期退行によつて遠く男根期から隔たつたものであるとも云へない。彼は夢の分析では去勢の意味が種々な方面から澤山證明されてゐるのである。恐怖症といふ言葉の中には去勢といふ意味を少しも含んでゐないといふ事は、これ又抑壓が完全に成功したと云ふべきである。

此處で今、豫期しない結果に到達した。それは、二つの例に於て、抑壓の動機は去勢杞憂であるこ

と、即ち馬に咬まれ狼に喰はれるといふ杞憂の內容は、父から去勢されるといふ內容の變裝的代償である。抑壓が自身で經驗したところのこの內容は特有のものである。露西亞人では、これは男性たることを拒絶することに從はない願望をあらはし、ハンスでは虐待性を反對に轉向した反應のあらはれである。然し乍ら恐怖症の本質を作り上げてゐる杞憂感情は、抑壓作用から起るのでなく、又抑壓された活動のリビドー的纏綿から起るものでもない。むしろそれは抑壓そのものから起るのである。即ち動物恐怖症の杞憂は變形されなかつた去勢杞憂であり、又現實杞憂即ち實際的に脅威される危險、又は現實として判斷された危險に對する杞憂である。此處に於て杞憂が抑壓を作るのであつて、余が以前に考へた如く、抑壓で恐怖を作るのではないことが云へるのである。

次のことに就いて考ふる事は愉快な事ではないが、然し否定する事は出來ない。それは余が屢々以前に示した事、即ち抑壓によつて本能の代表が歪められ、轉移される事及びそれに似たる即ち本能のリビドーが恐怖に變化する事等のことである。この事柄を證明するに當つて最も適當であるべき處の恐怖症の研究は、この事柄を確實にするに至つてゐないし、恐らくこれには直接に矛盾してゐるやうに見える。動物恐怖症の恐怖は自我の去勢恐怖であり、外出恐怖症（アゴラフオビー）は、根本的には十分研究されてゐないが、發生的に見れば去勢恐怖と關係ある處の誘惑恐怖であるらしい。多くの恐怖症は、現在一

見した處では、リビドーの要求によつて生じたる自我の斯かる杞憂に歸することが出來る。その場合常に自我の杞憂態度は原型的のものであり又抑壓を受くべき動機である。杞憂は決して抑壓されたリビドーから起るものではない。余はもつと早く「抑壓の後には、出現を豫期されるリビドーの代りとして、杞憂のある分量が現はれるものだ」とさう云つて滿足して居つたならば、今日に至つて余は何等撤回するものはなかつたのである。その叙述は正しくあり且つ抑壓された活動の强さと受けた杞憂の强さとの間に確かに主張されたる一致點があるのである。然し乍ら余は單なる叙述より以上のものが與へられたことを信じ、更に、リビドーが直接に杞憂に置換へられるといふ超心理的過程を發見したことを認めるのである。それ故この事は余が今日最早固持することは出來ない。又斯樣な變化が如何にして行はれるかに就いても、余は以前に報告する事は出來なかつたのである。

斯かる變化についての觀念を余は主として何處から作つたか。自我に於ける機制とエスに於ける機制とを區別する事が未だ猶遠かつた時に、折よくも現實神經症の研究から得たのである。ある種の性的行爲、例へば膣外射精 Coitus interruptus. 亢奮禁斷 frustrane Erregung 强迫的回避 erzwungene Abstinenz の如きものは杞憂發作と一般の杞憂胚胎とを起すものであることを知り、更に常に性的亢奮が滿足されない間に禁制され中止され或は除外された時に起るものであることを知つた。性的亢奮

はリビドーの本能活動の表現であるが爲めに、リビドーが斯かる禁制作用によつて杞憂に變化することを想像するのは無理でないやうである。今は斯樣に觀察する事も價値のある事で、卽ち他方では抑壓の敎唆によつてエス機制のリビドーが障碍を起すといふ事は認められるのである。それ故抑壓の際に、本能活動のリビドー纒綿から杞憂が形成されるといふ事は猶常に正しいといひ得るのである。然し乍ら如何にして斯かる結果を他の結果と一緒に考へねばならぬのであるか。卽ち恐怖症の杞憂は自我杞憂であり、自我の中に發生し、抑壓によつて起らずして却つて抑壓を招來するものである等の事と如何なる關係をもつたものか。これは矛盾してゐるものゝやうであつて、簡單には說明できないのである。一個人に於ける杞憂の二つの原因を覓める事は容易に出來難いものである。然し乍ら假定のできることは、自我は障碍された性行爲、中絕された亢奮、又は回避等の狀態に於て危險を探知し、それを杞憂として反應するのである。然しその爲めに何うなるといふ事はないものである。其他、我我が取扱つた恐怖症の分析は訂正を必要としないやうに見える。然し斷言はしない。

第五章

我々は徴候形成と、徴候に對する自我の二次的爭鬪とを研究しようと思つたが、然し恐怖症を選定した事によつて明かに何等の惠まれたる獲得を齎し得なかつたのである。これ等病的亢奮狀態の中で著しく見える不安なるものは、この事情を朦朧にさせる合併症の如き觀を呈してゐる。何等の不安を示さない神經症は多數に存在する。眞正の轉換性ヒステリー(コンフエルジオンス)は不安の介在なくして重き徴候を現はす如き種類のものである。この事實によつて旣に我々は不安と徴候形成との間の關係があまり堅くないことに注意せざるを得なかつた。その他の點では恐怖症は轉換性ヒステリーに接近してゐるが爲めに、余はこれを「不安性(アングスト)ヒステリー」として轉換性ヒステリーと同列におくのが正當であると考へたのだが然し、ある患者が轉換性ヒステリーの型か、或は恐怖症の型かを決定するやうな條件を示して吳れたものは未だ誰もゐない。この樣に、ヒステリーの場合に於ける不安發生の條件を確立したものもない。

轉換性ヒステリーに屢々起る徴候、即ち運動痲痺、拘攣或は不隨意行動或は不隨排泄(エレトラーチウング)苦痛、幻覺は永久に固定したる纏綿機制であるか或は間歇性の纏綿機制であるかは、その說明に當つて新しい困難を感ずるのである。元より斯樣な徴候に就いては多くの事が知られてゐない。障碍された亢奮發現

が、徴候によつて如何やうに置換へられてゐるかは、分析によつて始めて實驗することが出來るのである。多くの場合に徴候それ自身は、この亢奮發現の一部を分擔せるが爲めに、その全エネルギーは恰もこれにその一部を集中せるかの如く見える。苦痛はそこに抑壓が發生したといふ狀態であり、幻覺は、その時の知覺であり、運動痲痺は、ある行動の拒否であつて、それは何時でも爲し得たものが禁制されたものであり、拘攣は、通常その時起つてゐた筋肉への神經支配が他の場所に轉移したものであり、痙攣發作は、自我の統禦が無くなつた時の感情爆發の表現である。不快感覺が徴候を伴つて出現した時には、その不快感覺は極めて多大に變化性を持つものである。恒久的に運動機に轉移した徴候、例へば痲痺又は拘攣の如きものは全く不快感覺を有して居らず、この感覺に對して自我は無關係の如き態度を取るのである。間歇的徴候及び感覺領域の徴候の場合には通常明瞭なる不快感覺が認められ、殊にそれが苦痛徴候の場合にあつては非常な高度に騰まり得るものである。然し乍ら斯くの如き多種多樣なものゝ中から、斯く差異を可能にし且つそれを個々に說明し得べき要素を摘發することとは甚だ困難な事である。又一度形成された徴候に對して自我は如何なる爭鬪を爲すかは、この轉換ヒステリーの場合に於ては餘り注意されてゐない。若し肉體部分の苦痛感が徴候になつた時には、この苦痛感は二た役を演ずる立場に置かれるのである。苦痛徴候は、この部分が外界から接觸される時

には、それは恰もその場所によつて代表された病的狀態を、內部から聯合的に動かされた時の如くに、確實にその徵候を發現するものであつて、且つ自我は外側の知覺をなしたといふ事によつて、徵候の喚起を防ぐといふ防禦策を採るのである。轉換ヒステリーの場合に於て、何によつて不可解なる特殊の徵候が起るかは說明し難いものであるが、然し乍ら我々はこれによつて、成果なき領域を直ちに脫出すべき動機を、與へられてゐるのである。

我々はこゝに徵候構成に就いて多くの經驗が期待されてゐる强迫神經症に、目を向けようと思ふ。强迫神經症の徵候は、一般に云へば二種類に分けられて居り、且つそれ〲が反對の性質をもつてゐる。それは禁斷、防禦策、贖罪等の消極的性質のものか、さもなくば反對に代償滿足で、それは極めて屢々象徵的變裝をもつたものかである。この二團體の中には消極的のもの、拒絕的のもの懲罰的のもの、陳舊的のものがあり、然し疾病の持續と共にあらゆる拒絕を恐れざる滿足が急速に增加して來る。禁斷が滿足と合同することに成功せばそれは徵候構成の勝利である。その結果として根本的に拒絕されたる命令又は禁斷も、亦一つの滿足の意味を持つことになり、それが爲めに屢々技巧的に結合させむとする方法が甚だしく要求されてくるのである。これを爲さむが爲めに自我によつて既に周知である處の綜合の傾向が示される。高級なる例では、患者は彼の徵候の多くのものに、その根本的の意

味に添へて更にその直接反對の意味を持たせる事に成就してゐる。それは雙存性(アンビバレンツ)の力の證據である。その理由は不明であるが、强迫神經症にあつては重大なる役目をもつたものである。低級な例では徴候は二時的に現はれる。即ち一定の命令に從ふ行爲に引續いて、直ぐにそれを拒絶した、若しくは逆にした第二の行爲が現はれて來る。然し第二の行爲とても敢へてその反對を貫徹させようとは强ひないのである。

强迫神經症を外觀的に見るなら、直ちに二つの印象が與へられる。第一は、抑壓されたものに對して持續的の爭鬪が此處に保たれて、その爭鬪は抑壓する力に益々不利になるといふことであり、第二は、自我と超自我とは此の場合徴候構成に當つて特殊の大きな參與をなしてゐるといふ事である。

强迫神經症は確かに分析的研究に當つて興味があり、且つ感謝してよい對象であるが、然し未だ猶ほ問題として征服されてはゐない。このものゝ本質を更に深く考究せむとするならば、我々は確實にされない假說や證明されない想像をいまだ捨て去ることは出來ないと告白せねばならぬ。强迫神經症の發生狀態は、ヒステリーのそれに比して少しも違はず、即ちエヂポス・コンプレクスのリビドー的要求に對しての必要なる防禦である。又何れの强迫神經症の場合でも、その最下層には極めて早期に形成されたヒステリー徴候が認められるやうである。其後には然し乍らより隔つた形態が體質的要素

によつて決定的に變化されるのである。リビドーの性器編成は、薄弱なる且つ抵抗力の僅少なるものとして現はれる。若し自我が防禦作用を始める時には、最初の結果として性器編成（男根期）は全部又は一部が早期の肛門虐待期に投げ返される。斯かる退行の事實は全部次の事で決定されるのである。

これには猶他の可能性が考究され得る。恐らく退行は素質的の結果ではなくて、ある一時的の結果である。この退行はリビドーの性器編成が餘り弱かつたといふ理由では起らなかつたであらう。それはむしろ自我の反抗が餘り早期で、まだ虐待期の開花期中なるに始まつたが故である。余はこの點に就いて確實なる決定を强ひるものではないが、然し分析の觀察にはこの假說は好都合なものではない。これは寧ろ强迫神經症に轉じた際には、既に男根期になつてゐたことを示してゐるのである。又神經症の起る年齡はヒステリーのそれよりも遲い年齡であり（第二小兒期、潜伏期終了後）且つ余が研究し得た處によれば、斯かる感情の發生が特別に遲い例に於ては、今迄害されなかつた性器生活が、その時になつて實際的に價値低下したといふ事が、退行と强迫神經症の發生との條件を作るに至つたといふ事が明瞭に示されてゐる。（二）

註（一）「强迫神經症の素質」參照、全集五卷。

余は退行の超心理學的解釋を「本能の分解」即ち性感要素を區分することによつて研究した。その要

素には性器期の發端と共に虐待期の破壊的纏綿が附加されてゐたのである。

退行の强要は、リビドーの要求に對しての防禦爭鬪に當つて、自我の最初の成果を意味してゐるのである。我々はこゝで合目的に『防禦』の一般的性質を『抑壓』とは區別してゐる。抑壓とは單に防禦作用が利用してゐる機制(メカニズム)の一つに過ぎない。强迫神經症の場合には、常態の場合やヒステリーの場合よりも恐らくは一層明瞭に、去勢コンプレクスの防禦として、卽ちエヂポス・コンプレクスの遂行の防禦されたものとして認められてゐる。我々は今、潜伏期の發端に立つてゐる。それはエヂポス・コンプレクスの消退、自我の中に於ける超自我の創造或は固定、及び倫理的且つ美學的境界の建設等によつて認められてゐる時期である。これらの機制は强迫神經症には通常の程度を超えて現はれる。卽ちエヂポス・コンプレクスの破壊に向つてリビドーの退行の低下が伴はれ、超自我は特に嚴格になり無情になり、自我は超自我に對して從順になり良心同情正直等の高度の反應構成を發達させる。幼兒が手淫を持續したいといふ願望は、峻嚴に拒絕されるが、然しこれは峻嚴だからとて常に効果的ではない。この手淫は退行的(肛門虐待期)の觀念に依憑してゐるが、然し男根期編成の屈服させ難い部分を代表してゐるものである。男性保持(去勢杞憂)の興味の中に、この男性たる各活動が妨げられるといふのは、內部的反對が其の中に存在してゐるのである。この內部的反對も亦强迫神經症では單に誇張

されたもので、既にそれはエヂポス・コンプレクス除去の常態の種類に密着してゐるのである。多くの過剩は、その自己廢棄の萠芽を自身の中に持つてゐる如く、强迫神經症に於ても亦、正面から抑壓された手淫は、强迫行爲の形式を採つて、その滿足へ向つて常に近寄らむと努めることは確かである。

我々が正常の性格形成の誇張されたものとして認めてゐる强迫神經症に於ては、その自我の反應構成を、退行及抑壓以外の新らしき防禦機制として見做す事が出來る。これらはヒステリーに於ては缺けてゐるか或は非常に弱度に現はれてゐるやうである。考究的に見れば、ヒステリーの防禦機制の據つて現はるゝ處の假定を考へることが出來る。それは自身を抑壓によつて制肘する如く見えるのであるが、その實は自我は不快なる本能活動より轉向し、彼等を無意識の經過に委ね、而して彼等の運命に何等關與せざるに至るのである。これは全く正當ではない。何となれば、我々は確かに次の如き例を知つてゐる。卽ちヒステリー徵候は同時に超自我の罰の要求を滿たすことを意味してゐる。とは云ふものゝ然しヒステリーに於ける自我の關係では、これは一般的の性質であると記述することが出來得るのである。

强迫神經症の場合には極めて峻嚴なる超自我が形成されることは簡單に事實として承認され得る。

或は斯かる感情の根本的性質はリビドーの退行であると考へる事が出來、且つ超自我の特質をこれと結合すべく試みることも出來るのである。エスから出來た超自我は、通常そこに生じた退行と本能の分解とを免かれ得ないのである。それ故それは正常の發達の場合よりも、より頑固により面倒により無情にならうとも、それは不思議ではないらしい。

潜伏期の間は、手淫意圖の防禦が主要問題として取扱はれてゐるやうである。この爭鬪は種々の徴候を生じ、その徴候は種々の人物にも典型的方法をもつて反復され且つ一般に儀式的特質をもつたものである。これが未だ猶綜合的に且つ系統的に分析されずにあることは甚だ遺憾である。これは神經症の最初の行爲として、此處に應用された徴候形成の機制に就いて、最初の光明を廣げるであらう。これは既に將來に於て重大なる疾患を惹起せしむるに重大關係をもつた性質を示してゐる。即ち將來自動的に實行さるべき行爲への橋渡しで例へば就寢には洗滌及着衣、運動には反復及び時間空費の傾向が生ずる。何故に斯く成るかは未だ全然判明してゐない。然し肛門愛の要素の醇化作用がこの際に明かな役目を演じてゐるのである。

思春期は强迫神經症の發達に於て決定的な時代を作つてゐる。小兒時代に於て破壞された性器編成は、今や强大なる力をもつて復活してくる。然し小兒時代に發達した性慾は思春期時代の新開始に向

つてある方針を與へることを我々は知つてゐる。かくして一面に於ては早期の進擊的活動が再び喚起され、他面に於ては新しきリビドー活動の多少大なる部分は——不良なる場合にはその全部は——退行によつて示された道筋を選び、そして進擊的及び破壞的目的として現はれねばならなくなる。性感的傾向のかくの如き變裝と且つ自我に於ける强度の反應構成の結果、今や性に對する爭鬪が道德の旗印の下に繼續される。自我は驚愕してエスから意識に送られた處の殘酷なる亂暴なる要求に對して反抗する。然し其際に性的願望、殊に嘗て彼の抗議に反對したやうなものに對して爭鬪しようとは考へてゐない。過度に峻嚴なる超自我は、益々赤裸々の形を示す性慾に對しては益々强力に抑壓を加へる。かくの如くにして强迫神經症に於ける葛藤は二方向に限局されて現はれ、防禦するものは、より頑迷になり、防禦されるものは忍耐し得ざるに至る。この兩者は一つの要素たるリビドー退行の影響によつたものである。

我々の多くの假說に對する矛盾は、不快なる强迫觀念は結局意譯されるといふ論の中から發生してゐた。然し乍ら强迫觀念は既に抑壓の過程を完成したものだといふ事は疑ひのない事である。多くの場合、進擊的本能の本來の意味は結局知られてゐないものである。それを意識させることは分析の仕事として好き題目である。何者によらず意識に上つてくるものは、通常は單に漠然たる夢の如き不確

實なもので、歪められたる代償物か、さもなくば荒唐無稽な變裝で不明にされたものである。抑壓によつて進擊的本能の內容が侵蝕されなかつた時でも、確かにそれを伴つた感情特質は取去られてしまふのである。かくのごとくその進擊は自我に對しては衝動(インプルス)としては現はれずして、むしろ患者の稱するごとく、冷淡に感ぜしむる處の單なる「思考の內容」として現はるゝものである。然しながら斯樣な風でない場合もあることは注意すべきである。

强迫觀念の認知の際に創られた感情は、直ちに他の場所に於て現はれてくる。超自我はこれに對して恰も何等の抑壓も加へなかつたかの如く振舞ひ、その進擊的活動を正しい音調と十分なる感情特質とをもつたものとして周知のものゝ如き態度を採り、而してこの假想を基礎として自我を取扱つてゆくのである。自我は一方に於て無罪だと知りつゝも他方では罪惡感を認めて、自身で說明できぬ處の解答をせねばならなくなる。こゝに於て我々に提供された謎は、最初見たよりも餘り大きいものではない。超自我の關係が全く了解され、又自我に於ける矛盾も次のやうに明かになつた。それは超自我から來る影響を完全に享け入れてゐるにも拘らず、エスに對しては抑壓を藉りて相手にしないのである。(一)　自我は何故に超自我の苦痛なる非難から逃れむとしないかと云ふ進んだ問題は、これは事實上多くの場合に現はれるといふことの報告によつて片づけられる。又全然、罪惡感を有しない强迫神

經症もある。これは我々の知れる範圍では、自我は自ら罪惡感の知覺を、新しい徵候卽ち贖罪行爲や自己懲罰の制肘によつて感ぜずに濟ますからである。然し乍ら斯かる徵候は同時に、退行によつて強められる處の被虐待性の本能を滿足させた事を意味してゐる。

註（一）Reik, Geständniszwang und Strafbedürfnis, 1925. S. 51. 參照。

強迫神經症の現象は多種多樣であつて、その異れるあらゆるものを綜合せむとして如何なる努力を拂つても猶出來難い程である。故に吾人はこれに典型的關係を抽出すべく努力し、且つ同時に重大なる規律を發見すべく常に考究してゐるのである。

強迫神經症に於ける徵候形成の一般的傾向は旣に叙べた。それは拒絕を犧牲として代償滿足に益々多くの餘地を作ることである。斯かる徵候は自我を根本的に制肘することであつて、自我のもつ綜合せむとする傾向の力により、將來も又滿足の代償を受納するのである。然しこの後者の意義が漸次効果を示すことは誤りない事である。極度に制肘を受けたる自我が、徵候によつて滿足を求めむとしてそれを目標とするに至つたのは、最初の防禦作用の完全なる失策に自ら益々強く接近せむとする過程の結果となるのである。滿足を得むとして力の釣合を轉移せしむることは、自我の意志を痲痺せしむべき怖るべき終末に導くものである。これはすべての判定に對して、恰も同じやうな強い一方からの

刺戟を、他の側からの刺戟の如く見做すのである。最初より感情を支配せるエスと超自我との鋭い葛藤は、それが益々擴大された結果、この葛藤に於ける關係を調停し得ざる自我の機能の一つからも遁れることが出來なくなつたのである。

第六章

吾人はこの葛藤中に、自我の二つの徴候形成の仕事を觀察することが出來る。この仕事は、明かに抑壓の代償であり且つそれ故にその傾向と技巧とを立派に說明する事が出來る爲めに、特殊の興味を齎すものである。この代償と助力との技巧の作られたる事は、規則正しき抑壓の完成が容易でないといふ證據の說明になるのである。强迫神經症の際には、自我は、ヒステリーの場合よりも多く徴候形成に參與し、且つ自我が强く現實と意識との關係に固着して、これによつて總ての自己の智的手段を布告するのである。實にこの思考力が一轉して性的に現はれることを知るならば、斯かる抑壓の變化といふ事が吾人に恐らくより明瞭になるのである。

この二つの意味深き仕組みは『抹殺』と『孤立』とである。前者は大なる適用範圍を有し且つ遠く昔に戻るものである。所謂消極性の力であつて、事件の結果(印象、經驗)を抹殺せんとするのでなくて、運動機の象徴によつて反對に『事件そのものを抹殺』せんと欲するのである。この後者の表現を選出したが爲めに、この仕組みの如何なる役割が、神經症のみならず、更に魔術療法、民族的習慣及び宗教的儀禮に於て演ぜらるゝかを說明し得るのである。この抹殺はまづ强迫神經症の二時的徴候の場

合に現はれてくる。即ち第二の行爲は、第一の行爲を抹殺して何事も起らなかつたかの如く爲してゐるが、兩者とも事實として起つたものである。强迫神經症的の儀禮は廢棄の目的にその第二の根據を持つてゐる。第一は保護とか防禦とかいふものであつて、これによつて或る出來ごとの出現を防ぎ、且つ反復しないやうに努める。この兩者の區別は容易に諒解される。即ち防禦策は合理的なものであり、抹殺による『廢棄(アウフヘーブング)』は不合理的であり魔術的である。勿論想像されねばならぬ事は、斯かる第二の根柢の起原は、古代のアニミストの態度から發してゐるといふことである。それが正常の場合に反映したとすれば何うかと云ふに、それは抹殺作用を non arrivé (譯者曰「何事も起らなかつた」の意)として取扱はうとするのである。だが、これに對しては事件にも結果にも何等憂慮しようとは企てないのである。これが神經症の場合でみると、過去そのものも否定して、運動性に抑壓を加へむと企てゐるものである。斯かる傾向は神經症に屢々現はるゝ處の反復强迫を說明し得るものである。この場合には多くの相容れざる意圖が集合してゐる。斯かる抹殺方法によらなかつたものは、願望によつて生じたかの如くに、反復といふ方法によつて抹殺されるのであつて、それが爲めに、總ての動力はこの反復に據らうとして進んでゆくのである。神經症の其の後の經過としては、外傷の經驗を抹殺せんとする傾向が、初期の徵候形成として現はれる。吾人は或る新たな運動性の防禦的技巧に對して全く豫

期しない印象を與へられるのである。更に抑壓に對しても先づ同様のことが云へるのである。

新たに述べた仕組みの他の一つは、强迫神經症に特有なる『孤立』といふことである。これは同じく運動領域に關係してゐて、次のやうである。卽ち不快な事件のあつた後とか、又同様に神經症として意味ある特有の行動をした後に、最早何等の出來事も起り得ず知覺もされず動作もされないといふ或る休止期間が挿入されるといふことである。最も特殊なる此の狀態は、我々に直ちに抑壓に於ける關係を明かにして吳れる。それはヒステリーに於て見らるゝもので、外傷的の印象を健忘に陷入らしめることが出來るのである。强迫神經症に於てはこれは不可能であつて、經驗は忘却されない。然しその經驗は感情を拔取られ、その聯絡狀態は抑壓され或は中斷され、その結果その經驗は孤立した如くに殘されて、思考の經過中にも再生されて來ないのである。この孤立が齎す效果は、抑壓によつて健忘を惹起せしむるのと同様である。この仕組みは斯くの如くに强迫神經症の孤立に於て再生されるが、同時に魔術的の目的に於ても亦運動性に强められるのである。斯く區別されたるものは恰も聯合の一部をなしてゐるもので、運動性の孤立は思考の聯絡關係が中斷されたといふ保證を與へたものである。正常の集中作用は、神經症のこの仕事に向つて、一つの口實を與へてゐる。我々に對して有意味の印象として又問題として現はれるものは、他の思考や行動の要求が同時的に來ても障碍されるも

のではない。然し既に正常の場合には集中作用は、無關係のもの又はその附屬物のみならず、却つてあらゆる不適當なる反對物から遠ざかる事に應用されるのである。最も障害されたものとして感ぜらるゝものは、最初は一緒であつたものが發達の進歩によつて分離されたものである。例へば神に對する關係に於ての父コムプレクスの雙存性(アンビバレント)の發現であり、若しくは愛情亢奮に於ける排泄器官の亢奮である。故に自我は思考過程の支配する場合には正常的に大なる孤立營爲を爲さねばならぬのである。且つ我々は分析の施行中に、全く準備されたこの作用を、一時放棄させるやうに自我を敎育せねばならぬのである。

我々は種々なる經驗を爲した。その結果、强迫神經症者に對しては精神分析的の根本法則に從つてやることは特別に困難なることを知つた。恐らく彼の超自我とエスとの爭鬪の高度の緊張の結果として、彼の自我は一層警戒的になり、その孤立は一層尖銳となるのである。自我は思考作用中に於て、無意識の空想(ファンタジー)の干涉や雙存性(アンビバレント)傾向の發現を十分防禦せねばならない。それは放任されない事で、爭鬪準備に前進させる。然してこの集中作用と孤立作用への强請を、魔術的孤立作用によつて防ぐのである。この魔術的孤立作用は徴候として頗る奇拔であり臨床的であり、頗る有意義であつて、自身には勿論不必要であつて然かも儀禮の性質を有するものである。

然し聯想即ち思考の結合を障碍せんと試みる間に、強迫神經症の最古の且つ根原的の禁斷、即『接觸のタブー』(譯者曰、觸れることの忌み)が生ずる。若し人が、何故に神經症に於ては接觸、結合、傳染を忌避することが頗る重要な役目であるか、又何故に內容中に頗る複雜なる徵候が作らるゝかと質問するならば、斯う答へられるであらう。接觸、肉體的結合のその第一の目的は進擊的及び愛撫的の對象纏綿であると。エロスは接觸を要求する。何となれば彼は自我と愛人との空間を取去ること、即ち合體せんことに努力してゐるからである。然し乍ら飛び道具の發見以前に、近く於てなし得た破壞作用は、これも亦肉體的、接觸捕獲を想像せねばならぬものである。Eine Frau berühren (婦人に接觸する)といふ事は、用語上では性的對象として婦人と關係する意味の婉曲な詞となつてゐる。Das Glied nicht berühren (肢體に觸れない)とは自瀆禁斷の語調である。強迫神經症は初めは性感的の接觸、次で退行後には進擊の假面をかぶつた接觸を要求するが故に、これに對しては他に何物をも高度に禁斷されないし、且つ禁斷されるやうな焦點となるやうな何物も持たなかつたのである。然し乍ら孤立は、接觸能力の放棄、即ち各接觸物を引離す方法であり、又たとへ神經症者が休止期間によつて印象や行動を孤立させたとしても、彼がそれらの思考と他のものとの聯絡的接觸を欲せざる事を我々に象徵的に理解させるのである。

徴候形成に關する我々の研究は、かくまで進んで來た。然しこの研究を總括することは無益の事であつて、これは獲る處僅少で且つ不完全であり、既に以前から知られてゐなかつたやうな事は又餘り獲られなかつた。恐怖症、轉換ヒステリー及强迫神經症以外の他の感情の徴候形成を觀察する事は見込のないことかも知れぬ。それに就いては殆んど知られてゐない。然し乍らこの三つの神經症を總括して研究するならば、既に最も緊要なる且つ瞬時も看過し得ざる問題が擡頭して來る。この三例に對してはエヂポス・コンプレクスの破壞はその出發點であり、總ての場合に於ては去勢杞憂は自我反抗の動因であると我々は想像するのである。然し乍ら恐怖症に於てのみ斯かる杞憂は出現して且つそれは代理されるのである。他の二つの形式の場合は如何であるか、自我は如何にして斯かる杞憂を省略させるか。この問題は、若し我々が以前報告した次の如き可能性を考へるなら益々尖鋭になつてくるのである。即ち杞憂はある醱酵の方法によつて、經過中に障碍されたリビドー纒綿自身から起ること更に續いて去勢杞憂は果して抑壓(或は防禦)の唯一の動機であるか否かといふことを考へるならばである。然しながら若し婦人の神經症に就て考へる時には、これは疑問とせざるを得ぬのである。何となれば、極めて確實に彼女等の場合の去勢コンプレクスは自身に證明されて居り、正しい意味に於ける去勢杞憂に就ては、既に完全に去勢された場合には論ずることが出來ぬからである。

第七章

小兒の動物恐怖症を顧るならば、これらの例は他の總ての例よりも一層よく諒解できる。自我は又此處に於てもエスのリビドー對象纒綿(積極性或は消極性エヂポス・コンプレクス)に對して干渉せねばならないのである。何となれば、それによつては去勢の危險を招來することを知つてゐるからである。吾人は旣にこれを研究して、この最初の論に殘つてゐた疑惑を明かにする原因を發見してゐる。ハンス少年の場合(積極性エヂポス・コンプレクスの場合)には、母への愛撫的活動、或は父への進擊的活動は自我の防禦作用によつて生じたと假定せねばならぬであらうか。これは實際的には無關係に見える　殊にこの二つの活動は互に理由をもつたものだからである。然し理論的の興味はこの問題に結びついてゐる。何となれば母への愛撫の流れが純なる性感的なものになり得るからである。進擊的活動は本來破壞本能に關係をもつたものであり、神經症の場合に於ては自我はリビドー要求に對しては防禦し、他の本能に對しては防禦しないことを常に吾人は信じてゐる。通常、恐怖症が構成された後は、母との愛撫的結合が消失したかの觀を吾人は見るのである。これは抑壓によつて根本的に押込まれたもので、その進擊的活動には然し乍ら徵候(代償)形成が行はれたものである。狼男の場合では

それが一層簡單にわかり、抑壓された活動は眞に性感的で、父への女性的態度であり、これへも亦徴候形成が行はれる。

斯く永々しき研究にも拘らず、根本的關係を解釋するにいまだ猶困難を感ずることは恥辱の至りである。然し吾人は何事をも簡略にし、又何事をも隱匿することを欲しないのである。尠くとも不明瞭なるものは鋭くこれを觀察せねばならぬ。此處に於て障碍となつてゐるものは、明かに吾人の本能學の發達が不平坦なることである。吾人は先づ口唇期より肛門虐待期を超えて性器期までのリビドー編成を探求したのであつた。且つ其際性本能の全要素を悉く同列に置いて取扱つたのであつた。其後に至り虐待性がエロスとは反對の他の本能の代理として現はれたのである。この二本能圜に就いての新らしき解釋は、リビドー編成の繼承時期に出來た早期組成を粉碎するやうに思はれる。然し乍ら吾人は斯かる難事の中より助力に富んだ教示を新たに發見する必要はない。それは久しい間吾人の研究に供されてをり、且つ次の事を明かにしてゐる。即ち吾人は常にそれを純なる本能活動とは殆んど關係せしめず、却つて全く種々なる量的關係に於ける兩本能の支配に關係させてゐることを明かにしてゐる。故に虐待性對象纒綿は亦リビドー性對象纒綿として取扱はれる權利を有して居り、リビドーの編成は檢査を受くる必要ないのであり、父への進擊的活動は同一權利をもつて母への愛撫的活動の如く

抑壓の對象となり得るのである。常に吾人は後の研究の材料中には次に述べるものゝ可能性を加へてゐないのである。卽ち抑壓は、リビドーの性器編成に對して特殊の關係をもつた過程であること、及び自我は、他の編成階梯に於てリビドーを防ぐ必要のある場合には、自我は他の方法をもつて防禦するといふことは、材料に入れてゐないのである。斯くして吾人は論を進めよう。少年ハンスの如き場合は、何等の判定を要さない。卽ち其處には進擊的活動が抑壓によつて完成されたとは云へ、然し其時には旣に性器編成は成就されてゐたのである。

次ぎに吾人は杞憂に對する關係を觀察したい。自我が去勢の危險を認めた時には杞憂信號を與へて快不快原則を以つて一層簡單な方法によつて、エスに於ける强迫的纏綿作用を禁斷することは旣に述べた。同時に恐怖症の形成が成就する。去勢杞憂は他の對象及び歪められた表現物を採る。卽ち父から去勢される代りに馬から嚙まれる(狼から喰はれる)のである。この代償形成には一つの明らかな利益がある。第一、代償形成はアンビバレント葛鬪を避けることであつて、これは同時に父が愛の對象だからである。第二、代償形成は自我に對して杞憂發生を止めようとすることを許容するのである。恐怖症の杞憂は隨意的に、杞憂の對象が知覺の實體となつた時にのみ起る。このことは全く正確であつて、單に危險の場面が出現したことなのである。不在の父から去勢されることは恐れる必要はな

い。父を除去する事は出來ない。出ようと思へばいつでも父は出て來る。處が若し父が動物に代つたとしたならば、その動物に對する危險や杞憂から遁れようとしてある計畫卽ちその動物の實在を避けようとする計畫を作り出す。それ故に少年ハンスは自分の自我に制限を加へ、馬と出逢はない爲めに外出せぬといふ禁制が生じたのである。露西亞少年は更に都合よく行はれて、彼は最早ある種の繪本を手にするなどといふ事は、彼に取つては殆んど出來ない事であつた。狼が前脚を上げて立つてゐるその本の繪を、惡い妹が又々眼の前に持ち出しでもしない限りは、彼は常に自分の杞憂に對して安心してゐることが出來た。

余は嘗て恐怖症に投出作用の性質を負はせたことがあつたが、それは內部の本能の危險を外部の知覺の危險に置換へたものである。この事は、內部の危險に對しては遁げる事は出來ないが、外部の危險に對しては、遁げたり知覺を避けたりして自身を防衞し得るといふ利益を齎すのである。余のこの考へは不當ではないが、然し淺薄である。本能の要求は確かに自身に取つては危險ではないが、正しい外部の危險、卽ち去勢といふものを伴つて來るが爲めに、それだけが危險である。故に根本的には恐怖症の場合には外部の危險は他のものによつて置換はつてゐるのである。自我が・恐怖症の際には忌避によつて或は禁制徴候によつて杞憂から遁れ得るといふ事は、この杞憂が單に感情の信號であら

つといふ解釋、及び經濟的の立場に何等變化されなかつたと云ふ解釋に、極めてよく合致するのである。

動物恐怖症の杞憂は、又危險に對して自我が感情の反應を起した事である。こゝで信號される危險は去勢の危險である。自我が危險の場合に正常に示す處の現實の杞憂と、其の他の杞憂との區別は、杞憂の內容が無意識に殘留し、それがたゞ變裝に於て意識される事以外には何等區別される處はないのである。

斯樣な解釋は、思ふに、成人の恐怖症に就いても亦價値をもつてゐる。たとへ、それには神經症を起さする材料が頗る豐富であり、且つ徵候形成に對して二三の因子が附加すると雖もそれは介はぬのである。根本的にそれは同一のことである。外出恐怖症（アゴラフオビー）は、本能の危險から遁れる爲めに自我に對して或る制限を加へてゐるものである。本能の危險は、性的快感を追求する誘惑であつて、それによつて再び小兒時代に於ける如く、去勢の危險或はこれに類似したものが喚起さるのであらう。余はその例として或る青年の外出恐怖症を擧げる。これは賣春婦の誘惑を追求し、且つその懲罰としての梅毒感染を怖れて、外出恐怖症になつたものである。

多くの例は複雜な構成を示して居り、又多くの他の抑壓された本能活動は恐怖症の中に合流され得

るといふことを余はよく知つてゐる。然し是等のものは只だ援助的であつて、且つ大部分は補充的に神經症の中核と結合してゐるといふことをよく知つてゐる。外出恐怖症の徴候が複雜になつてゐる理由は、自我が何事かを放棄したといふだけでは滿足しないからである。自我は更に現場からその危險を除去せんとして何事かを附加へて爲さうとしてゐるのである。この仕事の取合せは、通常一時的に小兒時代への退行であつて（極端な場合では母胎まで、現在の脅威的危險に對して保護されてゐたといふ時代まで）、且つ放棄が止み得るといふ條件として現はれたものである。故に外出恐怖症者は小兒の如く彼の信賴してゐる人と一緒ならば外出し得るのである。又、自分の家から或程度まで遠くない處ならば、そして自分の知らない處でもなく、知人も居ない處でないならば、前述の如き考へで外出が出來るかも知れない。こんな規定を選ぶといふ譯は、神經症に依つて支配してゐる小兒時代の原因が影響してゐる。またそれと全く同意味で、斯やうな小兒期退行ではなしに、根本的に祕かなる手淫の誘惑を避けむと欲する孤獨の恐怖症がある。小兒期退行の條件は無論小兒期より一時的に離れることである。

恐怖症は通常、一定の條件の下に——街上で、鐵道で、孤獨で——最初の杞憂發作の經驗を受けた後に生ずる。その杞憂は拘束されてゐるが、防禦の條件が保たれなくなる時には何時でも再生する。

恐怖症の機制（メカニズム）は防禦手段として好く役立つもので、安定（スタビリテート）といふ事に偉大な作用をあらはす。現に徴候に對して向けられてゐる防禦爭鬪の持續は必要ではないが屢々生ずるものである。

吾人が恐怖症の杞憂に就いて經驗した事は、更に强迫神經症に對しても當嵌める事が出來る。强迫神經症の狀況を恐怖症のそれに還元する事は困難なことではない。將來起るべき總ての徴候形式の動機は、此處で明かに超自我に對する自我の杞憂である。超自我の敵愾心は、自我が避けねばならぬ危險狀態である。此處に於て、外側には何處にも投出作用が無くなり、危險は完全に强まるのである。然し乍ら若し我々は超自我の側に對して自我の怖るゝものは何であるかと考へる時に、超自我の懲罰は去勢懲罰の完成であるといふ解釋を餘儀なくされるのである。超自我は非人間になつた父である如く、父から脅威された去勢の杞憂は自ら不明なる社會的杞憂に或は良心の杞憂に變化して行つたのである。然しこの杞憂は隱蔽され、自我はこれに遠ざかり、これと同時に自我は課せられたる禁斷、防衛及び贖罪行爲を從順に行ふのである。これについて自我が防害を受けた時には、直ちに著しき苦痛なる不愉快が生ずる。その不愉快を我々は杞憂と同價値のものと認め、患者自身はそれを杞憂と對立させてゐるのである。余の經驗によれば次のことが云へる。杞憂は危險狀態に對する反應であり、これによつて自我が危險を避け、これより遠ざからむとして爲す仕事を省略することが出來るのである

と。徵候は杞憂發生を避けむが爲めに作られるものであると、此際人々は云ふかも知れぬが、然しこれは深く考へたことではない。杞憂發生を信號する處の危險狀態を避けるが爲めに、徵候は作られるのであると云ふ事は、より正しい云ひ方である。この危險は然し從來觀察された例に於て去勢か或は何かその生產物である。

杞憂は危險に對する自我の反應であるとすれば、今後生命上の危險を屢々伴ふところの外傷性神經症は、去勢と自我の依賴とを放棄したる生命の杞憂、若しくは死の杞憂の直接結果であるとして解釋しても左程の違ひはないのである。これは歐洲大戰の外傷性神經症の例でも亦數多觀察せられ、且つ凱旋的に報告された。そして、自己保存本能の危險は、性感の種々なる參與なしに、又精神分析の複雜なる假定を考慮せずに、神經症を惹起し得るといふ證據が提出されたやうである。然しそれには外傷性神經症の價値ある分析が一つもない事は實に非常なる遺憾である。この事は性感の原因的意義に對する矛盾の爲ではないのである。何故なればこれは以前からナルシスムスの移入によつて廢棄されたのである。そのナルシスムスは自我のリビドー纏綿を、對象纏綿をもつたある種類に移し、且つ自己保存本能のリビドー的性質を强調してゐるのである。それ故にこれはむしろこれに對する分析の不足だつたが爲めに、杞憂と徵候形成との間の關係に就いての決定的判斷を下すに當つて貴重なる機會

を逸した爲である。我々が日常生活の簡易なる神經症の構造に就いて知つてゐる種々なる事に就いて考へても、精神裝置の深き無意識の層の參與なしに、單に危險の客觀的事實のみによつて、あらはれうることは有り得ぬことである。然し無意識に於ては生命喪失といふ我々の概念の中に、何等の內容を與ふるものは持たなかつたのである。去勢は云はゞ日常經驗する腸內容と別離するといふ事で示され、又乳離れの折に經驗した、母體の胸を褫奪される事によつて示されるのであるが、死に類似した物は決して經驗された事もなく、或は氣絕の如きものも何等證明すべき痕跡すら殘してゐないのである。それ故に余は、死の杞憂は去勢杞憂の類推物として解すべき假定を固持するのである。又自我が反應してゐる狀態は、超自我の保護から見捨てられてゐること――運命力――であり、それによつて總ての危險に對する安全が悉無になつたといふ假定も固持するのである。其他外傷神經症に導く經驗の際に、外部の刺戟防備が破壞され且つ過大なる亢奮が精神裝置に起り、その結果、こゝに二つの可能性、卽ち杞憂はたゞ感情として信號されるのみでなきこと及びそれに反して經濟的條件からも亦新らしくなされるといふことが觀察されるのである。

この最後の注意、卽ち自我は規則正しく反復される對象喪失によつて、去勢の準備が爲されてゐるのではないかといふ注意によつて我々は恐怖の新しい解釋を得た。吾人が今までこれを危險の感情信

號として觀察して來たとすれば、これは去勢の危險に關したことである故に、此處では喪失とか別離の反應として我々には思はれるのである。この結論に對しては亦直ちに種々の論が起り得るかも知らないが、さうなると我々は實に或るいみじき說明に驚かされるのである。人間の最初の杞憂經驗は出產であつて、これは客觀的に母から別離することを意味して居り、母を去勢すること（男兒＝小兒といふ式によつて）に比較されるのである。若し杞憂が別離の象徵として其後の種々なる別離の際に繰返されるやうであるならば、それは極めて滿足に値するかも知れぬ。が然し、悲しいかなこの事を說明に利用するには妨害がある。それは出產は主觀的に見れば母との別離としては經驗されないからである。何となれば、母は完全なるナルチス的胎兒にとつては對象として全く知られてゐないからである。他の考究によると我々には別離に就いての感情反應は知られて居ると云はれて居る。更に我々はそれを苦痛や悲哀として感じて杞憂としては感じないと云はれてゐる。確かに我々は悲哀を論ずる場合に、何故に別離が斯く苦痛であるかを、亦理解できなかつた事を思ひ出すのである。

第八章

回想すべき時が來た。我々は杞憂の本質を究めむる見解を探求し、又これに關する眞理を誤謬より區別する處の甲か——或は乙を明かに探求してゐるのである。然しこれは困難であつて、杞憂は簡單には說明されないのである。これまでは、それ等の間には偏見なしには何等の撰擇もなし能はなかつたといふ矛盾があるばかりで、他に何も得るものはなかつたのである。余は今これを變更して提言したい。卽ち吾人は杞憂に就いて論じられてゐるあらゆるものを公平に蒐集しようと思ふ。又それに當つて輕々しく綜合を試みるが如き期待は放棄しようと思ふ。

杞憂は先づ第一に何か感じられたものである。吾人はそれを感情狀態（アフエクト）と云ふ、然し感情（アフエクト）とは何であるかは認知しないのである。杞憂は感覺として不快性質を持つてゐるが、然し感情は杞憂の性質を作らない。故に吾人は如何なる不快をも杞憂と名づけることは出來ない。それには不快性質（緊張・苦痛、悲哀）をもつ感覺は他に存するのであつて、而して杞憂はかゝる不快性質以外に他の特殊のものを持つてゐなくてはならないのである。そこで一つの問題が生ずる。斯かる種々なる不快感情の間の差別を吾人は理解することが出來るであらうかといふ事である。

杞憂の感覺中から吾人は常に何物かを抽出することが出來る。杞憂の不快性質は特殊の記號を持つてゐるやうに見える。これは證明することは困難であるが事實らしい。また何も驚くには當らぬ事かもしれぬ。然しこのむづかしい飛放れた特質の外に、吾人は杞憂に對して一定の肉體的の興奮を受ける。これは一定の器官に關係するものである。然しこゝでは杞憂についての生理學を述ぶる事は吾人に興味がない故、たゞそれらの感覺の各代表を、即ち呼吸器及心臟に於て最も屢々起り且つ最も著明なるものを引用すれば十分である。これに就ては運動性の神經感應即ち傳達作用が杞憂の全體に關與してゐることの證明である。杞憂狀態を分析すれば次の如くである。第一に特殊の不快性質、第二に傳達作用、第三にその知覺。

第二第三は直ちに同じ樣な狀態に對して、例へば悲哀と苦痛に對して或る差別を與へて與れる。これらの場合には運動性の表現は伴はない。が、もしそれが存在する場合には、それは明かに全體の成分としては區別されないで、むしろ結果若しくは反應として區別される。それ故杞憂は一定の軌道の上の傳達作用をもつた特殊の不快狀態である。吾人の一般的見解によれば、杞憂はその根本に亢奮の增加があつて、その一方は不快性質を作り、他方は謂ふ處の傳達によつて緩和されると信ずるのである。然しこれを純粹に生理的に統括することはまだ十分滿足には爲されてゐない。故に、そこには病

歷的要素があつて、それが杞憂の感動と神經感應とを相互に固く結合させてゐることを假定しようと試みたのである。換言すれば杞憂狀態は或る經驗の再生であり、然かもその經驗は、斯かる刺戟增加と一定の軌道の上の傳道との條件を含んだものであり、それによつて杞憂の不快は特殊の性質をも得るといへるのである。斯樣なものゝ初型的の經驗として出產といふ事が人間には存在する。これによつて我々は杞憂狀態に於て出產外傷の再生を見ることを肯定するのである。

杞憂に對して感情狀態の例外の場合が認容されるといふ事は我々は少しも主張してゐない。我々の考ふる處では、他の感情も亦古き、生活に必須なる、時には個人以前の經驗の再生したものであり、而して吾人はこれを一般の典型的の生來のヒステリー性の發作として、將來の且つ個人の後天的のヒステリー發作の襲來と比較する。このヒステリー發作の本體と意味とは分析によつて記憶のシンボルとして闡明されたものである。勿論この解釋を他の種類の感情に就いて證明することは極めて望ましいことであるが、今日では猶不可能のことである。

杞憂といふものが出產狀況に遡つて考へられる事は、異論の襲來に對して好個の辯明となつた。杞憂は恐らく總ての有機物には蓋然的に、總てのより高等な動物にはあらゆる場合に現はれる反應であつて、出產はたゞ哺乳動物にのみ經驗されるものである。然し出產は總てこれらのものに對して外傷

の意味を持つや否やは疑問である。從つて出產原型のない杞憂が存在する。然しこの論は生物學と心理學との間の限界を超えた處には存在する。實に、杞憂は、危險狀態の反應として、生物學的に必須なる機能を滿たすものなるが故に、種々な方法によつて種々なる生物に使用される。然し杞憂は、人間より緣遠い生物に於ても人間と同樣に、感動と傳達にその內容を有するや否やは、吾人はそれは知らぬことである。だが、人間に於ては杞憂が出產過程を原型として採るといふことは異論のないことである。

斯くのごとき事によつて杞憂が組立てられ且つ完成するとすれば、次に來る問題は、杞憂の機能は何か、如何なる機會にそれが再生されるかといふ事である。解答は燦として明白であり且つ痛切である。杞憂は危險の狀態への反應として生ずるもので、斯かる狀態へ再び直面した時に、規則的に再生されるものである。

此處に二三の注意すべきことがある。最初の杞憂狀態の神經傳達は、最初のヒステリー發作の筋肉動作と全く同樣に、恐らくまた有感覺であり合目的であつたのである。若し我々がヒステリー發作を說明せむとするならば、ヒステリー運動のうちで正當の行動であつた部分だけを探求する必要が確かにある。出產の間には恐らく呼吸器の神經傳達の方針は、肺臟の活動を準備し、血液の中毒に對して

は心搏の鼓舞をつとめんとするに在つたのである。この合目的なことは、反復し來るヒステリー發作の際には失はれて、將來感情として杞憂狀態が再生される場合にも無論消失するのである。故に若し個人が或る新らしい危險狀態に逢遇する時には、忽ち非合目的になつて、現在起つてゐる反應を打破する事が出來ずに、杞憂狀態、卽ち以前の危險への反應をもつて答へるのである。合目的性は然し危險狀態の接近せることを知り、杞憂發生によつて信號された時には再び出現する。杞憂は斯かる場合には直ちに適當なる測量によつて弱められ得るのである。そこで直ちに杞憂の出現に二つの可能性が分たれる。その一つは非合目的性の、或る新らしき危險狀態の場合であり、他の一つは合目的性の或る新らしき危險狀態の信號や防衞の場合である。

然らば『危險』とは何であるか。出産行動に於ては生命保持に向つて客觀的危險があり、これが現實に如何なる意味を有するかを吾人は知つてゐる。然し心理學的には全くそれに就いて云へない。出産の危險はいまだ何等の心理的內容をもつてゐない。確かに吾人は胎兒の場合には生命絕滅の轉歸の可能に就ては何等の種類の知識を持たないのである。胎兒は自分のナルチス的リビドーの經濟に多大の障碍を受けることより以外には何事も知らないのである。多大の全亢奮が胎兒を襲ひ新しい不快感が生れ、多くの器官は自身に昂められた纏綿を强請する。これは間もなく開始される對象纏綿の序曲の

如きものである。これ等の中から何者が『危險狀態』の特徴として應用されるのであるか。

初生兒の精神狀態に就いては、遺憾ながら全く僅かより判つてゐないので、吾人は此の問題を速答することは出來ない。余は前述の説明が有効であるか何うかは明答できない。然し初生兒は出産事件を思出すやうな色々場合に遭遇すると杞憂感情を再生するのだと思ふ。が、何によつて、又何に於て初生兒はそれを思ひ出すかといふ決定點が殘されてゐる。

吾人の仕事は、初生兒又はそれより稍長じた小兒が杞憂發生を現はす起因を研究する以外には殘つてゐない。ランクは彼の著書『出産の外傷』の中で極めて努力的な研究を爲したのである。そして小兒の最初の恐怖症は出産の印象に關係してゐると證明してゐるが、余はその論を完璧なものとは思はない。これは二方面から非難し得る。第一にランクは、小兒は出産時に一定の感覺印象、殊に視覺的の性質をもつた感覺印象を所有して居り、それが更生されて、出産外傷の回想と共に杞憂反應を喚起したといふ假定に據つてゐる。然し乍らこの假定は全く證明できないものであり、且つ頗る非現實的なものである。卽ち小兒は觸覺以外のものや出産過程の全般的感覺を持つてゐるとは信じられない。又小兒が、穴から出たり這入つたりする小動物に對して將來杞憂を示す場合には、ランクはこの反應を類似性(アナロギー)の認識によつて説明してゐる。これは然し小兒にとつては不思議な事にはならないのであ

る。第二にランクは、將來の杞憂狀態の評價をするに當つて、幸福であつた胎內生活の思ひ出や、或は胎內生活の外傷的障碍の思ひ出を、必要に應じて有効にさせようとして、それによつて勝手に意味をつけてゐるのである。この小兒杞憂の個々の例は直接にランクの原則の應用に反對してゐる。若し小兒が闇黑や孤獨の場所に置かれた時には、胎內狀態の再生として滿足を感ずることが期待されてよい筈である。又若し其場合に杞憂を起すといふ事實が、出產によつて斯かる幸福が障碍されたといふ記憶に基くならば、吾人は斯かる解釋の强要を永くは誤解してはゐられないのである。

余は結論として、最初の小兒恐怖症は出產の印象へ直接に歸還したものとは云はれず、且つ結局その說明は今日まで出來なかつたと云はねばならぬのである。哺乳兒の或る杞憂胚胎は明瞭なものである。これは出產の直後には最强のものではない。それは徐々に減退する爲めにである。故にむしろ先づ其後の精神的發達の進歩と共に出現して、而して小兒時代の一定の時期を過ぎて止むのである。若し斯かる早期恐怖症がこの時代を超えて續いてゆくのだつたなら、それは神經症的障碍の疑ひを起させる。たとへ其後にあらはるゝ小兒時代の神經症との關係が、我々には全然洞察できなくともである。

小兒の杞憂表現は僅かの例しか吾人には理解されてゐない。が吾人は是れを手掛りとしなければならぬ。實際、小兒が獨りでゐる時、暗い處に居る時、又は自分の信賴してゐる人（母親）の場所に知ら

ない人を見た時、この三つの場合は、唯だ一個の條件、愛してゐる（慕つてゐる）人の消失といふ事に還元される。此處から杞憂を理解する途及び杞憂に結合してゐるらしい矛盾を協調する途が開けてゐるのである。

愛慕する人の記憶象は、ある强さで、恐らく最初は幻覺的に纏綿されてゐる。然しこれは何等の結果を起さず、又この愛慕が恰も杞憂に鞍替へするかの如き觀を呈するのである。それは恰もこの杞憂は、いまだ十分發達せざる者が斯かる愛慕的纏綿を持つて、爲す處を知らないといふ、焦燥狀態の表現のやうであるといふ印象を受けるのである。それ故に杞憂は對象消失の反應として現はれ、而して去勢杞憂は、亦その內容として最も高く評價した對象から分離することであり、又最も根原的の杞憂（出産の『原杞憂』）は、母との分離の際に成立するといふ類推（アナロギー）を爲さゞるを得ないのである。

次の考察はこの對象消滅の主張を乘り超えて更に進んでゆく。若し初生兒が母を知りたいといふならば、それは母が直ちに自分の要求を滿足させて吳れることを經驗によつて知つてゐる故に、その爲にのみ知りたがるのである。小兒が「危險」と認めたやうな狀態に對して、安全にならむと欲してゐる狀態は、不滿足の狀態、慾望緊張の增加の狀態であつて、これに對して彼は無力である。余はこの觀察點から出發して總ての事を分類した。卽ち强度の刺戟が精神的の利用や排除によつて征服されず

して高度の不快に到着したといふ不滿足狀態は、初生兒にとつては出產經驗の類推や危險狀態の反復でなければならぬ。この兩者の共通性は、解決を要求する刺戟强度が增加した爲に起つた經濟的障碍であつて、その要求はそれ故に危險の根本的核子である。兩者の場合に、初生兒にも亦合目的として證明されるやうな杞憂反應が現はれる。これは卽ち、呼吸筋や聲音筋に傳達するといふ目的が、母を呼ぶ事になるのである。これは恰かも以前には內部刺戟の除去の爲めに肺の活動を起させたやうにである。これらの危險の特徵よりも以上には、小兒は自分の出產について保護する必要はなかつたのである。

認識によつて理解され得る外界の對象が、出產時を想起させる危險狀態によつて解決され得るといふ經驗から推して、今は危險の內容が經濟的狀態から自分の條件、卽ち對象消滅の條件に轉移してゆく。故に母を見失ふことは危險になるのであつて、これが起るときに哺乳兒はこの怖るべき經濟狀態の起る前に杞憂信號を發するのである。斯かる變化は、自己保存に就いての配慮の一つの最初の大なる進步を意味して居り、同時にこれは、危險の信號として、自動的に欲しなかつた杞憂の新生から、企圖したそれの再生までの經過を抱括してゐる。

兩者の觀察に於て、救助信號と同樣に、自動的現象として、杞憂は初生兒の心理的無救濟の所產と

して現はれる。この心理的無救濟は彼の生物學的無救濟と明かに對比され得るものである。出産杞憂と哺乳兒杞憂とが相共に母からの分離といふ條件を認めるといふ奇怪なる關係は、何等心理學的意味を要しないことであつて、生物學的には簡單明瞭に次の事實から說明できる。卽ち母は、先づ胎兒のあらゆる要求を母胎の順應といふことで滿たしてやり、出産後も亦同じ機能の或部分を他の方法を用ひて繼續させてゐるのである。胎内生活と嬰兒時代とは、出産といふ奇怪なる檢閱官が我々に信じさせるよりは遙かに優つて連續性である。心理的の母對象は、嬰兒にとつては生物的の胎兒狀態として見做されるのである。それ故に胎內生活では母といふものは少しも對象にならなかつたのである。否胎內では對象などは決して存在しなかつたといふ事を忘れてはならないのである。

これ等の關係の中には、出産外傷などの入り込んで來る餘地は少しも認められないのである。而して杞憂の他の機能は、危險狀態を防止すべき信號の機能としては認められないといふ事も容易に判るのである。對象消滅の杞憂條件は今も猶は全部を引續いて持つてゐる。又杞憂の二次的變化、卽ち男根期に於て發生せる去勢杞憂は別離杞憂であつて且つ同一の條件に結付いてゐるのである。危險は此處では性器との別離である。フェレンチーの完全無缺と見られる考へ方は、吾人に此處で、危險狀態の早期の內容を有する關係の部分を明瞭に承認させる。男根の高きナルチス的評價は、この器官の所

有が、性行爲によつて母(母の代償)との再度の合一に向つて保證を得るといふことに基いてゐる。この男根の掠奪は母との新たなる別離にも比すべきもので、それ故に更に不快に滿てる慾望緊張（出產時の如き)に止むを得ずして引渡さるゝことを意味してゐる。慾望の昇騰は怖るべきものであるが、これは性器リビドーの特殊のものであつて、最早、哺乳兒に於ける如く隨意のものではない。余が此處で附言して置きたい事は、母胎に復歸せむとする空想(ファンタジー)は、陰萎の代償性行爲(去勢脅威による禁壓)であることである。フェレンチーの意味では、自分が母胎への復歸の爲めに、自身の性器をもつて自分に代理せしめむと欲する人は、退行的に、自身の全身體によつてこの器官を置換へてゐると云ひ得るのである。

小兒の發育に於ける進步、その獨立の增加、多くの點に於ける彼の精神裝置の文化、新慾望の出現は、危險狀態の內容に影響を與へずには措かぬのである。吾人はその變化を母對象の消失より去勢に至るまで探究し、第二の進步が超自我の威力によつて惹起するのを見ようと思ふ。去勢を威嚇してゐる兩親の威力の前で人間性が掠奪されると共に、危險は一層一定しないものとなる。去勢杞憂は生長して良心杞憂となり社會杞憂となる。故に最早こゝでは、杞憂は何を怖れてゐるのかは、餘り容易には云ひ得ないのである。『群集からの除外、別離』といふ公式は、社會の原型に依憑することに於て自

身に發達したる超自我の、かの後期の部分にのみ當て嵌まり、攝取されたる兩親の威力に一致せる超自我の中核には當て箝まらないのである。更に一般的に云へば、それは憤怒であり、超自的の懲罰であり、その側の愛の消失であつて、それは自我が危險として認め、杞憂信號をもつて答へたものである。超自我に對しての斯かる杞憂の終末の變化として、余には死の(生命の)杞憂、即ち超自我の投出作用（プロエクチオン）に對しての杞憂が、運命の威力のもとに現はれたのである。

余は曾て、抑壓の際に撤回された纒綿は、杞憂傳達として利用されるものであるといふ説明に或る一定の價値を置いたのである。これは今日では殆んど主要でないやうに思はれる。この差異の生じた理由は次の事からである。即ち杞憂は如何なる場合にも經濟的過程によつて自動的に生ずるものであると余は嘗て信じてゐたが、杞憂を快不快原則の影響の目的の爲めに自我から企圖された信號だとしてゐる今日の解釋は、前述の經濟的過程といふ説明を無視してゐる故に、其處に差異が存在するのである。自我は、抑壓の場合に撤回されて自由になつたエネルギーを、直ちに感情（アフエクト）の喚起に利用するものであるといふ假定に對しては、無論何等云ふべき事はないが、然しこれが如何なるエネルギーの部分によつて生ずるかといふ事は無意味なことゝなつたのである。

余が嘗て述べたことのある他の問題は、吾人の新しい解釋の照明によつて、十分なる試驗をされむ

こと熱望してゐる。それは自我が本來の杞憂場所であるといふ主張である。思ふに、これは適中してゐると證されよう。我々は超自我に對して杞憂發生を分けてやる樣な動機は少しも持ち合せてゐない。然し、若し『エスの杞憂』に就いての問題であるならば決して反對しないで、却つて未熟な表現を吾人は訂正してやる。杞憂は無論自我からのみ探索され得る感情狀態である。エスは自我の如く杞憂を持つことは出來ず、何等編成（オルガニザチオン）されたものでない故、危險狀態を判斷することが出來ない。これに反して、エスに於ては自我に對して杞憂發生の動機を與へる機制を準備し或は完成するといふことは無論屢々起る現象である。事實に於て、大抵の最も早期の抑壓は、其後のあらゆる抑壓の多數の如くエスに於ける個々の機制に基いた自我の杞憂によつて確證できたのである。吾人は此處で更に、好き根柢をもつて二つの場合に區別しよう。その一つは、自我に對して危險狀態を活動的にさせるやうな物がエスの中に生じることで、これによつてはそれを禁斷すべく杞憂信號を與へようと運動する。第二は、エスの中に出產外傷に類似せる狀態が起り、それによつて自動的に杞憂反應を招くのである。吾人はこの二つの場合を相互に接近させることが出來る。それには第二のものは、最初の然かも根原的の危險狀態に相當するが、第一のものは然し其後それから派生した杞憂條件の一つであるといふことを提言すればいゝのである。これは、或は實際的に現はれる感情に關係してゐる。即ち、第二の場

合は現實神經症の原因になるところのものであらう。第一の場合は精神神經症に對して特有なものである。

今吾人は、以前の報告を無價値にしようとは思はない。むしろそれを新しき見解に結合せしめむと試みるに過ぎない。禁慾、性的亢奮の經過中の誤用的障碍、性的亢奮が精神的仕事から轉向すること、これらの場合には、杞憂は直接にリビドーから生ずるものであることは否定できないことである。卽ち過大の慾望緊張に對する自我のかの焦燥狀態が現はれる。これは出產時の如く杞憂發生に移行するものであつて、その際、直ちに利用されないリビドーの過剩がその放射を杞憂發生に見出すことは、又冷淡であるが明かなる可能性である。この現實神經症の根低の上に特別に容易に精神神經症が發生することを吾人は見てゐる。これは卽ち自我が暫時停止して置くことを學んだ處の杞憂を省略すべく、而してそれを徵候形成によつて拘束すべく試みたることである。恐らく外傷性戰爭神經症の分析は、その病名があらゆる種々雜多なる感情を含んでゐるものだが、これらの中の或る感情は、現實神經症の特質へ參與してゐることが明かにされたであらう。

吾人が根原的の出產原型の中より種々なる危險狀態の發生を示すよりも、將來の各杞憂條件が以前の條件を簡單に無力にするといつて主張するのは、吾人に緣遠い事である。自我發達の進步はひたす

ら以前の危險狀態の價値を低下せしめ、且つ除去せんことに貢獻してゐる。その結果として、或一定の發育年齡には、それに相當した或る一定の杞憂條件が參與してゐるらしいと云ひ得る。精神的焦燥の危險は、自我の未發達の年齡に相當する。それは恰かも對象消滅の危險が初年兒の無獨立性に相當し、去勢危險は男根期に相當し、超自我杞憂は潛伏期に相當する如くにである。然し乍らあらゆるこの危險狀態及び杞憂條件は相共に永續し得て、且つ自我は亦相當する時代よりは非常に遲く杞憂反應を起させることが出來、或はそれらの多くを同時に活動させることが出來るのである。有力なる危險狀態と、それより生ずる神經症との間の密接なる關係は亦成立する可能性をもつてゐるのである。(一)

註(一) 自我及びエスが區別されて以來、抑壓の問題に就いて、吾人の興味は又新たに復活した。從來吾人は機制が自我に向けられた方面、意識する事と運動性との阻止、及び代償(徵候)形成を觀察するには十分であつた。その抑壓された本能亢奮そのものに就いて、それが無意識の中に不定に久しく不變に生存するらしいことを吾人は假定した。今やこの興味は抑壓されたものゝ運命といふ事に向けられた。而して吾人は斯く變化せずに又は變化し難く永續する事は、自明的のものでなく、恐らく一度も馴染のものでなかつた事を豫想するのである。根本的の本能活動は常に抑壓によつて禁制され、その目的を轉向させられる。然し乍らその素質は無意識の中に於て保留されてゐるものであるか。又それは生活の變化及び低下といふ事に對して抵抗を示すものであるか。分析によつて早くからその存在を知られてゐた處の古い

願望は未だ持續してゐるのであるか。これらの解答は明瞭であり確實であるらしい。即ち抑壓されたる古い願望は無意識の中に未だ存續されてゐなければならない。何故ならば吾人はその後裔である徵候を猶有力に發見してゐるからである。然しこの徵候は餘り多いものではなく、それは次の二つの可能の場合には判定することは出來ない。といふのは、古い願望はその總ての纏綿エネルギーを轉嫁させたその後裔によつてのみ現在勢力を現す場合或は又古い願望が自ら存續してゐたといふ場合である。この後裔に纏綿することに疲勞するが如き運命に到つた時には、更に第三の可能性として、この願望は神經症の經過中に退行作用によつて再生され、且つ不定時に出現するかも知れないことになる。これらの省察は無駄なことゝは思へぬ。疾病の多くの現象は正常の精神生活の如くに、斯くの如き問題を必要としてゐるやうである。余はエヂポス・コンプレクスの消失に關する研究に於て、露骨なる抑壓と、古い願望を眞に廢棄する事との間の差異に就いて注目したのである。

吾人が、これらの研究の早期の斷片中に於て、神經症的感情よりも更に多く去勢危險の意義に遭遇した場合には、この要素を宜しく買被らぬやうに自ら警戒したのである。何故ならば、この要素は神經症の素質を確かに餘計もつてゐる女性には、決定的ではないかもしれないからである。吾人は去勢杞憂を、神經症に導く防禦作用の唯一の動因として解釋する事は、危險でないことを唯今認めるのである。余は他所に於て、小娘の發育が去勢コンプレクスによつて如何に愛撫的對象纏綿に向けられるかを説明した。婦人に於ては明白に對象消失の危險狀態が最も有力に殘留してゐるやうである。吾人

はこの杞憂條件に少しく修正を加へる必要がある。それは杞憂條件は對象を見失ふこと或は對象の消滅には關係してゐるのではなくて、寧ろ對象側の愛の消滅に關係してゐるのである。ヒステリーが女性に對して親和力を有すること、恰かも强迫神經症が男性に對して親和力を有するが如くであると切言するならば、ヒステリーの場合に於ける愛の消滅といふ杞憂條件は、恐怖症に於ける去勢脅威のごとき、又强迫神經症に於ける超自我の杞憂のごとき役目を演ずるであらうといふ假定は誤つてはゐないであらう。

第九章

今、殘された仕事は、徵候形成と不安發生との間に於ける關係を處理することである。これに就いては二つの意見が廣く行はれてゐるやうである。その一つは、不安そのものを神經症の徵候であると稱すること、他の一つは、兩者をもつとずつと緊密な關係にあるものと見做すことである。その考へに依れば、あらゆる徵候形成は不安を回避せんが爲にのみ作られると云ふのである。卽ち徵候は、もし徵候として用ゐられないならば不安として用ゐられたであらう精神的エネルギーを拘束しておくのである。それ故に、不安は神經症の根本現象又は主要問題だと云ふのである。

この第二の主張の極く僅かな部分的の正確さは、顯著なる例をもつて證明することが出來る。若し吾人が街へ連れ出した外出恐怖症患者を置き去りにして來たならば、彼は不安發作を起すに至る。又强迫神經症患者に對して、手の洗滌を禁じたならば、彼は殆んど堪へ難い不安の虜になるのである。それ故に患者と街へ一緖に行くことや强迫的に手を洗滌することは、斯樣な不安勃發を防禦すべき目的並びに成果を期待してゐるのであることは明かに判る。この意味に於て又、自我が已れに加へる總ての禁制は徵候と名づけ得られるのである。

杞憂發生の原因を危險狀態に歸させたといふ事よりして、徵候の形成も亦自我が危險狀態を回避せんとして作られたものだと云ふ事が出來る。徵候形成が防害された時には危險が實際に發生して來る。それは即ちかの出產にも類似した狀態が出現して、その場合に間斷なく增加する本能の要求に對して自我は無救濟狀態に陷り、かくて杞憂條件の最初のもの及最も根原的のものが出現するに至るのである。吾人の見る處では杞憂と徵候との關係は假定されたよりも稍狹く示されてゐる。それが爲めに、吾人は兩者の間に危險狀態の要素を挿入したのである。そこで吾人は補遺的に、杞憂發生は徵候形成の手引であると云ひ得るのである。確かにこれは重要なる假定であらう。何故ならば若し自我が杞憂發生によつて快不快法則を覆さないならば、エスの中に用意された力、危險にせまつた機制を中止させる力は持たなかつたであらうからである。こゝに於て杞憂發生が最少限度に制限され、その杞憂が信號としてのみに用ひられるといふ傾向が明瞭に判るのである。何となれば、さもなくば單に他の場所に遁避せんには本能機制によつて威嚇される不快さを忍ばねばならなくなり、快感原則の目的には無效であるやうなものでも、神經症の場合には完全に屢々生ずるに至るからである。

斯くて徵候形成は危險狀態を廢棄せんとして實際的の成果を遂げてゐる。これには二方面あつて、一面は吾人に隱匿されてゐるもので、エスの中で斯の變化が生じ、それによつて自我が危險から免か

れるものである。他面は明かに示されてゐるもので、影響を蒙つた本能機制の代りに作られたもので、即ち代償形成である。

然し吾人が以前に徴候形成から出發して説明して來たものを防禦機制からと改め、又徴候形成といふ名稱を代償形成と同じ意味の語として使用して、より正しく云ひ度いと思ふ。斯くすれば、防禦機制は遁走といふことに類推されて、それによつて自我は外部からの危險の脅威を免かれるといふ事が明瞭に判り、この機制が全く本能の危險から遁走しようとする企圖を表白してゐるといふ事を明瞭に知るのである。この比較に關する考へは更に説明を進めてゆく助けとなる。第一に對象消滅（對象側の愛情消滅）及び去勢脅威は、何れも何か猛獸の如くに外部から威嚇して來る危險物であつて、本能の危險ではないなどといふ事が云へなくなつて來る。然しながら全くこれは同一の場合ではないのである。例へば我々が狼に對して振舞ふ如き無關係さをもつて、狼も亦吾人に對して恐らく無關係に思ふであらう。然し吾人の胸中に或る種の感情や目的を抱かなかつたならば、戀人は我々に對してその愛を撤回しなかつたらうし、去勢も亦我々に對して脅威とはならなかつたであつたらう。斯くの如く此の本能活動は外界の危險の條件となつて、その爲めにそれ自身が危險物となるのである。故に我々は外界の危險物に對しては、內部の危險に對する手段を用ひて戰ふことが出來るのである。動物恐怖

症に於ては、その危險は未だ全く外界の危險として見られてゐる觀がある。假令それが徵候の中に外界の轉移してゐる事を認めてゐてもである。强迫神經症の場合では、その危險は遙かに多く內的のものとなつて、超自我に對する杞憂の一部即ち社會杞憂が矢張り或る外界の危險を內部的に代償することを表白し、他の一部は良心の杞憂であつて、それは全く內精神的のものである。

第二の異論は、吾人が外界の危險の脅威から遁避する事は、自身と脅威物との距離を大きくする事以外には何物でもないといふ事である。吾人は實に危險に對しては防禦法を講じては居らず、他の場合のやうな例へば棍棒をもつて狼に向ふとか武器をもつて射つといふやうな、さういふ事は危險に對して少しも試みない。それ故にこの防禦機制は然し乍ら遁避といふ事よりも更に以上のことが爲されてゐるやうである。この機制は實に脅威的の本能の仕事に關係してゐるのであつて、これを兎に角抑壓し、これの目的を撤回し、それによつてこれを非危險性のものと爲してゐるのである。これらの異論はどうも排斥し難いやうであつて、吾人はこれを勘定に入れなくてはならない。思ふに遁避企圖に正確に比較されるやうな防禦機制が存在するといふ事は確かにあるらしいが、然し自我は自ら他處に於て更に一層能動的に防禦法を講じて强烈なる反抗行動を取つてゐるのである。若し防禦を遁避と比較する事が概して差支へないやうな狀態であつた場合、例へば自我とエス中の本能とが實際に同一の

構成物であつて、分離した存在物でない場合——例へば狼と小兒のやうな——だつたならば、その結果として自我の各態度が本能の仕事の上に或る變化を及ぼさねばならぬのである。

吾人は杞憂條件の研究によつて、防禦作用に於ける自我の態度を、所謂合理的美化作用として觀察せねばならない。各危險狀態は精神裝置の一定の潜伏期或は發育階梯に合致して居り、且つそれらに對して正當であるやうに思ふ。卽ち、早期の小兒期の本體は事實上內外より來る全亢奮を精神的に操縱すべき準備が出來てゐない。或る一定の年齡に對して實際的に最も重要なる興味ある事は、吾人に關係のある人達がその母性愛的の世話をいつまでも撤回しない事である。若し少年が權力ある父を母に對する競爭者として見做すやうな場合には、父に對する攻擊的傾向と母に對する性的企圖とが感じられて、父を怖れるといふ事が正當となり、且つその膺懲の杞憂が種族發生學的（フイロゲネテイツシ）の强勢に從つて去勢杞憂として現はれて來る。社會的關係が生ずる共に超自我に對する杞憂、卽ち良心が重要性を帶びるに至り、これらの起因の廢止される事は、重大なる葛藤や危險等の泉源を作るに至る。然し全くそれらには新問題が結び付いてゐるのである。

吾人は暫らくの間、杞憂感情を他のもの（例へば苦痛感情）をもつて代償しようと試みよう。四歲の女兒が人形の毀れた時に痛ましくも泣き、六歲の折には女教師に叱られて泣き、十六歲の折には戀人の

つれなさに泣き、二十五歳の折には幼兒を失つて泣くだらうといふ事は、吾人はそれを全然普通のことゝ考へてゐる。これらの苦痛條件はそれ〴〵共の時代といふものを持つてゐて、時代の經過と共に消散するものである。但しこの最後の一定のものは、生涯を通じて存留してゐる。然るに若しこの女兒が婦人となり母となつてから人形の破損で泣き出すやうな事があつたならば、それは不思議なこととせざるを得ない。處が神經症患者はそれと同じ態度をとるのである。彼等の精神裝置の中には永い間、刺戟の操縱に對するあらゆる法則が廣い範圍内で構成されて居り、これが十分な發達を遂げてゐる爲、彼等の多くの要求を自身に滿たすことが出來て居り、そして去勢は最早膺懲としては行はれないことを永い時承知して居り、且つその態度は實に今も猶ほ昔の危險狀態が存在せる如くであつて、あらゆる早期の杞憂條件に固く結び付いてゐるのである。

これに對する解答は、稍散漫的に陥るであらう。それは就中事實を觀察する必要があらう。大多數の例では、昔の杞憂條件は既に神經症的反應を惹起した後には事實上消滅されてしまふのである。嬰兒が孤獨や暗黑や未知の人に對してもつ恐怖症は殆んど普通のものと稱されてゐるが、多くは後年になつて、幼年期障碍でよく云はれてゐる所の『芽を出す（ワクセン・ヂッヒ・アウス）』ことになるのである。屢々起る動物恐怖症はこれと同じ運命をもつたもので、小兒期の轉換性ヒステリーの多くは其後に至つて何等繼續して行

かないのである。潜伏期の中の儀式は極めて屢々起る出來事であつて、これらの場合の甚だ僅かな割合だけが其後に至つて完全なる强迫神經症を發生するのである。小兒神經症は主として——吾人の取扱つた高等の教養を受けてゐる知識階級の都會の小兒では——その發育中に起る規則的の挿入物(エピソード)である——たとへ其れに就いては猶いまだ十分なる觀察が施されてゐないとは云へ。世人は成人の神經症を觀察する際に、その中に小兒期神經症の標兆(しるし)の顯はれてゐるのを見遁しはしないが、然しこれを現はしてゐる多くの小兒等が、その後永く亦神經症患者にもならずに濟んでゐるのである。それ故に成熟の經過中に杞憂條件は廢棄されたとせねばならず、且つ危險狀態はその意義を消失したとせねばならぬのである。然しこれらの危險狀態の二三のものは、その杞憂條件を時期に應じて變化させるといふ事によつて、其後の時代に於て採用されるといふ事になるのである。それ故に例へば去勢杞憂は黴毒恐怖の假面のもとに存在してゐたことがあるが、それは去勢が最早性的快樂の放縱に對する懲罰としては殘留してゐなくなつてゐても、その代りに本能の自由性に對して重大なる疾患が脅威してゐる事を知つてゐるのである。其他の杞憂條件は主として消滅するものとは定まつては居らず、恰も超自我に對しての杞憂の如くに、生涯人間につき纏つてゐるものである。根原的の外傷性の杞憂狀態の再生に對しては、成人であつても亦結局何等十分なる防備を持つてゐないのであつて、卽ち各人は或る

限界を與へられてゐて、その限界を超えてはその精神裝置は解決の成就に必要なる亢奮量を拒絶するのである。

これらの少許の訂正は、此處に說明された事實を覆すものとは定め難い。この事實とは、多數の人人は危險に對して小兒的の態度となつて、年を經た杞憂條件を克服できないといふ事である。卽ちこれと戰ふことは、神經症の事實を否定することになる。何となれば斯かる人々は同じく神經症患者と稱されるからである。然し乍ら如何にしてこれは可能であるか。何故にあらゆる神經症は次の時期に達すると共に終了される處の發育の挿入物（エピソード）ではないのか。何處から危險に對するこれらの反應の繼續要素は來るのであるか。杞憂感情が、他の總ての感情を餘處にして、獨りで多くの反應を喚起する事を享樂してゐるやうに見える特權は何處より得るのであるか。その反應とは變態として他より區別され、無目的に生活の潮流に逆行してゐるものである。換言すれば、吾人は測らずも屢々起つた魔問題に再び遭遇するのである。卽ち、神經症は何處から來るか、その最終の起因、その特殊の起因は何であるか。十年間の永き分析の努力の後に於ても、この問題は未解決のまゝ初對面の如くに吾人の前に出現するであらう。

第十章

杞憂は危險に對する反應である。杞憂感情が精神的經濟關係に於て例外的の表現を强ひられる時にも、それは危險の本體に關聯してゐるといふ觀念を吾人は變更することは出來ない。然し危險は人間に共通のものであり、各人に對しては均等なものである。然るに我々が使用して任意にならないものは、次の要素である。卽ち杞憂感情をしてその特殊なるにも拘はらず克服させて正常の精神本態になしうるやうな人を選擇させる要素であり、或は杞憂感情を克服できない人は誰であるかを決定する要素である。余は斯樣な要素を發見するが爲めに二つの硏究を知つてゐる。それは困憊に對して救助を約束するが爲めに、明かに同情的に採用することを期待し得るものである。この二つの硏究は相俟つて完全になり、同時に問題を相反する決論で論じ合ふ。その第一はアルフレッド・アドラー Alfred Adler によつて十年餘の以前から着手されて居るもので、彼は危險によつて生じた問題の克服に失敗した人は、その者の器官の劣等なる事が重大なる困憊を惹起したのであると主張して、これを最も內部的の種子に歸せしめたのである。Simplex sigillum veri（單純は眞理の記號である）といふ詞が正しく存在するならば、斯かる解決を好個の救助物の如く歡迎せねばならぬ。然しこれと反對に、過去十年の批評

は、この說明の全く不十分なる事を證明し、その說明が分析によつて發見した事實の全材量を全然度外してゐる事に就いて立證した。

第二の研究は一九二三年オットー・ランク Otto Rank の著『出產の外傷』によつて企てられた。これを他の點に就いて研究したアドラーの論に對立させて、此處に主張された研究として取扱ふことは、正しくないかも知れない。何となればランクは精神分析といふ基礎の上に立つて、その思考行程を進め、それを分析の問題の解釋に向つて正當な努力として認めてゐるからである。ランクは個人と危險との間に生じた關係を論ずるに當り、個人の器官の虛弱といふことを否定して、危險の强さの變化といふ事に注目した。出產過程は最初の危險狀態であつて、それから生じた經濟的騷亂は杞憂反應の原型となる。卽ち吾人は先にこの最初の危險狀態と杞憂條件とがあらゆる其の後のものと結合する處の發達線を探求して、其際にこれら總べてのものは何か共同的に保護し、同時にこれら總ては或る意味に於て、母より分離する意味である事を認めた。卽ち最初は單に生物學的見地から、次には直接の對象消滅の意味にて、其後には間接の方法によつて媒介された對象消滅の意味にて、母から分離するのである。この偉大な關係を發見した事はランクの構成として爭ふべからざる功績である。此處に於て出產外傷は各個人に種々なる强度をもつて關係し、外傷の强さによつて杞憂反應の威力を異にするの

である。かくして個人は常に杞憂の支配を認め得るか否か、それが神經症的になるか或は常態に止まるかの問題は、ランクに從へば杞憂發生の最初の大きさに關係してゐなければならぬと云はれるのである。

ランクの解說を個々に批評することは吾人の問題ではない。これは唯だ我々の問題を解決するに當つて應用されるかどうかといふ試みに過ぎない。ランクの形式、即ち神經症患者は、出產外傷の强かつたが爲めに完全に出產外傷をアブレアギーレンする事の出來なかつた人であらうといふ事は、理論上甚だ非難すべきことである。何をもつて外傷のアブレアギーレンと見做すかは、正當には知り得ないのである。言語的にそれを解釋すれば、神經症は杞憂感情をより强くより屢々再生すればする程、益々健康に近づくといふ奇妙な結論に逢着するのである。余は曾て事實をもつてこれに反駁せんとして、アブレアギーレンの學說を廢棄した事があつたが、この學說は洗滌法(カタルシス)に一つの重大な役目を持つたものであつた。出產外傷の變化性をもつた强さといふ主張には、それが遺傳的素質の原因として是認されるやうな何等の餘地を持つてゐない。この主張は確か一つの器官的要素であつて、それは素質に對して偶然の如くに振舞ひ且つ自ら偶然と稱せられる多くの影響、例へば出產に於ける折好き救助作用に關係してゐる要素である。ランクの說は、概して種族發生學の因子の如き素質的因子を等閑に

附してゐる。然し乍ら幾分の修正によつて、素質の意義に就いて或る餘地を作らうと思へば、それには幾多のことが出來するかも知れない。即ちそれは矢張に個人が出産外傷の强度の變化性に反應して、それが爲めに世人はその理論から意義を奪ひ、且つ附隨した意味に新たに導かれた因子を制限するやうになるかも知れないのである。神經症の發生に就いての決定は、それゆゑ實に或る他の、更に或る不明なる領域に存在してゐるのである。

人類の出産過程と他の乳哺動物のそれとを比較して、人類には動物を差し措いて神經症となるべき特殊の素質を特權として持つてゐるといふ事實は、ランクの理論に對して殆んど適切でないのである。その主要な反對はその理論が確固たる觀察に基いてゐるにも拘はらず、うは附いてゐるといふ事である。難産で且つ長時間を要した出産が、間違ひなしに神經症の發生と合致するものであるか、或は又斯くして生れた小兒のみが早期小兒の杞憂現象を他のものよりも長く又より强く示すものであるか、これに就いての確かな研究はない。然し墜降性出産は母にとつては輕い分娩だが、小兒にとつては恐らく重い外傷の意味を持つだらうと世人が主張するならば、窒息狀態に導く出産は、唱導された結果を確實さをもつて認定させねばならないと要求するのは確かに正しいことである。ランクの原因論の利益なことは、再檢査に昵懇な材料をもつて爲されるといふ機會が示されてゐる事である。吾人

が斯くの如き檢査を實際に始めない限りは、その理論の價値を判定する事は不可能である。

　これに反して、余はランクの理論が從來精神分析に於て知られた性本能の原因的解説に矛盾してゐるとは考へられないのである。何となればこの理論は危險狀態に關する個人の關係のみを論じてゐるのであつて、猶ほ好き敎示を與へて吳れてゐるからである。それは何かと云へば、最初の危險を克服できなかつた者は、其後に發生する性的危險の狀態をも拒絕せねばならざるが爲めに、神經症に襲はれるのであるといふ好き敎示を與へて吳れたからである。

　故にランクの研究は神經症の根本問題に對する解答を與へたものだとは余は考へないのである。又思ふに、氏はこの問題の解決に向つて一大貢獻の如きものをなしてゐるとは未だ決定する譯には行かない。難產の影響に就いて彼の研究が神經症の素質に陰性に終つた時、この貢獻は極めて少許より評價されないのである。神經質の明かなる且つ一元的の『最終の原因』を要求することは、常に不滿足に終るのであつて、甚だ遺憾に思ふのである。今日猶ほ醫師が望む處の理想的な例は蓋し細菌の如き例であつて、これならば分離が出來、純粹培養が出來、更に各個人にこれを接種して同一の結果を生ぜしめ得らるゝのである。或は稍空想的に云へば、化學的物質の服用によつて一定の神經症を發生させ又は中止させるやうな現象などもさうであらう。然し乍ら蓋然的（ワールシャインリヒカイト）といふ事は、この問題の斯か

る解決に向つては適當しないのである。

精神分析の教示は餘り簡單であり、僅少にしか滿足されなかつた。余は此處に以前より知られた事を繰返すのみで何等新味のものを添へる事が出來なかつた。自我が或る危險なる本能活動を防禦することが出來た時（例へば抑壓の機制によつて）、その場合にはエスのその部分を確かに禁制し且つ破壞したのであるが、然し同時に自我は又關係のなかつたある一片をエスに與へて、自身の本來の主權の一片を放棄することになるのである。これは根本に於て遁避企圖と認むべき抑壓の性質から生じてくるのである。抑壓されたものは、こゝで『治外法權』であつて、自我の大なる編成からは除外されて居り、唯だ無意識の領域に於て支配せる法則に從つてゐるのみである。危險狀態が變化され、その結果として自我は新規な、抑壓されたと同樣なる本能活動を防禦すべき何等の動機を持たない程に至つたならば、自我制限の結果關係が顯はれる。この新規なる本能過程は自動機制の影響のもとに完成するのである。――反復强迫の影響と云ふには躊躇されるが――これは、より早期に抑壓された危險狀態と同一な途上に逡巡するものであつて、恰も征服された危險狀態が今猶ほ現存するかの如くなるのである。抑壓へ定着せる要素は、それ故に無意識のエスの反復强迫であつて、常態の場合には單に自由に運動する自我の機能によつて廢棄されるものである。自我が自ら選んだ抑壓の檻を再び破壞して、そ

の影響を本能活動に歸し、新らしい本能過程を、抑壓された危險狀態といふ意味として考へる事は、自我に於て折々成功するかも知れぬのであるが、事實の上に於てはそれは屢々失敗するものであり、且つ抑壓を退行せしむることは出來ないものである。量的關係はこれらの爭鬪の結果に對しては比例するかも知れぬ。然し多くの場合にはこの決定は無理强ひであると云ふ觀を吾人は抱かざるを得ないもので、抑壓された活動の退行する引力と抑壓の强さとは極めて著しく、爲めに新しい活動は反復强迫にのみ續いてくる程である。其他の場合では或る他の力が貢獻してゐる事を吾人は認めて居り、抑壓された原型のもつ引力は、現實的の苦難の側からの拒絕によつて增强するのである。その現實的の苦難は、新らしい本能活動が異つた過程をとつた場合に、それに反抗して出るものである。

是等は、抑壓へ定着する事及び既に實際でなくなつた危險狀態を保持する事からの出來事だとする事は、愼ましき、が然し理論的には殆んど過信されない分析治療の事實によつて證明される。若し吾人が分析の際に自我をして、彼の抑壓が解けるやうな位置にして置く時には、自我は抑壓されたエスに向けた自分の力を再得して、恰も昔の危險狀態は最早存在しないかの如くに、本能活動を經過させる事が出來るのである。斯くの如くにして到達したものは、かの醫師的仕事の權限と共に共鳴され得るものである。普通の場合には確かに吾人の療法はより速かに、より信賴されて、少額支出で、幸運

にも自然に與へられたらしい好果を得る事をもつて滿足せねばならないのである。

以上の考察によつて知り得たことは、量的關係といふものは直接には指示出來るものではなく、昔の危險であつた事情が固持されてゐるか、自我の抑壓が保たれてゐるか、小兒神經症が繼續してゐるか否か、等に就いてさかのぼつて判定すべき方途に於てのみ理解し得べきものである。神經症の起因に關係せる要因(ファクトル)、諸々の精神力が互に葛藤する如き條件を作つた要因としては我々の理解したところでは生物學的、系統發生的及び純心理學的の三つがあると思はれる。生物學的の要因としては嬰兒が永い間人の世話にならねばならぬことゝ依屬とである。人間の胎內存在期間は、多くの動物に比すると割合に短いやうであるが、その代りそれ等よりも未完成のまゝ世の中に送り出される。これが爲めに現實外界の影響を受けることが強く、エスから自我の分立することが早められ、外界の危險が重要な意味を持つやうになり、而してその對象となつたものは、これらの危險に對して保護し且つ失つた胎內生活の代りになり得るものであるが、その對象の價値が法外に高められるに至るのである。この生物學的要素はこのやうに最初の危險狀態を彷彿せしめ、愛されようといふ要求を作るのである。この要求は人類に永く附き纏ふものである。

第二の系統發生的の要因はたゞ吾等精神分析學徒のみが論じたものである。リビドー發展の極めて

著しい事實に依つて吾人は、斯かる假定を下すべく餘儀なくされたのである。人類の性的生活は人間に近い多くの動物のそれの如く發端から成熟までは、一本筋に發達するものではなくて、五歳に至るまでの最初の早期開花期後は強く中斷させ、其後思春期と共に新たに發揚して小兒時代の下地に結合することを吾人は發見してゐる。思ふにこの性的發達の中斷は歷史的殘滓として殘されてゐる何かの重要事件が、人類の運命の中に偶發せしめられてゐるに違ひないのである。この要素の病的意味として現はるゝものは、即ちこの小兒性感の多くの本能要求は、自我からは危險として見做されて防禦を受けるに至る結果、其後に發した思春期の正當であるべき性的活動は、嬰兒期原型のもつ引力に屈服して、抑壓の下に置かれるといふ危險を生ずるのである。そこで吾人は神經症の最も直接なる原因に逢着するのである。性感の要求に早く接觸した事は、外界に早く接觸した事と自我にとつては同樣の效果があるといふ事は、注目すべき事である。

第三の心理學的要因は吾人の精神裝置の不完全といふ事であつて、それは正に人間の心理が自我とエスとに區別されてゐると云ふことと關係があり、從つて畢竟するに亦外界の影響といふ事に歸せられるのである。自我は現實の危險に對する顧慮の爲めにエスの或る本能亢奮に對して自ら防禦し、これを危險として見做すべく餘儀なくされるのである。然しながら自我は內部の本能危險に對しては、

自身に未知の現實の一部に對するが如き有效な方法では自衞し能はぬのである。自我はエスそのものと密に結合して本能危險を防禦する事が出來、かくて自我自身の組成を制限し且つ本能の侵害に向つての代償として徵候を形成するやうになるのである。このやうに拒絕された本能はやがて復興して來る時、自我にとつてあらゆる苦難が發生するのである。それは吾人が神經症的苦惱として認めてゐるものである。

猶、神經症の本體と起因とに於て吾人の觀察が何等先驅的のものでない事を余は信ぜざるを得ぬのである。

第十一章

補遺

右の論述の間に種々の問題に遭着して而も一々それ等を片付けることの出來ないものがあつたが、今はそれ等の問題に細かく注意を向けて、こゝで纒めておかうと思ふ。

A　嘗て發表せる見解の修正

a　抵抗及び逆纒綿

抑壓は一度限りしか作用せぬものではなく連續的にリビドー纒綿を必要とするものたる事は、抑壓の理論の重要なる部分である。抑壓が無くなると、その泉源から絶えず流れ來る供給を保持してゐた處の抑壓された本能が、今迄閉鎖されてゐたその道を直ちに打開するであらう。その結果に對して抑壓

が加へられねばならず或は折々に不定に繰返されねばならぬかもしれぬ。斯くして本能の繼續性から自我に對して要求が起つてくる。それは自我の防禦作用を連續的營澤によつて確實にしようとすることである。抑壓を守護しようとするこの行爲は、吾人が治療に專心する際に抵抗として研究されるものである。この抑壓から余が逆纒綿として記したものが假定されて來る。斯かる逆纒綿は强迫神經症の際に諒解されるのである。このものは此處では自我の變化として、自我の反應構成として、抑壓さるべき本能傾向とは相反する態度(同情、良心、正直)の强力になつたが爲めに現はれるのである。これらの强迫神經症の反應構成は誇張されてはゐるが發達する性格の潛伏期中に於ては普通の狀態とされてゐる。理論を必須として期待されてゐるヒステリーの場合には、この逆纒綿を證明することは甚だ困難である。こゝに於ても亦反應構成による自我變化の分量は不明であり、又種々な關係に於て、この狀態の主徵候として注意を强ひることは極めて奇怪なことであらう。斯樣な方法に於て、例へばヒステリーのアンビバレンツ葛藤は解かれ、愛人に對する憎惡が、彼女に對する愛撫心の過大と又彼女に對する不安心の過大とによつて制止されるのである。然し乍ら强迫神經症に對する鑑別として重要視すべき事は、斯かる反應構成は一般の性格を示さずして、却つて全然特殊の關係のもとに制限されてゐるといふ事である。例へばヒステリーの如き、心底より自己の憎惡せる小兒を過度に愛撫するものは、

その爲めに總じて他の婦人よりも愛情の持ち合せがないであらうし又他の小見に對しては全く愛撫などはしないであらう。ヒステリーの反應構成は或る一定の對象に强く定着してゐるものであるから、自我の一般的素質にはならない。これが强迫神經症に於ては全く一般化されたもので、對象關係が緊密でなく、對象選擇の容易に轉移することが特徴である。

逆纒綿の他の種類はヒステリーの特質に一層酷似してゐる。抑壓された本能活動は二方面から能動的にされる(新しく纒綿する)。第一には內部からで、內部の亢奮源より來る本能の增强によるもの、第二は外界からで、或る對象を認識することによる。この對象は本能に對して要求されてゐたらしいものである。ヒステリー性の逆纒綿はむしろ外界へ危險を認める方面へ向けられたのである。そしてある特殊の發達の形式を採つて、認識が生ずるに違ひない處の自我制限による狀態を避けて、而してこの認識が生じたとしてもそれに對して注意を撤回させてしまふことに成功するのである。佛蘭西の學者(Laforgue)は簡單にこのヒステリーの行爲を特殊な名稱『スコトミザチオン』と名づけたのである。ヒステリーよりも猶一層不思議なるは恐怖症に於ける逆纒綿の斯かる技巧である。その興味の中心は怖るべき事の認識を避けんとして極力努めることである。ヒステリーは一方では恐怖との間に、他方では强迫神經症との間に逆纒綿の方向の相反せる事は、假令絕對的でないまでも意味をもつたものらし

い。抑壓と外界の逆纒綿との間は、退行と內部の逆纒綿（反應構成による自我變化）との間の如く緊密なる關係をもつてゐる事は大體に於て認められる。危險の認識を回避することは結局神經症の一般的問題である。强迫神經症の種々なる命令や禁斷は、これと同樣な目的に役立つべきである。

吾人が分析の際に破らねばならぬ處の抵抗は、自我から生ずるものであり、又自我は彼の逆纒綿に固着してゐるものである事は、嘗て一度明かに說明した事である。自我は、自己の注意力を認識と觀念とに應用する事を困難として居る。それを回避することは以前から命令通りに行つたものである。或は衝動を自分のものとして認めることも容易でないのである。自分のものとは、自分に固有のものとして親密なるべき完全なる相手を形成してゐるものである。吾人が分析に於て抵抗と戰ふことは、前述の如き斯樣な解釋の上に立つてゐるのである。吾人は抵抗を意識的にするのである。即ち彼は何處で、又如何にして斯く屢々、抑壓の關係のもとに自ら無意識になつてゐるかを知るのである。抵抗が意識された時に或は後に、吾人は抵抗に對して論理的の辯論は向けない。又自我が抵抗を放棄した時に、吾人は自我に利益と賞與金とを約束する。自我の抵抗にはそれ故に何等疑ふべき又訂正すべき何物もない。これに反して、獨りこの抵抗は、分析の際に我々に對抗して生ずるやうな事柄を、隱蔽するかどうかは問題である。吾人の經驗によれば、抑壓を削除することは自我にとつては異常の困難な

ことであり、又自我がその企圖を摑んだ後に、自己の抵抗を放棄することも亦困難なことである。而して吾人は斯かる推賞すべき企圖の後に生ずる奮勵的努力の時代を『完成』(ドウルヒアルバイテン)の時代と記載したのである。斯かる完成を必要とし且つ諒解せしむる動的(ディナミツシ)の要素を認定するやうに今は近づいて來た。これは自我抵抗の廢棄後に更に反復强迫の威力が、卽ち抑壓された本能過程に對する無意識の原型のもつ引力が、打破されたといふ事に過ぎないのであり、又世人がこの要素を無意識の抵抗として認めようとも、それに就いて何事も論ずる處はないのである。斯かる修正を吾人は少しも迷惑してはゐない。これが吾人の諒解の一斑になるならば望ましき事であり、これが前者に反對せずして寧ろこれを補充し、時には通有性を制肘し、狹小なる理解を擴張するに至るならば、決して恥辱ではないのである。

吾人はこの修正によつて、分析中に逢着する抵抗の方法に就いて、完全なる觀察を齎したとは思はないのである。更に進んだ深い研究に於て、吾人は五種類の抵抗と戰つた事を認めてゐる。それは卽ち自我、エス及び超自我の三方面より生ずるものであつて、その際に自我は、これらの力學にて三個に區別された形式の泉源として認められるのである。これらの三個の自我抵抗の第一は、以前に取扱はれた抑壓の抵抗であり、これに就いては改めて云ふべき事は餘りないが、このものから轉嫁の抵抗が分立する。これは同じ性質であるが、分析に於ては他の又は更に明かな現象を作るのである。何と

なれば或る關係を分析狀態に或は分析者の人格に造り上げる事が出來、又同時に露はに思ひ出すべき抑壓物を、眼前に再經驗することが出來るからである。自我抵抗も亦然し乍ら全く異つた性質であつて、罹病から生じて且つ自我の中の徵候關係に基いたものである。これは或る滿足或は慰籍を放棄することに對する反抗に一致したものである。第四種の抵抗は――エスの抵抗――吾人が恰も完成の必要に向つての責務としてこれを作つたものである。第五の抵抗は超自我の抵抗であつて、これは最後に認めたもので、最も不明なものであるが、然し必ずしも最弱のものではなく、罪惡意識或は懲罰願望に基いてゐるやうであつて、分析による各結果及び其後の治癒にも抵抗するものである。

b　リビドーの變化による杞憂

この論文での不安の考へ方は、私が今まで正當と見做してゐたものとはいさゝか違つてゐる。以前には私は不安を、不快の條件下に起る自我の一般的反應と見なし、その發現の如何に必要かを說明せむとしてかう云ふ假定を下しておいた。卽ち現實神經症を研究して見た結果、確實になつたのだが、自我から撤回されたリビドー(性的亢奮)或は自我に使用されなかつたリビドーは、不安と云ふ形式となつて直接的に放射せられる、と。が、これらの種々な定義は十分に辻褄が合はないこと、又寡くとも相互が相互から必然的に生じないことは、誰しも見逃がし得ぬ。それのみならず、不安とリビドー

との間には特殊の密接な關係があるらしく思はれて來、これはやはり不快反應としての不安の一般的性質とは調和せざるものである。この説明への抗議は、自我を以て不安の唯一の場處となす處の傾向から發したので、故にこの抗議は『自我とエス』の中で試みた如くに精神裝置を分割した結果の一つである。以前の考へ方では、抑壓された本能亢奮のリビドーを、不安の源泉として認めると云ふ風であつたが、新らしい考へ方によれば、むしろ自我がこの不安に對して責任をもつことになる。故に自我不安、或は本能(エス)不安と云はれてゐる。自我は非性慾化されたエネルギーで働くが爲めに、新しい考へ方では、不安とリビドーとの間の密接な關係は弛んでくるのである。望むらくは、少くともこの矛盾を明かにし、何處が不確實なのかの輪廓を明かにし得むことを――。

ランクの主張、即ち余が自ら最初に注意した如く、杞憂の感情は出產過程の結果で、又當時經驗した狀態の反復であらうといふ事は、杞憂問題の新しい研究に必要となつて來る。彼の獨得の外傷としての出產の説明、その放射反應としての杞憂狀態の説明、外傷を常に完全に『アブレアギーレン』する試驗としての各新しき杞憂感情の説明、これらを問題にして余は論を進行させる事は出來なかつた。杞憂反應はそれをその背後の危險狀態に歸還させる必要が此處に生じてくる。此の要素の移入と共に觀察に對する新しき見地が生じて來るのである。出產は、其後に生ずるあらゆる危險狀態の原型とな

つたもので、それは抑壓された存在形式と進歩せる精神發達との新條件の下に生ずる。彼等の眞の意味は、然し又危險に對する原型的關係に限られてゐた。出産時に受けた杞憂は、今時一つの感情狀態の原型となつてゐる。その感情狀態は他の感情の運命を分たねばならなかつたものである。この感情狀態は、根原的狀態に類似した狀態に、不合理なる反應形式として（最初の危險狀態の時には合理的であつたに拘はらず）自動的に再生するか、さもなくば或は自我がこの感情に就いての力を得て、自らそれを再生し、危險に對する警戒として使用し、又は快不快機制の關係を喚起させる方法として使用するのである。杞憂感情の生物學的意義は杞憂が危險の狀態に對する一般的反應として認められる處に存する。杞憂場所としての自我の役目は、杞憂感情を必要に應じて發する機能を持たされた處に確認される。その杞憂によつて將來の生活中に二種の根本的な方法が指示される。その一方法は危險狀態がかの出産に類似して發生した時に無意志的に自動的に常に經濟的に正しく處理されるものである。他の方法は、斯樣な危險狀態がその回避を要求せむが爲めに脅威した時のみに、自我から生じたものである。この第二の場合には、自我は云はゞ接種（インプング）を受けると同じやうに杞憂を受ける。それは輕い病氣發生によつて重い發作を免がれる爲めである。（譯者曰、接種とは豫防接種、豫防注射の意にして、それによる輕度の熱發等の輕い罹病に依つて、重病を免れるものである）。この苦痛の經驗を或る

意味即ち信號としてのみに見做す傾向が明白である時には、所謂危險狀態が生き生きとして出現する。如何にしてこの際に種々なる危險狀態が相次いで發生し、然かも根原的に相互に連絡してゐるかは、既に一々說明された事である。恐らくは吾人が神經症の杞憂と現實の杞憂との關係の問題に觸れるならば、杞憂の解釋に更に一步を進めることが出來ようと思ふ。

既に主張したる如くリビドーが直接に杞憂に轉移する事は、此處に於て吾人の興味を薄くして來たのである。然し吾人がこの事に觀察を向けるならば、多くの例を區別することが出來る。即ち自我が信號として現はす處の杞憂に就いて、彼はこれを考慮に加へてゐない。從つて又抑壓の移入によつて自我が動搖するやうな總ての危險狀態をも考慮に加へてはゐないのである。それ故に抑壓された本能のリビドー的纒綿は、吾人が轉換ヒステリーの際に明かに見るごとく、他に向けられて、杞憂に轉移したもの、又は杞憂として放射されたものとして經驗されるのである。これに反して危險狀態に就いてこれ以上の討論がなされる時には、概して異つた說明の下されてゐる杞憂發生の例に吾人は出會するであらう。

c　抑壓及び防禦

杞憂問題に關する研究中、余は一つの概念を――或は謙遜的に云へば、一つの言葉を再び使用した。

それは三十年前余が研究の當初に於て專用したものであつたが、其後に至つて捨てたものであつた。これは防禦作用といふ言葉であると思ふ。(一) 余はそれを抑壓といふ言葉によつて起る結果に置き換へたが、然し兩者の關係は依然として不明であつた。余は今思ふに、この言葉は、あらゆる技巧に對して共通の記號法でなくてはならぬ事を確めたならば、防禦といふ昔の言葉に復歸させる方が、確かに有利である。自我は場合によつては神經症になりうる自身の葛藤の場合にはこの言葉を用ひてゐるが、同時に抑壓は、一定の斯かる防禦方法の名稱に止まつて居り、その名稱は吾人の研究方針に從つて最初好く知られてゐたものである。

註(一) 防禦神經精神症(全集卷一)を參照。

又、術語の單なる改訂は完成されてよいことであり、又これは新しい觀察方法の、或は吾人の見解の擴張の表示でなければならない。防禦といふ言葉を再び使用すること及び抑壓といふ言葉を制限する事は、古くから知られた事實だが、然し二三の新しい意味の發見によつて得られた事實を今日は加算してゐる。吾人はヒステリーによつて抑壓と徵候形成に關する最初の經驗をなした。即ち吾人は亢奮的經驗の認識內容、病的思考構成の觀念內容は忘却され、記憶の復活は閉鎖されるといふ事を認め、且つそれが爲めにヒステリー的抑壓の主特徵は意識する事が妨碍される事であることを知つたのであ

る。其後吾人は强迫神經症を研究して、この症の感情の場合には病的事件は忘却されるものでない事を發見した。卽ちこれらは意識されてはゐたが然し未だ理解する事の出來ない方法で『孤立』にさせられてゐたものであつて、その結果、ヒステリー性健忘によると殆んど同樣な狀態に陷つたのである。然し乍らこの區別は吾人の說を是認させる爲には餘り大き過ぎるが、强迫神經症が本能の要求をやめせる爲めに用ふる機制は、ヒステリーの場合と同一のものではあり得ぬらしいのである。更に進んだ研究によつて、强迫神經症の場合には、自我の反抗の爲めに本能活動が早期のリビドー時代に退行するといふ事を敎へられた。この退行は抑壓を無用とはしないが、然し明かに抑壓と同じ意味で作用するのである。吾人は猶ヒステリーに於て認めた逆纒綿が亦强迫神經症の際にも反應的自我變化として自我保護に特別重大なる役目を爲してゐる事を認めた。そして『孤立させること』といふ仕組に注目したのである。この仕組みに就いては吾人は未だ報告する事は出來ないが、これは直接の徵候表示を作つたもので、魔術的と云はれる『抹殺』の仕組である。この否定的傾向に就いては何らの疑點は有り得ないが、然し『抑壓』の機制とは少しも類似してはゐないのである。斯ういふ經驗が、防禦といふ古い言葉を再び持出す立派な理由となつたのである。卽ちこの言葉はすべての他の機制と同じ傾向で——本能の要求に對する自我の保護——說明することが出來、且つこの言葉には『抑壓』を特別の場合とし

て包含する事が出來るのである。吾人の研究が深くに進んで、防禦の特殊の形式と一定の感情との間に、例へば抑壓とヒステリーとの間に、緊密な關係狀態を明かにし得たといふ可能性を考慮する時には、斯かる命名の意義は昂められてくる。吾人の期待は更に他の意味深き關係狀態の方へも向けられる。精神裝置が防禦の他の方法を修得する爲には、自我とエスとの鋭い差異の生ずる以前が、超自我の構成される以前が、これらの編成期に達した以後よりも容易であるべきだと思ふ。

B

杞憂に關する補遺

杞憂感情は二三の性質を示して居り、それらの研究には猶進んだ説明を要する。杞憂は期待といふ事に明かな關係をもつてゐて、即ち何物かに對する杞憂である。それには定まつてゐないといふ性質及び對象が無いといふ性質が結合してゐる。正しい言葉使ひは、その言葉が對象を發見した時は、その名を自ら變更して、次いでその名を恐怖で置換へるのである。杞憂は更に危險に對する自分の關係以外に、神經症に對する他の關係を有して居り、その説明に就いては吾人が永い間努力してゐるものである。こゝで何故に總ての杞憂反應は神經症的でないか、何故に吾人は常態よりも多數にこれを認

めるかといふ問題が生じる。最後に現實杞憂と神經症的杞憂との差別が根本的評價を要求する。

吾人は最後の問題から出發しよう。杞憂の反應から危險の狀態へ逆行することで吾人の論は進歩してゆく。これと同樣な變更を現實杞憂の問題にして取扱ふならば、その解釋は容易である。現實危險は、吾人の認め得る危險であり、現實杞憂は、それと知られてゐる危險に對する杞憂である。これに反して神經症的杞憂は、吾人に認められない危險に對する杞憂である。神經症的危險はそれ故初めに、探求されねばならず、それは本能危險であると分析は敎へた。吾人がこれらの自我に知られてゐない危險を意識に上すことが出來るならば、これと同時に、現實杞憂と神經症的杞憂との差別は削除されて、後者を前者の如く取扱ふ事が出來るのである。

現實危險には二つの反應を擧げた。卽ち感情的のものである杞憂發生と及び保護作用とである。恐らくは本能危險の場合でもそれは生ずるであらう。吾人は合目的なる兩反應の共同作用の例を認めてゐる。それは、一方の反應が他方の反應の侵入に對して信號を與へるのである。然し又、不合目的な例をも知つてゐる。それは一方が他方を犧牲にして擴がつてゆくといふ杞憂痲痺の例である。

斯ういふ場合もある。それは現實杞憂と神經杞憂との性質が混合して現はれてゐる場合である。この危險は旣知の現實のものであるが、然しこれに對する杞憂は異常に大きく、我々が考へるよりも更

に大きいものである。これらの多數には、神經症的の成分が現出してゐるのである。然しこの例は何等の新原則をもつたものではない。それは分析によつて、既知の現實危險に未知の本能危險が結合したことが明示されてゐるのである。

若し吾人が杞憂を危險に逆行させることに就て不服ならば、更に説明しよう。危險狀態の意味、即ちその中核は何であるか。それは明かに危險狀態の大きさに比較して吾人の强さの評價、危險狀態に對して吾人の無救濟の認容、現實危險の場合の物質的無救濟、本能危險の場合の精神的無救濟である。吾人の判斷は其際に實際爲された經驗から推論されるであらう。即ちその評價の誤つてゐないのは、その結果には關係ないことである。吾人は斯かる無救濟から受けた狀態を外傷的狀態と名づけてゐる。これによつて外傷狀態を危險狀態から分割するに好い根底としてゐるのである。

今若し無救濟より起る斯くの如き外傷的狀態が期待されずして、むしろ危險狀態が期待される時には、それは我々の自已防衛に於ける重要なる進步である。斯樣な期待を爲さしむる條件をもつてゐる處の狀態を稱して危險狀態と云ふのであつて、これに對し杞憂信號が發せられるのである。これは斯う云ひ現したい。即ち余は無救濟の狀態が惹起されることを期待してゐた。或は現在の狀態が以前に受けた外傷的經驗の一つを余に想起させることを余は期待してゐた。故に余は外傷を避くる機會のあ

る限りは、この外傷に先鞭をつけて、恰もこれが眼前にあるやうな態度を採りたいと思ふのである。それ故に杞憂は一面は外傷の期待であり、又一面は外傷の緩和された反復である。吾人が杞憂に就いて思ひ浮んだ二つの性質は斯くの如く種々なる起原を有してゐるのである。是等が期待に對する關係は危險狀態に屬して居り、危險狀態の不定性(ウンベスチムトハイト)（譯者曰、危險の原因の不明なる事）及び對象の無い事は無救濟の外傷性狀態に屬して居り、無救濟は危險狀態に於て先鞭をつけられるのである。

發達順序に從へば、杞憂――危險――無救濟（外傷）と綜括する事が出來る。危險狀態は既知の、思出されたる、期待されたる無救濟の狀態である。杞憂は外傷に於ける無救濟に對しての根原的反應であつて、その外傷は斯くて後に危險狀態に於て、救濟信號として再生されるのである。被動的(パッシーブ)に外傷を受けた自我は、その外傷を弱めて再生して、能動的(アクティーブ)に變じてそれを繰返し、その外傷の有樣を自發的のものにしようといふ希望をもつてゐるのである。この現象は、小兒が總べて自己に苦痛な印象に對してはこれと同樣な態度を採つて、その印象を遊戲の中に再生してゐることを吾人は認めてゐる。この方法で被動性(パッシビテート)を能動性(アクティビテート)に轉ずる事によつて、小兒は自己の生活印象を精神的に操縱せむと欲してゐるのである。若しこの事が『アプレアギーレン』の意味であり得るならば、吾人はそれに就いて最早少しも反對する處はない。斯く決定する事は何であると云へば、無救濟狀態に於ける杞憂の起因から、そ

の期待即ち危險狀態へ移る杞憂反應の最初の轉移である。それから次いで危險から危險の條件即ち對象消失及び旣に說明された對象消失の變形(モディフィカチオン)物へと、更に進んだ轉移が起るのである。

幼兒の Verwöhnung『甘たれた我が儘』は、對象消失の危險が——無救濟のあらゆる狀態に對する保護としての對象——あらゆる他の危險よりも增强されたといふ不幸な結果である。それ故これは精神性の無救濟の如くに運動性の無救濟を固有の特徵としてゐる幼兒時代に立還る事を喜んでゐる狀態なのである。

今迄には現實杞憂と神經性杞憂とを區別して觀察する機會がなかつた。吾人はこの區別を知つてゐる。現實危險とは外界の對象から脅威されるものであり、神經的危險は本能要求から脅威されるものである。この本能要求が幾分でも現實的である限りは、神經的杞憂も亦現實に基いてゐるものと認定されるのである。杞憂と神經症との間に存する特に密接なる關係の外形は、自我が本能危險に對して杞憂反應の援助を籍りて、外界の現實危險に對すると同じやうに自衞してゐるといふ事實によつて認められる事を吾人は諒解した。然し精神裝置の不完全なるが爲にこの防禦活動の方向が神經症へ向ふのである。本能要求が屢々(內部の)危險にのみなるといふ證據をも得たのである。何故ならば本能の滿足は外界の危險を招くやも知れず、さうすると內部の危險は外界の危險を代理する譯だからである。

又一面には外界（現實）の危險は、これが自我に對して意味を持つに至つた時には、内部化された事になる。即ちこれは無救濟を經驗した狀態に關する關係で知られねばならない。(一) 外界から脅威する危險を本能的に知覺する事は人間にはない。或はあつても極めて少量であるやうに思はれる。幼兒は往々生命の危險を招くやうな事を行ふので、之を保護する相手は缺くべからざるものである。外傷的狀態のやうな場合には、それに對しては無救助であるから外界と內部との危險や現實危險などが一緒になつて來る。自我は或る場合では苦痛を避けようとしないで受けて居り、他の場合では少しも慾望を滿たさいで蓄積してゐる事は、經濟的狀態から見れば兩者の場合は同一であつて、運動的無救濟が精神的無救濟で表現されてゐるのである。

註（一）ある危險狀態には、それが正しい危險狀態として見做されてゐるものゝ中に、本能杞憂の一部が現實杞憂に附隨してゐるといふ事は確かに有り得べき事である。すると自我から脅威されて滿たされずに退いた本能要求は、被虐待性の本能、即ち自分に向けられた破壞本能であらう。恐らくこの事は、杞憂反應が過大で無目的で痲痺的に陷つたといふ場合を明かに說明し得る。高處恐怖症（ヘーエンホビー）（窓、塔、斷崖）はこれに由來して居り、そのものゝ神祕的な女性的な意義は被虐待性に近いものである。

早期の小兒期の不可解なる恐怖症は、此の處で猶一度說明する必要がある。それらの一つ——孤獨、闇黑、未知の人——は、對象消失の危險に對する反應として解き得た。其他——小動物、雷鳴等——

に對しては恐らく次のことが教示される。卽ち現實の危險に對して先天的に準備されたものが、萎縮して遺物となつたのである。この現實の危險は、他の動物の場合には明かに構成されたものである。人間にとつては對象消失に關するこの太古の遺物の一部が存する事は合目的のことである。若し斯かる小兒恐怖症が固着して、次第に强くなり、後年に至るまで取去れない場合には、それはその內容が本能要求と結合したものであつて、叉內部の危險の代理になつたものだといふ事が分析によつて證明される。

C

杞憂、苦痛及び悲哀

感覺機制の心理學では、次に述ぶる如き臆病なる見解には、最も考査的なる判斷を加へるやうな必要は極めて僅かより存在してゐない。次のやうな場合には問題が起る。杞憂は對象消失の危險に對する反應になると云はねばならなかつた。今は旣に對象消失に對する斯かる反應を知つてゐる。それは悲哀である。然からばそれが何時杞憂になり、何時悲哀になるか。悲哀に就いては吾人は旣に以前に研究した事があつたが、(二) ある性質は全く不可解であつて特殊の苦痛として存在してゐる。對象よ

り離別する事が苦痛である事は、それにも拘らず吾人には自ら理解できるやうである。すると益々問題は複雑してくる。卽ち、對象から別離することは何時杞憂となり、何時悲哀となり、何時恐らくは單に苦痛となるか。

註（一）悲哀とメランコリー（全集卷五）參照。

この質問に對して解答を與ふる事は、何等の希望を有してゐないことを吾人に直ちに公言する。この際に吾人は自ら二三の區別及び二三の意味を發見することで滿足しようと思ふ。

吾人の出發點は、理解したと信ずる一つの狀態に再び立返るであらう。それは自分の母の代りに、知らぬ人物を眺める哺乳兒の狀態である。それは對象消失の危險を意味せる杞憂を示してゐる。然し杞憂は實に複雑であり且つより精細なる議論が必要である。哺乳兒の杞憂に就いては何等疑問はないが、然し顏面の表情と啼泣の反應とを見ると更に尙苦痛を感ずることが認められる。哺乳兒の場合には將來區別されさうな二三のものが共存してゐるらしい。彼は一時的の見失ひと永續的の消滅との區別とが未だ出來ない。卽ち哺乳兒は一度母を見失ふと、恰も最早や二度と見る事が出來ないやうな風に振舞つて、そして繰返して慰藉されむことを望み、遂には母を斯く見失ふ場合には、直ぐ後に又見ることが出來るものだと悟るに至る。母は斯くの如く哺乳兒に向つて必要なる知識を豐かにさせ、子

供の前でよく行ふ遊びで顏を隱したり、顏を見せたりして喜ばせるやうな事をする。而して子供は失望を伴はない所謂思慕の情を感ずる事が出來るのである。

子供が母を見失とふいふ狀態は自身の誤解であつて、子供にとつては少しも危險狀態ではなく、むしろ外傷的狀態であつて、更に正しく云へば、この機會に子供が母から要求を滿たして貰ひたいと欲するならば、それは外傷的狀態である。若しこの要求が現實に無いならば、これは危險狀態に變ずるのである。自我自らが導く最初の杞憂條件は、それ故に知覺消失のそれであつて、對象消失のそれに等しく見做されるものである。戀人の消失は未だ觀察されてゐない。其後の經驗によつて敎へらるゝ處では、對象は存在するが、然し子供には惡い事になり、遂には對象側の愛の消失が、遙かに强い新しい危險と杞憂條件とになるのである。

母を見失ふことから生ずる外傷的狀態は、出產の外傷的狀態に比して、その區別點に於て差異が認められる。その當時には見失はれるやうな對象は存在してゐなかつた。而して杞憂は唯一の反應として存在したものであつた。其後に滿足狀態が反復されて、母といふ對象が作られたのであつて、その對象は今は欲望の場合には、强い『思慕的』とも名づくべき纒綿を受けるのである。この變化に對して苦痛の反應が關聯してくるのである。苦痛は、それ故に對象消失に對する本來の反應であり、杞憂は

危險に對する反應であり、その危險は、對象消失そのものが更に危險に轉移する場合に於て、その消失から招いたものである。

又、苦痛に就いて吾人は多くは知らないが、その本來の確實なる內容として、次の事實が存在してゐる。若し末梢に於て侵入して來た刺戟が、刺戟の防禦柵を突破して絕え間なき本能の刺戟の如く作用し、これに對して刺戟された部位を刺戟より撤回する處の有力なる筋肉活動が、無力になるやうな場合には、卽座に且つ通常、苦痛が成立するといふ事實である。若し苦痛が皮膚からでなく、內部の器官から發する時には、その狀態には何等の變化は無く、それは單に內部の末梢部分が、外部の末梢の代理となつたに過ぎぬものである。小兒は明かに、斯かる苦痛の經驗を作る機會を持つてゐる。それは自ら慾望した經驗とは無關係なものである。これらの苦痛の成立條件は、對象消失とは少しも類似して居らず、又小兒の思慕狀態に於ては、苦痛に對して本質的なる末梢刺戟の要素が完全に失はれたものである。且つ又無意味でない事は、言語は內部の、精神的の、苦痛の概念を作つたといふ事であつて、對象消失の感覺は全く肉體的苦痛に比肩するものであるといふ事である。

肉體的苦痛の際には、高度のナルチス的とも云はるべき苦痛なる肉體部位の纒綿が生ずる。これは常に增進し來つて、云はゞぶち撒けたやうに自我の上に働きかけて來るのである。我々は內部器官の

苦痛の場合には、空間的な、斯樣な肉體部分とは異つた觀念を得るものだといふ事は知られてゐる事である。これは他の場合には全然意識的觀念とはならないものである。又注目すべき事實は、他方面の興味から起る精神的轉向の場合には强度の肉體的苦痛は存在しない事で（この場合無意識に存在してゐると云つてはならぬ）、これは苦痛なる肉體部位が、精神的代理者に集中して纏綿したといふ事で說明されるのである。さて、此の點からして苦痛感覺は精神的領域への轉嫁が許されるといふ類推法（アナロギー）が存在するやうに思はれる。見失つた（消失した）對象の思慕纏綿は、その儘靜止すべき性質でない故に、益々强力に成長して、傷つける肉體部位の苦痛纏綿の如く、それと同樣なる經濟的條件を作り、肉體苦痛の末梢的制限を顧慮する必要などは無くなるのである。肉體苦痛から精神苦痛への移行はナルチス的から對象纏綿への變更に一致するのである。慾望から高度に纏綿された對象觀念は、刺戟から纏綿された肉體部位の役目を演じてゐるのである。纏綿機制の持續性と無禁制性とは精神的無救濟狀態と同じ樣な狀態を惹起する。若し、かくの如くにして生じた不快感覺が、杞憂といふ反應形式を採つて現はれないで、えも云はれぬ特殊の苦痛の性質を帶びるに至つたならば。これに就いては一つの要素が責任を帶ばねばならぬ事は明かである。それは未だ猶十分なる說明を要求されなかつたが、纏綿關係と結合關係との高い水準であつて、そこで斯かる不快感覺に導かれる機制が完成されるのであ

る。

吾人は更に對象消失による他の感覺反應である處の悲哀を認めてゐる。然しその說明には最早何等の困難もない。悲哀は現實試驗（レアールプリューフング）の影響の爲めに生ずるのである。現實試驗は、人が對象から分離せねばならぬといふ事を、必然的に望んでゐるものである。何故ならば、對象から分離しないといふ事は成立たぬ事だからである。悲哀はそれ故にその作用としてやつてゐる事は、對象から斯くの如く退去して來たものを、その對象が嘗て高度の纒綿の相手であつたやうな、さういふ狀態に連れて行かうとする事である。この分離の苦痛的性質は、對象との結合の解かるべき狀態が再生してゐる間は、高度の、滿たされない對象の思慕纒綿といふ事でもつて、上述の說明と同じに說明されるのである。

『性慾論・禁制論』終

昭和六年三月二十日印　刷
昭和六年三月廿五日發　行
昭和十五年九月二十日第五版

フロイド精神分析學全集

（性慾論・禁制論）

定價金壹圓八拾錢

譯　者　矢部八重吉

發行者　和田利彦

印刷者　龜谷良一

東京市本鄉區眞砂町三十六番地

印刷所　日東印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區通三丁目八番地

株式會社　春陽堂書店

振替東京一六一七　電話日本橋五一番

[illegible]

フロイド精神分析學全集

性慾論・禁制論

矢部八重吉譯

精神分析學研究所

春陽堂

フロイド
精神分析學

性慾論・禁制論

精神分析學研究所

矢部八重吉譯